
家族or兄妹orカップル？

kubo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族○r兄妹○rカップル?

【NZコード】

N5468D

【作者名】

kubo

【あらすじ】

伊集院聖慈は伊集院家3人兄妹の長男。聖慈を中心とした伊集院家の家族とのやりとりを書いていきます。時にほのぼの、時にシリアス、時に恋愛要素も入れればいいなあと思つております。

第一話 兄と妹

今1組の男女が向かいあつている。

「お前は俺が守る一命を懸けて」「カット～～！」

その場に男の声が響き渡る。
その声を発した男が一人に歩み寄つてくる。
この現場の監督だ。

「いい演技だつたよ、雲さん」「ありがとうございます」「それに比べて・・・」

監督は男に冷たい視線を送る。

男の名前は伊集院聖慈、17歳だ。

7歳のときから芸能界が働いている。
働きだした当時は人気子役として人気がでたが段々下降気味である。

「す・・・すいません」「しつかりしてくれないと困るよ、聖慈さん」「雲さんより7つも年上なんだか」「は・・・はい」「これは主演を優慈さんに変えたほうがいいかな」

優慈といつのは最近人気の若手俳優だ。
そして世間には知られていないが聖慈の3つ離れた弟でもある。

「え、ほんとに頑張りますから勘弁してください」

「それなら態度で答えてほしいな」

「は・・・はい」

「明日は10時から撮影だからな、遅刻すんなよ」

監督はそういうて離れていった。

一気にどつと疲れが体に襲ってきた。

肉体的な疲れよりも精神的な疲れだが…

「はあ～～～」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「雲・・・現場ではそう呼ぶなつていつてるだひつ」

「いいじやない。誰も聞いてないんだから」

共演者の雲は優慈と同じく聖慈の妹だ。

彼女は優慈と同時にデビューした人気のアイドルだ。

彼女と優慈は聖慈の現場に遊びに来てたところをスカウトされた。両親も何も言わずに自由にさせてくれた。

「そりゃ セうだけど・・・」

「どうしたの?」

「べつに・・・」

「嘘ばっかり。いつもの元気はないじゃない」

「そんなことはないよ」

「嘘よ」

「そんなことないっていつてるだりーーー」

「そんなんに怒らないでよ」

聖慈は話を終わらせようと現場から控え室に戻り、足で歩き出した。

その後ろを雲が小走りでついてくる。

「で、なんでついてくるんだ?」

「雲、今日お兄ちゃんの家に泊まるよ」

「はあ? なに言つてるんだ」

聖慈は16歳の頃から一人暮らしをしてくる。理由としては家では自分の時間を持てないという理由で、両親に説明したが優慈と雲に比べて仕事が少ないので家にあまりいたくないのだ。

「だつて今日優慈お兄ちゃんと一人つきりなんだもん」

「じゃあ、俺とだつたら一人つきりでもいいのか?」

「うん。べつにいいよ。だつて優慈兄ちゃん変な田で見てくるんだもん」

聖慈は歩くのを止めた。

自分の弟が実の妹に変な誤解を持たれてるらしい…もう一度聞きなおしてみた。

「どんな田だつて?」

「こやうじこ田」

やはり聞き間違いではないらしい…

まったく優慈は何をしているのやら…

別に無理に帰そうともしないのが聖慈の優しさなのかただ妹に甘いだけなのかは分からぬ。

「まあ、部屋はいっぱいあるし、いつか

「ありがと」

「じゃあなんかコンビニで買つてくるから先に家帰つてる」

「じゃあ雲が作つてあげるよ」

「え、お前料理作れんの?..」

「もちろん!..」

聖慈は本気で驚いている。

17になる自分は料理ができないといつに10歳の妹が料理ができるといつのだ。

しかも、雲の顔を見ると自信満々といつ顔をしている。

「ふ~ん、まあ期待しないでまつてゐよ」

「あ~、ひど~い。雲のこと信じてないなあ?..」

「信じてる信じてゐ」

「なりよし」

一人は聖慈の部屋に向けて歩き出した。

第一話 妹の一画

一人は聖慈の住んでいるマンションに着いた。
聖慈の住んでいるマンションは3F建てのマンションで聖慈の部屋
は2Fの壁際にある。

「うつわ~、きたな~い」

「しかたないだろ。そんな暇ないんだから」

雪は聖慈の部屋に入るとすぐに顔をしかめた。

一応眠る場所だけは確保してあるが汚いのは確かだ。

聖慈は元々綺麗好きな性格だがそんな気も起こらないほど毎日疲れてるのだろう。

「雪がやつてあげるよ」

「いいよ。自分でやるよ」

「いいから先に材料買つてきてよ。冷蔵庫の中身空っぽなんだもの」

「もう一週間ぐらいかえつてないからな」

雪は冷蔵庫の中を見ながら言った。

聖慈の冷蔵庫の中にはお茶類しか入つてなくこれではさすがにごとの料理人でも料理を作ることができない。

聖慈はこの一週間、ドリマの口ケ等の打ち合わせなどもあり家には帰らず口ケ現場の近くに住んでいる他の人の家に泊まりこんでいた。近いのと料理をしなくていいといつ一つの点から聖慈はその選択肢を選んだ。

「その間雪が掃除しててあげるから」

「しかたないなあ」

聖慈は近くのスーパーに零に頼まれた材料を買いにいった。

スーパーまでは片道5分と近場だが聖慈はあまりスーパーに買い物にいくことがなかつた。

自炊をしないので帰り道のコンビニで弁当を買うからだ。

聖慈は零に頼まれた材料のメモを片手にスーパーの中を歩き回つた。普段使用しないのでどこに何があるか分からずあちこちを歩き回らないと材料を集められなかつた。

聖慈がやつと全ての材料を買って部屋に着くと零の手によって別の部屋のようになつた聖慈の部屋が出迎えた。

「あ、お兄ちゃんお帰り」

「うつわ～、お前そりにうといひはしつかりしてゐなあ

「えつへん」

「お前が家にいたら助かるんだけどなあ

「え・・・」

零は床に落ちてる服をきりんとたたみ、本も本棚にアイウエオ順にならべていた。

ここまで綺麗にしてるとは聖慈も思つていなかつたので驚いてた。

「こういう家政婦でもいたらなあ～」と思つて声に出しただけで特に深い意味はないのだが零の反応がおかしかつた。が零を気にするよりも自分の腹の減り具合のほうが勝つた聖慈は零に材料を渡した。

「腹減つた。早く飯

「あ、うん。ちょっとまつててね

零は台所に材料を持つて料理の仕度をはじめた。

聖慈は零の後姿と自分の部屋の変わり具合をみて自分の妹の意外な一面を発見した気がした。

(雪のうこう家庭的なところがあるんだな)

第三話 兄の部屋

雪が食事の仕度をしてる間聖慈は居間に寝転がつてTVを見ている。その姿はすでにしづらんである。

するとTVの音とは違つかる音がテーブルから聞こえた。テーブルの方を見ると雪の携帯が震えていた。ディスプレイには『優慈兄ちゃん』と書いてあるので掛けってきた相手はどうやら優慈らしい。

「雪、携帯がなってるだ。優慈か？」

「え、いま手が離せないからお兄ちやんで〜」

雪のほうをみるとそんなに忙しい風には見えないので忙いことよりも出たくないというのが正解のようだ。

先ほどのやうどりを見ても雪が今優慈と関わりたくないのが分かる。仕方なく聖慈は電話に出ることにした。

「やれやれ、もしもし」

「え、兄貴・・・なんで雪の携帯から兄貴が?」

「あ? 雪が俺んちで泊まるつていうからいま飯作つてもいいてるんだよ」

「え・・・もう、わかった」

やつこいつと優慈は電話を切つた。

「なんだあいつ?」

電話を終わったのを確認してから雪が心配な顔をして聖慈に近づいてきた。

やはり忙しくて手が離せなことこの上ない事だったようだ。

「お兄ちゃん？優慈兄ちゃんなんて？」

「しりねえ。すぐにきつたからよくわかんねえ」

「そう・・・」

「それよりも飯まだか」

「もうすこしだからちよつとまつてて

「やれやれ」

雪が台所に向かったのを確認して聖慈はまたTVを見だした。
聖慈がTVを見始めて10分ぐらいたつてから雪が料理を持って手
一ブルに近づいてきた。

どうやらメニューはオムライスのようだ。

「はーい、おまたせ」

「遅いんだよ」

「なに、その態度」

「いいからはやくよ」

「はい、どうぞ」

聖慈は雪が作った手料理を口に含んだ。

かなりおいしそう

味が母親の味に似ているので家で母親に教わってるのだらう。
10歳が作ったとは思えないほどおいしかった。

「どう、雪の手料理？」

「うん、まあまあかな」

「え・・・」

正直言つておにしいのだが聖慈はからかいつもりで『まあまあ』と

答えたのだが零は本気に思つたらしくかなりショックを受けている。

聖慈は慌ててフォローをした。

「うそうそ。かなりうまい」

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

零は少しの間、聖慈の顔をじっと見ている。
まだ、疑っているようだ。

だが、聖慈の手が止まらな」ところを見て安心したように自分も食べ始めた。

その姿を見て聖慈は笑みを浮かべた。

「ああ～うまかった」

「久しぶりに家庭の味を食つたな」

「じゃあ風呂沸かしてるから風呂はいってきていいいわよ」

「じゃあお先に」

零が洗い物をしている間に聖慈は風呂に入つた。

一体いつの間に風呂を沸かしたのか全然気が付かなかつた。

聖慈が買い物に行つたときにはまだ風呂を沸かしていなかつたので食事の間に沸かしたのだろう。

聖慈はTVを見ていた自分が恥ずかしかつた。

「ああ～、いい湯だつた」

「じゃあ零入るね」

零が風呂に入ったので聖慈は零の寝床を作ることにした。

聖慈の部屋は聖慈が普段寝ている部屋と先ほど料理を食べた部屋、それに加えて友人達が来たときに泊まれるような部屋がもう一部屋

あるのでやにこに雲の布団を敷く」とした。

雲が風呂からあがつてきたので聖慈はその部屋に雲を連れて行った。

「雲は」の部屋使えよ

「え・・・」

「どうした

雲が少し寂しそうな顔をしたので聖慈は聞いてみた。

「お兄ちゃん」と回り部屋がいい

「だつてベッドひとつしかねえぞ」

「やう・・・」

さらに雲が寂しそうな顔をしたので聖慈はため息をついた。
確かに雲は10歳だが家ではもう一人で寝ている。

一体何が寂しいのかは知らないが普段一緒に寝てやる機会が減つて
るのは確かなので雲の願いを聞いてやることにした。

「・・・じゃあお前俺のベッドを使えよ。俺床で寝るかい」

「え、ここなの?」

「仕方ないだろ。お前がわがままこいつ

「じめんね」

「や、早く寝るが」

聖慈はやうこいつてこの部屋に敷いてある布団を自分の部屋に敷きな
おした。

それから聖慈は布団に入った。17歳が寝るには少し早いが10歳
の雲には遅い。

雲に合わせて聖慈ももう寝ることにした。
雲は聖慈のベッドにうれしそうにもぐりこんで聖慈のほうを見てい

る。

聖慈は雲の視線に気がついていたが田をつぶつて寝ようとした。
5分ぐらいしてから寝息が聞こえたので雲のほうを見てみるとすでに雲は幸せそうな顔をして夢の中に入っている。
聖慈はその顔を見て笑みを浮かべて聖慈も睡眠をとった。

朝、7時ごろに聖慈は田が覚めた。

『何故自分が床で寝ているのか』

最初疑問に思つた聖慈だが昨日雲が泊まつたことを思い出した。

雲が眠つていた自分のベッドを見てみるとすくにもぬけの殻だった。

「あれ、雲？」

聖慈はとつあえずリビングのほうに出てみた。
すると雲がすでに食事の仕度をしていた。

扉の音に気づいたのか雲が聖慈のほうを向いた。

「あ、お兄ちゃん。おはよ！」

「お、朝飯か」

「うん。味噌汁はお兄ちゃんの好きな豆腐だよ」

「お。やつたー」

「さ、早く食べて準備して」

「ゆっくり食べさせりょ」

「もうそんな時間はないわよ」

確かにゆっくりする時間はない。
一人はすぐに食事をして家をでた。

第四話 兄と弟と妹

口ヶ現場の近くで聖慈のマネージャーと雫のマネージャーと合流した。

この一人のマネージャーは聖慈と優慈と雫が兄妹ということを知っている数少ない業界の人たちだ。

四人が現場に着いたときスタッフがざわざわ騒いでいた。

聖慈と雫は顔を見合させた。二人のマネージャーも何も聞かされていないようだ。

とりあえず聖慈が近くのスタッフに何かあったのか聞いていたら現場に監督の声が響いた。

「今日から主演変わります」

「え・・・」

「お、聖慈さん・・・」

「主演の優慈さんです」

聖慈も雫も一人のマネージャーも何も聞いていないので呆然としている。

しかも、自分の代役が優慈だ。

聖慈はすぐに監督にかけよつた。

「ちょっと待ってください。何ですか?」

「優慈さんから頼まれたら断るわけにはいかんだろ。だから君はくビッてうこと」

監督は聖慈から離れていった。

スタッフも皆聖慈に哀れみの目を向けるだけで反論しない。

雫やマネージャーが何か言つてるが無視してようようと現場を後に

した。

現場では監督の声が響いている。

「じゃあ撮影開始します」

「ちよつと待つてください」

雲は監督に駆け寄った。

その顔には怒りの表情が浮かんでいる。

「どうしました？ 雲さん」

「相手が変わらなければ辞退します。私は聖慈さんだからお受けしたんですね」

「でもね、雲さん。もつ時代は聖慈さんより優慈さんなんですよ。優慈さんが視聴率も取れますし・・・」

「それでも私は聖慈さんのはうがいいんです」

「失礼します」

雲は聖慈を追つて現場から立ち去つた。

それを見ていた優慈も雲を追つていつた。

雲のマネージャーは顔を抑えているがこいつなるだらうとは思つていた。

雲がこの仕事を引き受けたのは聖慈と競演するからだ。
確かにこの仕事の内容は良い。だが普段会つことのない兄に会える
ので引き受けた感もある。

聖慈のマネージャーと雲のマネージャーは顔を見合わせて苦笑し、
監督の所に向かった。

「雲ーーちよつと待つて

優慈は雲の手を捕まえた。

「優慈兄ちゃん。何?」「

「何つてことはないだろ!なんで辞退なんかするんだよ!」

「私は聖慈兄ちゃんだからこの仕事うけたんだよ」

「だからってなんで断るんだよ!なんで兄貴なら良くて俺じゃあ駄

田なんだよ!」

「どうしてもーもつまつといじよ

「雲・・・

雲はまた走り出した。

優慈はその後ろ姿を見て壁を殴りつけた。

雲は聖慈の後姿を見つけて叫んだ。

「お兄ちゃん!..」

「雲ー?お前撮影は?」

聖慈は雲の姿を見て驚いている。

撮影中のはずの雲がここにいるのだ。驚くのも無理はないだろ。雲の息が整つのを待つて答えを聞き出した。

「断つてきた」

「え、なんで?」

「相手が変わったから」

「だからって・・・」

聖慈は雲がこの仕事をもじりたとき謝ったのを覚えていた。だから共演者が優慈に変わったからといって断るとは思っていないから、共演者が優慈に変わったからといって断るとは思っていないから、

「お前の仕事決まったときスッゴク喜んでたじゃないか。今ならまだ間に合ひつから現場に戻つて監督に謝つて来いよ」

「嫌！」

「何で…？」

「実際思つたより面白くなかったし…。それに…」

「それになんだよ…」

「それになんだよ…」

雲は聖慈の顔を見てくる。

聖慈は雲を現場に戻そうとするが雲は戻らうとはしない。

聖慈は雲に断つた理由を聞き出そうとするが雲は答えようとしない。

一分ぐらいにやめつけた後、雲が聖慈の3歩前に出て振り返った。

「もうここでの…」

「さ、早く帰る？」

雲の顔には後悔の表情は無く満面の笑みを浮かべている。

聖慈は雲の顔を見て説得するのを諦めた。

雲は顔に似合わず頑固な面も持っているのでいつなつたらいででも意見を変えないのが雲だ。

聖慈はため息をついて、雲に聞いてみた。

「帰らつてどこへ…」

「もうあなたお兄ちゃんの部屋へ…」

「また俺の部屋に来るきか?」

「いいじゃない。駄菴?」

当然の「」とく答えた雲。

『一泊だけではなかつたのか?』と思つたが言わないことにした。

「親父やお袋には聞いたのか?」

「まだだけど雲がいたほうがいいでしょ?」

「どうせ、お兄ちゃん彼女いないんでしょ?」

「別にいいじゃないか」

聖慈には確かに彼女はない。

とこりよりも作る気がないのだ。

「雲、掃除もするし、洗濯もするし」

「それに・・・」

「それに?」

「優慈兄ちゃんと一緒の家にいたくないの」

「まあ確かに雲がいたほうが助かるけど

「でしょ?じゃあ決まりね」

「その前に親父やお袋に伝えとけよ」

「うん」

『やはり雲には甘いな』と自分に苦笑しながら聖慈は雲に手を引かれながら自分の部屋に帰つていった。

第四話 兄と弟と妹（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://bilious.yahoo.co.jp/in-this_is_sky

第五話 兄の秘密

雪が聖慈の部屋に住むよつになつて一ヶ月たつた。

聖慈は父親である伊集院章吾に実家に一人で呼び出された。

「ただいま」

「おお、聖慈。久しぶりじゃないか」

聖慈が玄関から入ると章吾が出迎えた。

どうやら母親は出かけてゐる。

とりあえず聖慈は家に上がつてリビングに入った。

「呼び出したのはやつちだな。こつたい何のよつだよ」

「ところで、雪は元気にしているか？」

「よくやつてくれてこるよ。結構あいつ家庭的だな。いこお嫁さんになるよ、あいつは」

「やうか・・・」

やはり娘をほめられるのはまんざりでもなによつて章吾は笑みを浮かべた。

だが、少ししてから迷つたよつな顔をした。

「何だよ。なんかあるのか?」

聖慈が聞くと章吾は少しためらつたが決心したよつて聖慈に向を合つた。

「聖慈、お前は優慈や雪のことを使つてゐる?」

「えりあつてやうこいつ」とだま

「ここからどう思つてゐる」

聖慈は質問の意図が掴めなかつた。

あれだけためらつたのにいざ出てきた質問が『弟と妹』についてだ。何か意図があるのであつたかど分からないので聖慈は正直に答えた。

「普通に弟と妹と思つてゐるけど何でだよ」

「実を語つとお前はもともとこの家の子じゃないんだ」

「はー?意味わからねえよー。ちやんと説明しろよ」

いきなり優慈と雪の話から自分がこの家の子供ではないと聞かされた聖慈は立ち上がりて章吾に詰め寄つた。

章吾に「落ち着け」といわれた聖慈は納得がいかないが椅子に座り章吾の話を続きを待つた。

章吾は聖慈が落ち着いたのを見てから言葉を続けた。

「父ちゃんと母ちゃんは結婚してから10年間子供ができなかつたんだ。そこである託児所について一人養子として家に引き取つてきたんだ」

「それが、俺・・・?」

「そういうことだ」

「そんなでまかせ信じられるかー」

「聖慈!聞き入れろー!もうお前も今日で18だ。だから話した」

聖慈は自分がこの家の子ではないことにショックを隠しきれないようだ。

それもそうだわ。ずっと家族と思っていた人たちが血のつながりがないのだ。

聖慈はまだ納得できていないうつだが優慈達はこのことを知つてのかどうか章吾に問い合わせてみた。

「優慈や雲は知つてゐるのか？」

「言えるわけないだろ。優慈はともかく雲はまだ10歳だしお前を本当の兄のように慕つてゐるしな」

優慈と雲はどうやらまだ知らないうらしい。

とりあえず優慈と雲は本当の兄妹ではない。

自分と雲は今一緒に暮らしてゐるが帰したほうがよさそうだ。それに、あそこの部屋も借りる時に章吾の力を借りてゐるのと自分で家を探さないといけないようだ。

とりあえず今の考えを章吾に伝えてみた。

「じゃあ雲は家に帰すよ。あの部屋ももう出て行へ」

「いや、そんなことはしなくていい。お前にはあの一人のこれからも兄でいて欲しい」

聖慈は章吾の言葉を聞いて少し驚いた。

てつかり『もうこの家から出て行け』と言つてしまつて來てきたのだとばつかり思つていたが章吾が考へていた意図と自分が考へていた意図はどうやら違つらし。

「いいのか？」

「ああ、かまわん。どうせ雲も帰る気はないだろ」

雲の話が出たので、聖慈は章吾に優慈と雲のことを話してみた。何か章吾が知つてゐかもしれないからだ。

「そういえば雲がいつてたぞ。優慈に変な目で見られるつて」「だから、雲をお前に任せなんだ。しっかり相談に乗つてやってくれ

どうやら章吾は何も知らないようだ。

やはりいつか優慈本人に聞いてみないといけないようだ。

「お前には本当に悪いと思つてゐる。でも、お前にしか頼む奴はいな
いんだ。頼む、聖慈！」

章吾が聖慈に頭を下げる。

聖慈は今まで章吾が頭を下げるのを見たことが無かつた。
だから聖慈は戸惑つたが、すぐに自分の気持ちを章吾に伝えた。

「親父・・・分かつたよ。これからもあいつらの兄貴でいるよ。
むしろいさせてくれ。血のつながりはないけどこれまであいつらの
兄貴だったわけだし」

「聖慈・・・ありがと」

章吾は頭を上げて聖慈に顔を見せた。

章吾の顔には安心したような表情が見える。

目には少し涙が見える。

「こまさら他人行儀はやめてくれよ。俺は本当の親の顔を知らない
けど、間違いなく親父・お袋の息子なんだから」

「そうか・・・お前には本当に悪いと思つてゐる」

「もういいって。とにかく、俺の生みの親つて生きてるのか？」

聖慈は自分は章吾の息子だとしこれからも生きてこいつと決めて
いた。

それがいつまでかは分からぬ。優慈や零にもこのことをこつか打
ち明けないといけない。

そのときに一人に拒絶させられるかも知れない。
そうなつたら聖慈はこの家を出て行くつもりだ。

だが、何故聖慈が託児所にいたのかはまだ分かっていない。生みの親が生きてるのかどうかはやはり気になるところだ。

「ああ、それは知らんが、」の前お前のいた託児所に最後の成長記録を送つたけどやういう話題は出なかつたし」

「成長記録？」

「ああ、そここの託児所の決まりで写真にとつて送らなきゃいけないんだ」

「その写真を生みの親に送るらしいんだがその辺は教えてくれないからな」

「そつか。道端で生みの親とあつたりしてな」

「そんなこともあるだろ」

「でも、そん時はきちんとこうつた。俺の親は親父とお袋だつて

「聖慈・・・」

聖慈のその言葉に章吾の田から涙が出てきた。

第五話 兄の秘密（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第六話 家族との食事

それから章吾と聖慈はこれからのことについて話し合つた。
優慈と雲に聖慈のことを話すのは聖慈のタイミングにてまことに元気だといつた。

章吾の口から話すよりも聖慈自身の口から語ったほうがいいこと章吾が言い、聖慈もそれを了承した。

それから普通の世間話、仕事のことや聖慈の家での雲のことなどを話していくと聖慈の携帯が鳴り響いた。
ディスプレイには『雲』と出ている。

「もしもし」

「あ、お兄ちゃん? こまどりへ。」

「今、実家」

「今日お兄ちゃんの誕生日でしょ? 雲が『じゅわわ』って待ってるから早く帰ってきてね」

「お前も今から実家に来いよ。最近忙しいから顔出してないんだろ?」

「そうだけど・・・」

「大丈夫だつて。今日優慈口ケドリツカ行つてゐらっしゃから」

「じゃあ、今から行くね」

「ああ、じゃあな」

そつこつて聖慈は電話を切つた。

やはり雲がこっちに来たがらないのは優慈がいるからみたいだ。

「雲、なんだつて?」

「ああ、俺が今日誕生日だから」おつ作り待つてゐるつてや。だから、お前も帰つてきてみんなで食おつぜつてこうじと」

「で、雲は？」

「優慈はいないつていつたら来るつてさ」

「そつか。じやあどつか外食するか？」

「そづだな。優慈には悪いけど行くか」

「俺が何だつて？」

いきなり聖慈の後ろのドアが開いて優慈が顔を出した。
章吾から優慈は今日は口ケで家には帰つてこなことを聞かされて
いただけに聖慈と章吾はかなり驚いている。

「優慈！？お前今日口ケじやなかつたのか？」
「むじうの不都合で延期だつてさ」

優慈は椅子に座りながら答える。

椅子に座つてから優慈は聖慈に今の話を聞いた。

「で、俺に何が悪いって？」
「い、いや別に」「ん、なんか隠してるな？」
「なんも隠してないって」「そづ。ならいいや」

そのとき玄関から物音が聞こえた。

母親は今旅行に行つてるので今この家に来るのは雲しかいない。

「最悪だ…」聖慈は頭を抱えた。

「ただいま～」

「あ、おかえり」

優慈は久しぶりに妹の姿を見て嬉しそうに答えた。
反対に零は優慈の顔を見て呆然としている。

「え、・・・。優慈兄ちゃん今日口ケジヤなかつたの・・・？」
「なんだよ。なんでみんな、俺がいたらいけないようなリアクショ
ンすんだよ！」

「ちがうつよ。驚いただけだよな。な」

聖慈はなんとか優慈の機嫌を直そうとフオローをした。
零に同意を求める時に優慈に分からぬように合図を送つた。

零は最初何がなんだかわからぬようだつたがすぐに聖慈の意図が
分かつたようだ。

「う、うん。そうだよ。なんで優慈兄ちゃんをのけもの」しなくち
やいけないのよ」

「そうだ。みんな揃つたしどっか外食に行くか？久しぶりに」

「そりだな。寿司なんかどうだ？」

聖慈は話を強引に変えた。

章吾もそれに乗つた。優慈はなにか疑つていたが「寿司」という言
葉を聞いたのをすぐにこの話にのつかつてきた。

「お、いいね。もちろん兄貴のお」りだる？」
「いやいやいや、ここは親父だろ」「
「俺？仕方ないなあ」
「よし、じゃあ出かけるか」
「や、はやく行こつ」

それから準備して家族4人で食事に出かけた。
章吾の車で運転は章吾、助手席には零が、後ろの席には聖慈と優慈

が乗り込んだ。

母親がいないが久しぶりに家族での食事に皆楽しんでいる。時々優慈に話しかけられた雲が戸惑う場面があつたがそのときには聖慈と章吾がフォローをしたのでなんとか何も起こらずに食事を終えた。

店から出て、聖慈の部屋に近い場所で食事をしたので聖慈達は歩いて帰ることにした。

「よし、よく食ったことだし帰るか」

「じゃあ、俺こいつだから。親父こじ郎走様」

「雲も」

聖慈の横に雲が嬉しそうに並ぶ。それを見て優慈が口を開いた。

「お前まだ兄貴の部屋にいるのか?」

「いいじゃないか。雲の好きなよつややらせなやつ。聖慈も一緒にしな」

章吾は雲が家に帰りたがらない理由を知っているので優慈を説得するよつに言った。

本当の理由はさすがに言えないの『聖慈がいるから』といつ理由でなんとか説得をするよつだ。

優慈も雲が聖慈を慕つてるのは分かつてるのでまだ不機嫌だがなんとか納得した。

「おとうさん、ありがとう。や、お兄ちゃん帰ろ」

「分かった分かった。そんなにせかすなよ。じゃあおやすみ」

雪に手を引っ張られるように聖慈は歩きながら章节と優慈に別れ挨拶をした。

店から歩いて10分ぐらいして聖慈の部屋に到着した。

「あ～、よく食った」

「もう、お兄ちゃんだらしないなあ」

「いいだろ。別に」

聖慈は部屋に入るや否やすぐにリビングに横になつた。雪はそれを見て少し呆れたような声を出した。

「はやく寝ないと明日仕事早いんでしょ？」

「やうだな。じゃあおやすみ」

「お休みなさい」

聖慈と雪はそう言ってそれぞれの寝床に入った。

一人とも今は違う部屋で寝ている。

聖慈と雪は満腹の効果も手伝ってかすぐに眠りについた。

第六話 家族との食事（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第七話 兄の決断

次の日の朝、聖慈は仕事に行くために起きて準備を始めた。いつもは聖慈よりも早くに零が起きて朝食の準備をしているが珍しく今日はまだ寝てるらしい。

今日の零の仕事は休みなのを昨日聞いたので今日はゆっくり寝かせるかと思い、静かに準備を終えた。

とりあえず零の部屋に顔を出して、寝ていたら声をかけずに、もしうきていたら声をかけて出て行こうと思いついた零の部屋のドアを開けた。ベッドの上には零が寝ていたのでドアを閉めようとしたが開けたときの音で気づいたのか零が体を起こした。

それを見て聖慈は零に近づいて声をかけた。

「じゃあ、零。行ってくるわ」

「うん・・・お兄ちゃん行ってらっしゃい」

零の声に元気が無い。

よく顔を見るとなんだかだるそうだ。

「零?..どうかしたのか?」

「うん、ちょっと体がだるいだけ・・・」

「ちょっと待つてろ」

聖慈はリビングに行き小物入れの中から体温計を取り出してまた零の部屋に戻った。

「ほり、体温計。ちやんと計れよ」

「うん・・・」

零に体温計を渡した後、薬をもつてこようと思い台所に行つたが最近風邪を引いていないのでどこに薬があるのか分からぬ。手当たり次第に扉を開けたが結局見つかなかつた。

ひとまず冷蔵庫の中にスポーツドリンクがあつたのでそれを持って零の部屋に戻つたときに丁度体温計が鳴つた。

体温計を零から受け取り表示を見て聖慈は驚いた。

「どれ・・・39度! お前なんではやく言わなかつたんだよ!」

「だつて、今日お兄ちゃん大事な仕事でしょ?」

「そりゃそうだけど、ちょっとまつてろ。今親父がお袋に来てもらいうから」

聖慈はすぐに携帯を取り出して実家に電話をした。

朝早いがもしかしたら両親のどちらかが起きてるかもしれないと思つたが電話に出たのは優慈だつた。

「もしもし?」

「もしもし、優慈か?」

「なんだ、兄貴か。なんだよこんな早く」

「親父がお袋は?」

「二人ともいないよ。朝早く旅行に行つたから」

「そうか・・・」

そういうえば昨日そんなことを言つていた気がする。

母親は昨日夜遅くに帰つて、また今日章吾と共に出かけると。

「なんかあつたのか?」

「いや、なんでもない。悪かつたな。朝早く」

「いや、別にいいけど兄貴仕事いいのか? 今日の仕事逃したら当分

仕事ないんだろ?」

昨日食事のときに仕事の話が話題に上り、聖慈は優慈や零、章吾にて
今日の仕事が大事だと伝えていた。

「分かつてるつて。じゃあな

「ああ

そつこつて聖慈は電話を終えた。

「ふう・・・

これは困った。さすがに優慈に零の看病をさせるわけにはいかない。
仕事をとるか、妹をとるか…

「お兄ちゃん、どうしたの?」

「今、家には優慈しかいなって、どうしようか?」

「零、一人でも平氣だよ」

「でも・・・」

「大丈夫だからお兄ちゃんは仕事に行つて。・・・ね

「零・・・」

「ほら、はやく行かないと遅刻するよ」

聖慈は零の声を聞いて決心した。

「よし、決めた

「なにを?」

「いいから」

言葉は「仕事に行つて」と言つてはいるが声や表情は「側にいて欲

しい」といつてゐるようなものだ。

確かに仕事は大切だが「もう辞め時かもしれない」と考えていたし、仕事よりも家族のほうが大事なので聖慈は迷うことなく電話を取り出した。

「お兄ちゃん? いつたい何してゐの?」

「いいから、零は黙つてろ」

聖慈は現場の監督に電話をかけた。

零は心配そうな顔をして聖慈を見ているが、零を安心させるようになつた。

聖慈は笑みを浮かべて頭をなでた。

少しの間ホール音がして監督が電話に出た。

「あ、もしもし伊集院です」

「あ、聖慈さんどうしました?」

「突然で悪いんですけど今回の仕事をキャンセルしたいんですけど···」

「いまさら何言つてるんですか? もひこの世界で生きていけなくなりますよ?」

「覚悟の上です···」

「分かりました。残念です。それでは···」

「本当に申し訳ありません」

聖慈は電話を切つた。

すぐに零が申し訳なさそうに口を開いた。

「お兄ちゃん、零のために···」

「仕方ないだろ? こんな熱出してる妹を放つて仕事にはいけないよ」

「お兄ちゃん···」

「それに芸能界だけが仕事じゃないしな」

これは普段聖慈が思つていたことだ。

別に芸能界だけが全てではない。

それに現在高校生の聖慈は大学にも行きたいと思つてゐた。それを聞いて零が申し訳なさりつに謝つた。

「お兄ちゃん、ありがと」

「さ、そんなのはいいから、何食べたい？おかゆ作るつか？」

「うん。お願ひ」

「よし。ちょっとまつてろ」

聖慈はおかゆを作りに台所に行つた。

家を出るまえに何回かはおかゆを作つたことがあるのでレシピを思い出ししながら料理を進めた。

「やつこえまだマネージャーに電話していなー…」

それに気づいた聖慈はすぐにマネージャーに電話をかけた。

マネージャーはさすがに呆れていたがすぐに何かあつたのかを聞いてきた。

だが、聖慈が理由を言わないのでもマネージャーは何も言わずに了承してくれた。

これからマネージャーは社長に怒られるのだろう。これまでも聖慈のマネージャーは聖慈の尻拭いをしてくれた。それなのにいつも笑顔で聖慈に接してくれた。

電話を切つた後マネージャーに聞こえないだろつが聖慈はお礼を言った。

おかゆを作り零の部屋に戻ると零は寝ていた体を起こした。近づいた聖慈は零に鍋から茶碗におかゆを移し零に渡した。

「せひ、櫛」

「ありがと、お兄ちゃん」

「なにこってんだ、ほら食べれるか?」

「うん・・・あ、あつつい」

「やつか?・・・あつつい悪い悪い」

思つたよつもおかゆが熱かつたの?」「ふ~ふ~」と嚙を吹きかけて
嚙に食べさせた。

「ふ~ふ~、ほり嚙、口開けて」

「うん・・・お~しい」

「むりしなくていいからな、むりくつ食べみ」

「うん・・・」

嚙はゆくつとしたペースだつたが完食した。

熱の割には食欲があるよつて聖慈は少し安心した。

「医者行くか?」

「うん。大丈夫。一日寝れば直るよ」

「せつか。じゃあ、あとでまた顔出すからな。むりくつ寝ていろ」

聖慈はここにいると嚙が眠れないだらうと思二部屋を出て行こうとしたが嚙はその後姿に声をかけた。

「お兄ちゃん、どこ行くの?」

「へ?別にどこにも行かないよ」

「お兄ちゃん、今日は嚙の傍にこって?ね、お願^いい」

「嚙・・・分かった。今日は嚙の傍にこるよ。でもちょっと待つて。氷と水とつてくるから」

「うん……」

聖慈は台所から熱を冷ますために氷水を作り零の部屋に戻った。タオルを氷水に浸し零の額に乗せると零が気持ちよさそうに顔を緩めた。

「よし、これで大丈夫だろ」

「あ～、気持ちいい」

「じゃあ、ずっと零の傍にいるからゆっくり寝る。」

「うん……」

何もしないのはさすがに暇なので小説でも読もうかと思い零が眠つたことを確認して、聖慈は自分の部屋から読みかけの小説を持ってきた。

途中何度も零の額に乗せているタオルを変えたりはしたが、気がついたら聖慈も眠っていた。

聖慈が目を覚ましたときすでに夕方だった。

昼食は食べていなかつたはずなのでかなりの時間眠つていたようだ。

「ん……。あ、寝ちゃつたか」

聖慈は体を起こした。

「零、気分はどうだ？・・・零？」

零に声をかけたが返事がない。てっきりまだ眠つてゐるんだろうとついベッドに目を向けるが零の姿はない。

「零ー？あいつどうにつけたんだ」

聖慈が驚いてると台所のところからこつもと同じ物音が聞こえる。
まさかと思い台所に向かうと病人のまづの霊が料理をしている。
すぐに聖慈は霊の側に駆け寄った。

「霊ーお前なにしてるんだ?」

「なにして夕飯の準備に決まってるじゃない」

「お前は病人なんだぞ!」

「もう大丈夫だつて・・・」

しかし、霊の体が少しぶらついた。

慌てて聖慈は霊の体を受け止めた。

「ほひ、まだ寝てろって」

「だつて、霊お兄ちゃんに申し分けないんだもん」

「霊・・・」

「霊・・・」

霊がそういう風に思つてると聖慈も予想外だつた。

今まで霊にはお世話をなつていい。申し訳ないのはどちらかといつ
と聖慈のまづだ。

「霊が風邪引いたからお兄ちゃん仕事を休んで・・・」

「気にしなくていいって。俺は仕事より家族をとりたいんだ。それ
に、俺はいつも霊には感謝してるんだ。たまには兄らしくさせてく
れよ。・・・な」

「・・・うん」

「せ、もう少し寝とけ」

「うそ・・・おやすみ」

「おやすみ」

そうじつて零をベッドに連れて行つた。

零はまだ体が万全ではないのですぐにまた眠つた。

聖慈は零の頭を撫でて部屋を出て行つた。

それから自分の食事をして、風呂に入り聖慈も眠つた。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん…もう朝よ」

次の朝、昨日の風邪が嘘のよつて元気な零が聖慈を起こしに来た。
今日からまた仕事がないので別にこんなに早く起きなくともいいの
だが零の体調が気になつたので聖慈は体を起こした。

「うん? もう朝か? あ、零氣分はどうだ?」

「おかげさまで、もう大丈夫よ」

「そつか、よかつた」

「お兄ちゃん、ありがと」

「いこつて」

「お兄ちゃん、なにがあつても零の優しくお兄ちゃんでいてね」

「当たり前だろ、俺は零の兄貴だぜ」

「うん…」

そのとき聖慈の部屋のインターホーンが鳴つた。

第七話 兄の決断（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://biologs.yahoo.co.jp/inth_is_sky

第八話 弟の問題、兄の責任

「誰だ？こんな早く。はーい」

聖慈はドアを開けた。

そこには青い顔をした優慈が立っていた。

「兄貴・・・・」

「優慈・・・・?どうした？」

聖慈は優慈に何があつたかを聞いてみた。

優慈は言いにくそうに口を開いた。

「家が・・・俺たちの家が・・・」

「家がどうした？」

「家が盗られた・・・」

「はあ？何言つてんだ？。とりあえず中入れよ」

優慈が何を言つてるのか訳が分からないのでとりあえず家にあげることにした。

家に上がる際も優慈は足取りが重い。

優慈を適当な場所に座らせ聖慈は事情を聞きだした。

「で、なんだつて？」

「だから、家を盗られた・・・」

「家盗られたってどういう意味だよ」

「知り合いに騙されて金をとられて・・・」

優慈の顔を見る限りビリヤー本當りじー。

思つたよりも大きい問題なので雲には聞かせないほうがいいだろ？」
と思い、雲に席を外すように言った。

「……」「雲」

「何、お兄ちゃん？」

「ちょっと外にいる」

「どうして？」

「いいから。すぐ終わる」

「分かった」

雲が部屋から出たのを確認した後、聖慈は優慈に詳しい事情を聞いた。

「で、どういう風に騙されたって？」

「先輩がお金を借りるからっていうから」

「保証人になつたのか？」

「……うん」

「でも、その年では無理だろ？」

「借りた店の人が先輩の知り合いで年をしまかして……」

「借りたのか？」

「……う、うん」

「金額はいくらなんだ？」

「一千万……」

「一千万！おまえそんな事は早く言えよ！」

「それで、そんな金額払えないって言つたら店の人があここの家

売れつて……」

「それでか……」

「どうしよう、兄貴……」

「はあ～」

かなり問題が大きい。

聖慈はどうするか悩んだ。

さすがに一千万程のお金用意するのは不可能に近い。

聖慈の悩んでる顔を見て優慈は申し訳なさそうにしてくる。

「悪気はなかつたんだ」

「当たり前だろー！」

「このことを両親は知つてゐるか優慈に聞いてみた。

「うう」とはやはり親の力を借りいたら心強いからだ。

「親父たちは知つてるのか？」

「いや、まだ旅行から帰つてこないから・・・」

「いつ帰つてくるんだ？」

「明後日・・・」

「明後日か。難しいな」

明後日ではどうしようもない。

とりあえずその先輩と連絡はとれないのだろうか。

「その先輩の携帯は？」

「掛けてもでないんだよ」

「そりやそりやうだうな」

両親が駄目なら次にお金を貸してもらえたそなのは事務所だ。

事務所に頼んでみるよう優慈に言つてみた。

「事務所に金借りれるだけ借りてみるよ」

「それが・・・」

「駄目って言われたのか？」

事務所もこいつこいつにはお金を貸してくれなかつたらしい。
ということは聖慈と優慈の一人でどうにかするしかない。
とりあえず今一人で準備できるお金がいくらかを計算してみる必要
がある。

「そつか・・・。お前今金いくらある?」

「百万ぐらいしかない」

「俺のと合わせて二百万ちょっととか・・・」

「どうしよう・・・」

よくよく考えてみたら事情がおかしい気がしてきた。
確かに保証人になつたのは優慈だ。

だが、まず14歳の優慈に保証人を頼むこと自体が怪しい。

「もしかしたらその先輩とその店員はグルだつたかもな」

「え・・・」

「考えてみろよ。いくら店の人でも未成年を保証人にはさすがにで
きないだろ?」

「でも・・・」

「お前その先輩になんかしなかつたか?」

「いや、別に・・・」

「じゃあ、違うか。とりあえずあと八百万をどうするかだ」

聖慈も優慈も途方にくれてしまった。

今自由に使えるのは自分達のお金だけだ。

「さすがに聖の金や親父たちの金を使うわけにはいかんしな・・・」

「どうしよう・・・」

「とりあえず、その店に連れて行ってくれ」

「分かつた」

「雲！」

聖慈は雲を部屋に入れた。

雲は少し戸惑いながら部屋の中に入ってきた。

「なに？お兄ちゃん？」

「俺たちちょっと出ていくから、締じちゃんとして留守番していろよ」「分かつた。いついらしゃい」

聖慈は雲に声をかけて優慈と共にその問題の店に出かけた。

その問題の店は裏道のビルの中にあった。

「いじだよ」

「いかにも怪しいな」

「とりあえず中に入るか」

「兄貴、大丈夫なの」

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるわ」

聖慈と優慈は店の中に入つてみた。

ヤクザらしい人の姿もポツポツ見えてこれはいかにも怪しいといふ雰囲気が出ていた。

「怪しいな、この店」

「早く店から出よつよ」

「そうだな、ひとまず撤収だ」

一人はとりあえず店から出て表道まで戻った。

聖慈がこれからどうするか考えていたら優慈が話しかけてきた。

「どう、 兄貴？」

「怪しいけど、 証拠が無いから警察に行つても意味無いし。 とりあえずその先輩といつ知り合つた？」

「一ヶ月ぐらい前かな。 めっちゃ後輩付き合いもいい先輩だつたんだけど・・・」

「そうか。 ・・・分かつた。」

1ヶ月間後輩と接して優慈を力壬にして潰そつとしたのだろうと聖慈は考えた。

このまま優慈がお金を返せないのは問題がある。
そのとき聖慈の頭の中に一つの可能性が出てきた。
これで駄目ならもう駄目だらう。

聖慈の顔つきが変わったのが分かつたのか優慈がまた話しかけてきた。

「兄貴？」

「俺がどこにかしてみるわ」

「兄貴。 ホントか？」

「できるかどうかは分からんけどな

「家で待つてろ」

「分かつた」

優慈が聖慈の家に向かっていったのを確認して聖慈は決心した顔をしてある場所に向かつて歩き出した。

「さてと、 行くかな」

聖慈と優慈が分かれて半日後聖慈が残りのお金を持って家に帰つて

また。

「ほら、お金」

「兄貴!?」このお金もやした?」

優慈に残りのハ百万を渡した

優慈はそのお金を見てビックリしているが彦は安心した顔をしてい
る。

「そんな！」と叫んでいいからまだやく払って来い

あいかど
冗貴！」

優慈が約束のお金一千万を持って家を飛び出した。優慈が出て行つた後聖慈はリビングに横になつた。

「ふう。疲れた」

すると零が飲み物を持つて聖慈の方に近づいてきた。

「お兄ちゃん。事務所から電話あつたよ。」「

「文部省圖書审查」

「靈薙はまだ人生一歩から二歩。俺がやかでば一瞬耳こぼす

実際俺が一番辞めても支障が無いしな」

「俺はお前らの兄貴だからな・・・。まあ、ほんとは事務所のみんなから集めた金だから返さないといけないし」

聖慈と雲が話していると玄関から凄い音がして優慈が入ってきた。

「兄貴！今の話ホントか？」

「優慈！？お前聞いてたのか？」

「どうやら玄関で今の話を聞いていたらしく。

「兄貴がなんで辞めるんだよ！辞めるならおれだろー。」

「いいんだよ。お前はその分事務所のみんなに金返せるように仕事しつかりやれよ！それより早く飯にしよう。腹減ったよ」

「兄貴・・・」

聖慈は夕食が並べてあるテーブルのほうに近づいていく。
その後姿を見て優慈は何も言えなくなった。
優慈の手を雲が握った。

「優慈兄ちゃん」

「雲・・・」

雲は優慈を安心させるように笑顔で言った。

「お兄ちゃんは優慈兄ちゃんのことを思つてやつたんだよ。だから、優慈兄ちゃんはお兄ちゃんの分まで芸能界で頑張つてよ。・・・ね」「そうだな。兄貴の気持ちに答えなきやな」

優慈と雲が話してゐのを待ちきれないのか聖慈が一人を呼んだ。

「おー！何してゐんだ。早く食おうぜー！」

「ああ」

「はーい」

優慈と雲が席に座り兄妹3人揃つての食事が始まった。

食事を始めてすぐに優慈が口を開いた。

「・・・兄貴」

「うん?どうした?」

「ありがとう」

「いいって。それよりも俺の分まで頑張れよ!」

聖慈の想いを受け止めた優慈が涙を浮かべながら聖慈に答えた。

「ああ。まかせとけって!」

「このやろー調子に乗りやがって!」

優慈にいつもの調子に戻ったのが分かったので少しお仕置きをしようと聖慈は優慈に弱めのヘッドロックをかけた。

「参った参った!俺の負けだ!」

「まだまだ!」

聖慈も優慈もとても楽しそうに技のかけ合いをしている。
零もそんな二人の兄達を見て楽しそうに笑っている。

久しぶりに兄妹3人に前の笑顔が戻った。

その夜の深夜、聖慈は零が眠つてゐるのを確認してからある話をする
ために優慈の部屋に入った。

第八話 弟の問題、兄の責任（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第九話 兄の独白と弟の言葉

優慈は優慈が入ってきたので体を起こした。何の話をするかはまだ優慈に伝えていない。

聖慈は優慈の近くに座つて優慈の顔を見据えた。

「優慈、お前に話がある」

「何、兄貴」

「実はな・・・」

聖慈は迷つた。

本当にこのタイミングで話していいのだろうか。

まだ優慈に話すのは早いのではないだろうか。

しかし、今日の優慈や零との食事を取つていて聖慈は少し罪悪感を感じていた。

本当の兄貴ではないことを零はともかく優慈には伝えておいたほうがいいのではないか。

しかし：

「なんだよ、もつたいぶつて！」

聖慈が迷つていると優慈がせかしてきた。

聖慈は思い切つて優慈に伝えることにした。

「ああ、実は・・・俺とお前、そして零は本当の兄弟じゃないらし
いんだ」

「は？ちやんと説明しちゃよー」

「はっはっはっはー」

「なに笑つてんだよー」

優慈のリアクションが自分が章吾から聞かされたときと同じなので聖慈はつい笑ってしまった。

「ついつところで聖慈は優慈が義理でも自分の弟だと感じたことが嬉しかった。」

「いやな、俺が親父に聞いたときも同じ反応したからな、つい笑つちました」

「で、どうこいつとか説明してもらおつか？」

聖慈は笑いを止めて真面目な顔をして説明を続けた。

「親父からの説明だと親父とお袋の間には10年間子供ができなかつたらしいんだ。それで、託児所にいた子を一人ひきつとたらしいうんだ」

「それが兄貴？」

「らしいんだけど、親父の話だから詳しい」とがわからないんだ。だから、お前と零は兄弟だけど俺は違つんだ」「だから？」

「え？」

「だからどうしたつていうんだ！」

優慈がいきなり叫んだので聖慈は驚いた。

「兄貴は本当の兄妹じゃなくても俺と零の兄貴だよ、これからも」

聖慈は優慈のその言葉を聞いて本当にこの兄貴でよかつたと思つた。

心には感謝の気持ちで一杯になつた。

「優慈・・・ありがとな。親父にも一人の兄貴でいてくれって頼まれたんだ」

「雲は知ってるのか?」

「まだ、伝える年じゃないだろ」

「まあな」

「俺だつて一歳になつてから伝えられたんだぜ」

聖慈は雲の話になつたので丁度気になつてることを聞いた。
雲をどうこう風に見てるのかをだ。

このタイミングを逃したら聞く機会はもうこないかもしねない。

「そういう雲から聞いたけど・・・」

「ん? なんて?」

「お前、雲のこといやらしこ田で見てるやつこな?」

「は? 違つし。ただ・・・」

「ただ?」

「ただ雲のことがまだ小さいから心配だつたんだよ」

なるほどと聖慈は思つた。

確かに雲はまだ10歳だ。

優慈も雲のれつきとした兄なので雲が氣になつていていたのだつ。

そういうえば聖慈がいるときは優慈は雲のほうを見ていなかつた気がする。

恐らく聖慈がいたので安心していたのだつ。

「へえ~。そういうわけか・・・」

「そういうこと。まあ、雲にそういう風に見られてるとは思わなかつたけどな」

「まあ、兄貴なんてそんなもんだよな」

「そうだな。兄貴はそれに俺も迷惑かけてるしな」

「迷惑はかけられたほうが兄貴にとつては嬉しいけどな」

「まあ、寂しいよな。妹や弟が独り立ちしていくと」

「そりだな……。とりあえず、零ももうそろそろ家に帰すつて親

父にも伝えてくれ

優慈は聖慈のその言葉に疑問を持った。

何故零を帰す必要があるのだろうか。

「零を家に帰すのか?」

「まあな。もうそろそろ俺も妹に頼りっぱなしってわけにはいかんだろ。どうせこれからは受験勉強ばっかだから家事も余裕があるだろ」

「うひー」

「受験勉強?」

「ああ、俺大学に行こうと思つてんだ」

「そうか。分かつた。親父にも伝えとくよ」

「頼むな。さ、そろそろ寝るか」

「そりだな、もう2時だしな」

聖慈は自分の部屋に戻つていった。

部屋に帰り優慈の言葉をもう一度思い出していた。

これからも兄として接してくれるとの嬉しさで胸が一杯になつた。

「じゃあ、兄貴。また今度な

「ああ、また遊びに来いよ」

次の日の朝優慈は聖慈の部屋を後にした。

聖慈は優慈の姿を見送つて部屋に戻ると零が待つていた。

「お兄ちゃん……」

「ん? 霊、どうした?」

靈が聖慈に話しかけた。

「私も帰るよ」

「帰るって家にか?」

「うん。 そろそろ私もお兄ちゃんに会えてるわけにもいかないし」

「そうか・・・」

「また遊びに来てもいい?」

「ああ。 優慈と一緒に来いよ」

「え・・・」

「優慈はお前が思つてみようともちやんとした兄貴だよ。 お前が心配だから見てただけだよ」

その言葉に靈は安心した顔を見せた。

「そうなの?」

「ああ、家に帰ったら優慈に聞いてみな」

「うん。 分かった」

「じゃあ気をつけてな」

「うん。 じゃあね」

そうして靈も聖慈の部屋を後にした。

これからどうなるかは分からぬが聖慈はこれからも優慈と靈のいい兄貴でいよいよと思いつつ、とりあえず大学受験に向けての勉強を開始した。

第九話 兄の独白と弟の言葉（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十話 8年後の伊集院家3兄妹（前書き）

これから第一部開始です。

とりあえず登場人物として伊集院家の面々を書いておきます。

伊集院聖慈… この話の主人公

伊集院優慈… 聖慈の弟

伊集院零… 聖慈の妹

伊集院章吾… 聖慈達の父親

伊集院真美… 聖慈達の母親

設定として聖慈と優慈・零は血のつながりは無いが優慈・零は実の兄妹

第十話 8年後の伊集院家3兄妹

8年後の春・・・

聖慈は26才になつていた。

聖慈は芸能界を辞めた後大学に進学し、ある企業に就職していた。営業として仕事を3年間勤めお得意様も何件か獲得し、営業の中でもトップに近い成績を残している。聖慈自身は自覚はないが芸能界にいたこともあり、なおかつ言動・行動が紳士的といつことで女社員にも人気がある。

優慈は23才になりますます演技に磨きがかかりハリウッドにも進出した。

雪は18才になり高校へも仕事の合間に通つていて、曲も出し今一番人気のある女優になつていた。

聖慈は今日はお得意様に出向いた後は直帰になつていた。
今日は両親に大事な用があるとかで実家に呼ばれた。ちなみに優慈と雪はあれから話し合つたようで一人そろつて買い物も行つたりと仲がいい兄妹に戻つたようだ。

二人そろつて聖慈の家に泊まりに来ることもある。もちろん一人ずつ泊まりに来ることもある。

「にしても、なんだらうな。大事な話つて…。そういうやもつ雪も18だから俺のことを話すのか？」

聖慈は今日の両親の話が何か見当もつかなかつた。

なにしろ昨日電話があり、「必ず来い」と言われ（半ば脅し？）何がなんだか分からぬ状態だからだ。

まあ、とりあえず行かなければと思い歩いていた。

そのとき見覚えのある車が聖慈を追い越した後スピードを落とし30m先に止まった。

聖慈はその車の持ち主が誰か分かつていてるのでその車に近づいた。

「よー兄貴、久しぶりだな」

「おお、久しぶりだな。最近忙しそうだな。今日の仕事はもう終わりなのか?」

「ああ、今日は親父に召集かけられたしな。兄貴もだろ?乗つていけよ」

車の持ち主は優慈だった。

事務所のみんなに借りたお金をきっちり返した後優慈は車を買っていた。

聖慈は優慈の車の助手席に乗り込んだ。優慈は聖慈がシートベルトを締めたのを確認した後車を発進させた。

「にしても兄貴のスーツ姿やつぱ慣れないと

「そうか?これでも4年目だぞ。まあ、スーツでお前とあつ機会も少ないしな

「それもそうか」

「ところで親父から何か今日の話について聞いてるか?」

「いや、何も聞いてねえよ。兄貴は何か心当たりでもあんの?」

「ああ、考えられるのは零に俺のこと話をすんじゃないのかとは思うけどな。零ももう18だしな」

「そういう零は何も知らないんだっけ。すっかり忘れてた。まあ、大丈夫だろ」

「俺もそう思つね。とにかくで・・・」

車の中は世間話になっていた。今の芸能界の事や優慈の仕事のことなどを実家に着くまで聖慈と優慈は笑いながら続けた。

実家に着き、聖慈と優慈は玄関から家中に入った。

「ただいま
「ただいま」

二人が中に入ると奥の方から一人の母親でもある真美がゆっくりとした足取りで玄関までお迎えにきた。

「聖慈、優慈もおかえり。二人一緒だったのね」

聖慈と優慈は家中に入りながら真美の質問に答えた。

「ああ、俺が家に向かつてると兄貴が歩いてるのを見かけてな。拾つて一緒にきたんだ。今日、零は？」
「そうだったの。零は今日久しぶりに学校よ。あ、優慈悪いんだけど車出してくれない？ 買い物行つてきたいんだけど」「ああ、いいよ。じゃあ、兄貴は家でゆつくりしてろよ」「ああ、そうさせてもらうよ。じゃあ、優慈、お袋も氣をつけろよ」「おお、まかせろ」「ええ。」

そういうと二人は家の外にでた。

ひとまず聖慈は喉が渴いてたので台所に入り喉を潤すことにして、冷蔵庫の中から麦茶を取り出しコップに注ぎ一口で飲み干し、もう一回注ぎとする時に庭のほうから車の出る音が聞こえた。

聖慈はその音を聞きながら一杯目の麦茶を飲み干した。コップを流しにおいてふと周りを見渡すとコップや皿の数が少ないことに気がついた。

聖慈が家を出て、優慈も今は一人暮らしをしている。多いときは5

人で暮らしていたが今は両親と聖の3人暮らしなくなっているので、皿の数が少なくなつてるのは仕方がないがそれでも数が少ない。生活できても一人が限度の数になつていてる。

聖慈は疑問に思いながら父親の所に行こうとすると家の電話がなつた。

聖慈が電話に出ようと電話に近づいたときに章吾が居間から通じるドアから出てきて電話を取つた。

第十話 8年後の伊集院家3兄妹（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in-th_isky

第十一話 兄の作戦

「はい、伊集院ですが？・・・おお、暇だぞ。・・・分かった。じやあ今から迎えにいくから」

そういうこと章吾は電話を切った。そして、聖慈の方に向きなおした。

「聖慈、おかえり。」

「ただいま。で、電話誰から？」

「おお、そうだった。零が迎えに来て欲しいんだと。俺の車使って良いからお前迎えに行つてくれないか？」

「ああ、それは別にいいよ。どこまで？高校？」

「校門の近くにいるそうだ。それじゃあ頼んだぞ」

「了解）。ほんじゃ行つてくるわ」

聖慈はそう言つと章吾から車の鍵を受け取り家を出た。

章吾の車はミニシショソンだが運転するのはすでに何回か経験してるので慣れた手つきで車を発進させた。

零が通つている高校は聖慈、優慈も通つていた学校で家から一番近い学校だが、歩いていくには少し遠い場所にある。

聖慈と優慈は自転車で通つていたが零はバスで通つている。

高校と家を結ぶ路線のバスは本数が少ないので時々零を高校まで迎えに行くこともある。

だいたい章吾が迎えに行くが家にいるときは優慈や聖慈が迎えに行くこともある。

家から高校までいつもは20分ぐらいで着くが今日はいつもより車が多く少し時間がかかってしまった。

「まあ、少しごらり遅れても大丈夫だろ」

聖慈は校門の近くに車を止め周りを見たが零らしき人は見かけなかった。

とりあえず聖慈は車から降りてボンネットに寄りかかって缶コーヒーを飲み始めた。

その様子を見て周りの女子高生から熱い視線が送られてるが聖慈は少しも気にしてない。というか気付かず携帯をいじっている。ふと生徒用玄関を見ると零と男子生徒が一人で歩いてくるのが目に留まった。

その男子生徒が馴れ馴れしく零と話してると少しムカついたが零が聖慈に気付いて笑顔を向けたのを見たときに何も考えないようになつた。というよりもその笑顔から目が離せないといったほうが正しいのかもしれない。

零は男子生徒を置いて聖慈曰掛けて走つてきた。聖慈は零の行動が読めていたので腕を広げて待ち構えた。
聖慈の読みどおり零は聖慈の胸に飛び込んできた。腕の中で零は息が切れている。

「なにもそんなに急いで走らなくても」

「だつて、ひさしぶりなんだもん。お兄ちゃん」と会うの。それにまさかお兄ちゃんが迎えに来てるなんて思わないもん。」

「親父に頼まれてな。お前も聞いてるんだろ?なんか大事な話があるつて」

「うん、でも何の話かは聞いてないの。お兄ちゃんは?」

「俺も聞いてないんだ。優慈も聞いてないらしい。とりあえず帰ろうか」

聖慈が零と話してると先ほど零と仲良く話してた男子生徒が「ひらりに向かってきてるのが見えた。

顔には嫉妬の情が目に見えるほどすぐに分かった。

「なあ、雲。あいつは誰だ?」

「え? . . . ああ、山本くん?」のまえお友達になつたの。」

「ふう~ん。 . . . まあ、あいつはそれだけで近づいたわけではないだろ?」

「え? どういう意味?」

「いや、気にすんな」

山本は聖慈たちのすぐ傍まで来ると聖慈をにらみつけた。
その後に雲に向かつて笑みを浮かべて話しかけた

「伊集院? 僕がお前んちまで自転車で送つてつてやるよ。 . . . で、あんた誰? あんた伊集院のなんなの?」

最初は雲に向かつて話してたが後のほうは聖慈に向かつて挑戦する
ように言った。

聖慈はすぐに兄と言つたら面白くないと想い、雲の虫除けも兼ねて
予防線を張ろうと考えた。

「俺? そうだな . . . こいつのことを一番分かつている人で雲は俺
にとつて一番大事な存在つてところかな。な、雲?」

「うん! 私も大好き!」

俺と雲が言つた言葉に周りがざわざわ騒ぎ出す。

元々聖慈と雲が抱き合つたときから周りが騒がしかつたがさりに騒
がしくなつていて。聖慈は山本の顔を見た。

やはりショックを受けているのか顔が少し青白い。周りの男子生徒
も山本と同じような顔をしている。

山本がショックから立ち直ったのかまた聖慈をにらみつけてきた。

やはり先ほどと比べると比較的弱い視線だが・・・

「あんた、社会人だろ？女子高生なんか手え出して良いのかよ！あんた口リコンか！」

「別に口リコンだろうと関係ない。俺は零が大事なんだ。別に女子高生が好きなわけじゃがないしな。零だから大事なんだ。それはこれから一生変わらない。むしろこれからも俺がこいつを守つていいくつもりだ」

聖慈の言葉を聞いてさらに周りが騒ぎ始めた。

傍から聞くとどう聞いてもプロポーズの言葉にしか聞こえないから無理もない。だが、聖慈の言つた言葉に嘘はない。

これから章吾から話を聞くがどんな話でも優慈と零の兄貴でいようと決めてるからだ。

そういうばさつきから零が静かだな、と思い零の顔を見ると他の人から見るとどこも変わっていないように見えるが少し照れてるのが聖慈には分かった。

「少しやりすぎたかな」と思いとりあえずこの場から逃げることに決めた。

零を車の助手席に乗せ聖慈自身も車に乗った。走り出す前に最後のとどめを指すのを忘れずに・・・

「今から零の家に行つて零の両親と大事な話をするんだ。悪いがお前の出る幕はない。じゃあ～な～。」

そうじつて聖慈は車を出した。

第十一話 兄の作戦（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/in-thisky>

第十一話 母の愛

車の中では沈黙が流れている。聖慈は零の様子を盗み見ると少し機嫌が悪そつだと感じた。

「あの〜、零?..どうした?」

「どうしたもこいつしたもないよ。あんな事言つてから。今度学校に行くときこじんな顔をしていけばいいのよ。」

「いいじゃないか、別に。間違つたことは言つてないんだから。な?

「それはそうだけど・・・」

「仲の良い友達だけに俺が兄貴だつてこと伝えればいいじゃないか。それで友達の誤解とけるさ。もし、信じてくれなければ大竹先生に聞けばすぐに分かるつて言えよ。俺がお世話になつた先生だから写真見せてくれるだ。今でもときどき会つたりするしな。酒も一緒に飲みに行くし」

「分かつた。じゃあそつする。」

大竹といつのは聖慈が通つっていたころから高校にいる先生だ。

聖慈が芸能界にいたころから特別扱いせずに接してくれて、芸能界を辞めたときも何も言わずに勉強を教えてくれた恩師だ。今では酒飲みの友達と化している。

とりあえず零の機嫌が直つたことに聖慈は一安心した。

実際聖慈をここまでうるたえさえる事ができるのは零のみだが聖慈や零自身はまだ気付いてない。

とつあえず聖慈は家に向けてアクセルを踏んだ。

聖慈達が家に着くと丁度優慈達が買い物に帰つてきたところだった。聖慈は車を止めると零と一緒に近づいた。

「ただいま。今さつき着いたのか？」

「おかえり。ああ、ついさつきだよ。兄貴は零を迎えてきたのか？」

「ああ、親父に頼まれてな。」

聖慈と優慈が袋を持つて家のほうに向かって歩き始めた。優慈の横を零が、その一人の後ろを聖慈と真美が歩く。歩き始めてすぐに真美が聖慈を呼び止める。

「聖慈。ちょっとといい？」

「何？」

「あんた、零になにかした？」

聖慈は真美の言葉に驚いた。

確かにさつき校門のところでいろいろあつたが車に乗つてる間に零の顔からは照れや動搖は無くなつた。

いや、聖慈には無いように見えていただけなのかもしれない。

「さすが母親だな」と聖慈は感心してまつた。

「まあ、いろいろと・・・。でも何で分かつた？」

「あんた自分で気付いてないの？あんたさつきから零をちらちら見てるでしょ？反対に零も聖慈をちらちら見てるし。これは何かあるつて分かるわよ。で、何したの？」

「ああ～・・・、愛の告白と虫除け？」

「は～、だからね・・・。」

「へ？だからって分かつてたの？」

「まあね。零があんたを見る目が前と違う気がしたのよ。」

「違つてどういう風に？」

「さあね。自分で考えなさい。」

「うひつと待つて・・・」

真美は聖慈を置いてわざわざと玄関のほうへ歩いていった。聖慈はその場で足を止めて考え始めた。

「見る田が違う?今まで兄弟だらう。じゃあ今は?」

真美は聖慈が考へ込んでる姿を見て顔に笑みを浮かべた

(零の田はわしづめ「恋する女子高生の田」ってところよね。まあ、聖慈も妹の他にも違う田で見てるけど気付いてない所を見ると田観なしね。聖慈に「お嬢さんをください」って言われるのも良いかもね。ま、籍をどうにかしないといけないけど。)

真美が笑いながら玄関に入ると優慈と零が玄関で待っていた。
真美が玄関で靴を脱いでも聖慈が入つてこないのを見ると零が真美に尋ねてきた。

「お母さん。お兄ちゃんは?」

「ちょっとね。悪いけど零、呼んできてくれない?」

「え?・・・分かった。」

零が聖慈を呼びに玄関の外に出たのを見計らって優慈が真美に話しかけた。

「お袋。一体何考へてんの?」「べつに〜して言えば家族のことかな

それだけ言つと真美はさつさと家の中に入つてこぐ。その後ろを優慈は納得できない様子で後ろをついていく。

雪が聖慈を呼びに出ても聖慈はまだ先ほど真美に言われたことを考えていた。

「うとうん言こながら考えこんでる聖慈を見て雪は笑みをほほした。

雪は聖慈にゆづくつと近づいて声をかけた。

「お兄ちゃん?」

雪が声をかけても聖慈は聞こえてないのかまだぶつぶつ言こながら考え込んでいる。

雪はムッシュとしながらわからせよつも大きい声で聖慈を覗き込んで声をかけた。

「お兄ちゃん…もーーお兄ちゃんひげーー!」

「うわー?」

今考えていた雪の顔が田の前に出てきて聖慈は驚いた。雪も聖慈がそんなに動搖するとは思つてなかつたらしく、声をかけた雪自身も驚いた。

「雪ー? あれ、お袋は?」

「何言つてるの。もう先に玄関に入つてるわよ。お母さんに頼まれてお兄ちゃんを呼びにきたの。どうりやから向考えてたの?」

「うえー? いや別に、ハハハ・・・・」

「やう・・・・。」

まさか「お前のこと考えてた」とは言えないでの聖慈は困り果てた。とりあえず「まかそつとしたが雪の顔が寂しそうになつていいくのを見せてから荒てた。

「こやいやいや、ホントになんでもないんだって。」

とりあえず聖慈は零を慰めよつと思ひ、零の肩を掴み田と田とあわせながら言つた。

すると、零の顔がみるみるうちに真つ赤になり視線を逸らされた。聖慈は零の顔が何故真つ赤になるのか分かつてないがそれよりも視線を逸らされたことにショックを受けた。

「分かつたから手離して…」

零がそうこうので肩から手を離すと零は走つて聖慈から玄関のほうへ逃げ出した。

視線を逸らされたのと逃げ出されたダブルショックからまだ立ち直れないのか聖慈はその場でただ呆然と玄関のほうを見てるだけだった。

章吾と真美と優慈は居間のほうでくつろいでいた。だが、凄い勢いで零が居間の入り口を空けたので章吾と優慈は驚いたが真美は悠然とお茶を飲んでいる。

「零、聖慈は？」

「え？えつと…・・もつ少しで来るよ。私着替えてくる。」

零はそれだけ言つと居間から出て行つた。章吾と優慈は不思議に思ひ、顔を見合させた。

真美は聖慈がなにかしたんだろうとは思つたが、顔には出さず一人の鈍感な男女を思つてため息をついた。

聖慈が先ほどのショックからなんとか立ち直り居間のほうに入るとそこには着替えた零も含め家族全員がそろつてゐる。

聖慈は真美からお茶を受け取り一口飲みながら零を盗み見ると零と一瞬田が合つたがすぐに逸らされた。

(俺が何したって言つんだよ・・・。完璧に嫌われたな・・・。)

聖慈が落ち込んでるのを見て何故落ち込んでるのかわからない章吾と優慈は不思議に思い、また顔を見合わせた。

真美は聖慈と零を見ながら「しうがない子達ね」と哀れみの目を向けた。

「聖慈? なにがあつたのか?」

「いや、別に・・・。それより話つてなんだよ?」

章吾が優慈に急かされて聖慈に尋ねたが聖慈は答えなかつた。とりあえず聖慈はさつさと本題に入つて今日は早く休みたかつた。

「あ、ああ。実は俺と母さん、外国に行こうと思つんだ。」

「へえ、いいじゃんか。お土産ようしくな。で、何泊するつもりなんだ?」

「いや、外国で暮らそうと思つてるんだ。」

「うえ! ?」

「はー?」

「へー?」

聖慈含め伊集院家3人兄妹は驚きのあまり変な声を出して固まつている。

第十一話 母の愛（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十一話 母の懲案

その様子を見ながら章吾と真美はゆっくりお茶を飲んでる。少しして一番早く復活したのは聖慈だった。

「あ～と、悪いけどもう一回言つてくれないかな？」

「だから、俺と母さんは外国で暮らすことにしたんだ。」

「いやいやいや、何で急にそんなことに？」

「いやな、俺の友達がアメリカに住んでるんだ。んで、俺も来ないかつて誘われたからじゃあ行くわってことで。出発は明後日。まあ、頻繁に帰つてくるつもりだから心配すんな。」

「誰が心配するか！」

「ちょっと待てよ！ 急に決まりすぎだろ……」つ誘われたんだよ？

「え～と、一ヶ月ぐらい前かな。」

「なんでこんな急に言つんだよ！ もっと早く言えよ。」

「いいじゃないか。どうせ止めないんだから。」

「そりゃあそただけでいらっしゃなんでも急すきだらー。」

「ちょっと待つてよ。私はどうするの？」

「ううだよー俺と優慈は一人暮らししてるから良いけど、君はまだすうしやあこひで一人暮らしでいいんじゃないかな？」

章吾のいつた言葉に3兄妹はまた固まつた。

三人とも頭がついていない様子で、今一生懸命整理をしているようだ。

章吾と真美が再びお茶を飲んでる中で一番早く口を開いたのは聖慈だった。

「俺は反対だー君はまだ18の女の子だぞ！」

「俺も反対だ！俺らはともかく雲にはまだ早い！今世間は物騒なんだぞ！」

「んな事いつたって、もつ俺ら向こうに家買つてゐしもつ辞めるとはできんぞ。」

「だからって……」「

聖慈、優慈、章吾の三人が話してゐる中で雲はボーッと何かを考えている。

真美はその横顔を見ながらあることを考えていた。

元々真美は聖慈と優慈が反対するのは分かつていていた。聖慈と優慈はこと雲のことに関しては過保護だ。

雲が一人暮らしするのを許さないだろ？と思つていてがこれほど強く反対するとは考えてなかつた。

最初はなんとか聖慈と優慈を言いくるようと思つていたが聖慈と雲の関係を見てあることを思つた。

「あら、じゃあ雲は聖慈と一緒に暮らせばいいじゃない？」

「うえ！？」

「はー？」

「・・・

「へー？」

真美の言葉を聞いて聖慈、優慈、章吾は変な声を出してまた固まつた。

雲はすでに思考回路がついていつてないようで真美が何を言つてゐのか分かつてないようだ。

「母さん？ それは俺も初耳なんだが？」

「そりやあそでしょ。今思ついたんだから。だつて聖慈と優慈は雲の一人暮らしは反対なんじょ？」

「そりやあそうだけど、どうなつたらそういうことになるんだ？親父だけ行かせてお袋はせめて零が成人になるまで日本にいればいいだろ。」

「あら？ 聖慈は零と暮らすの嫌なの？」

真美のその言葉に零がはつと聖慈の顔を不安そうに窺う。すでに泣きわうな零の顔を見て聖慈ははつと詰まつた。

「やうやあ嫌じやないけども・・・。親父はいいのか？俺と零が暮らしても？」

この言葉にはある意味が含まれていた。

一応戸籍上は兄妹ということになつていて「一人には血のつながりは無い。

それを含めて聖慈は章吾に尋ねた。今まで聖慈は零と兄として生活してきた。

章吾も聖慈を本当の息子として育ててくれた。
だから、零が聖慈の部屋に泊まることがあつても何も言わなかつた。
だが、「『暮らす』ということになると別問題なのではないだろうか」、「もしかしたら章吾は聖慈と零が暮らすのを反対してるのではないだろうか」とその想いが今聖慈の中で芽生え始めている。
だから、聖慈は章吾に尋ねたのだ。「自分の娘が血のつながつてない男と住んでもいいのか」と。

「ま、聖慈となら大丈夫だる。」

章吾は笑つて頷いた。

章吾は聖慈の気持ちが分かつていた。

聖慈が零のことをとても大事にしてゐることも、聖慈の中で零の存在がどれほど大きいのかも。

もちろん雲の気持ちも分かっている。雲が聖慈をどれほど頼りにしてるのか。

優慈も雲のことを大切にしているのは分かっている。だが、聖慈と比べると優慈に任せることには少し不安が残る。雲も優慈よりは聖慈を頼りにしている。だから、聖慈に任せたのだ。

「親父がいいなら俺はいいよ。雲は？俺と一緒にいいか？」

「え？う、うん。」

「じゃあ、そういうことだな。優慈もいいな？」

「ああ・・・」

「なんだ？納得行かないようだな？」

「いや、なんで俺と一緒にいけないのかと思つただけだよ。」

「だつてあんた芸能界で働いてるから家を空けるのはショッちゅうでしょ？それだと雲が一人暮らしするのとかわらないじゃない。聖慈は残業で遅くなつても必ず家に帰るんだし、家を空けるのは出張ぐらいでしょ？だから聖慈に任せたのよ。」

「分かった。」

優慈はしぶしぶといった感じだが納得したようだ。

とりあえず雲の引越しは明日ということになった。

この家はそのまま放置で、一ヶ月に一回はハウスクリーニングに頼むといふこと、章吾と真美は気が向いたら帰ってきて帰つてきたり一回は家族全員で食事をすることを決めた。

雲は自分の部屋へ荷物をまとめて、真美は残りの荷物整理を、優慈は真美の手伝いを始めた。

聖慈は雲を手伝おうとしたが章吾に話があると引き止められた。

第十二話 母の提案（後書き）

いじじまで先もって書いてたのを投稿してましたがこれからは一から創るので更新ペースが遅くなります

ご了承ください m(ーー)m

あとがきはYAHOO!blogにてあります
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/insky>

第十四話 兄と妹の同居生活開始

聖慈は章吾の畳の前に座つた。

「何? 話つて?」

「お前の生みの親のことなんだが……」

聖慈はその言葉に驚いている。

確かに章吾から実の子供ではないと聞かされたときには気になっていたがもう8年も前のことだ。

今更生みの親について何の話があるとこりうるだらうか。

「俺の生みの親がどうかしたのか?」

「この前託児所から連絡があつてな。今更ですがお前をここまで大きく育てていただいてありがとついでござりますつて連絡があつたらしい」

「本当に今更だな……」

今更「私が生みの親よ」なんて言われても困るのが率直な感想だ。

聖慈にとつて親とは章吾と真美の一人なのでこんな話はどうでもいい。

「話はそれだけか?」

「あ、ああ。悪いな引き止めて。」

聖慈が部屋から出て行こうとしたがさつきの質問をもう一度聞きなおそぐと考えた。

さつきは皆いたので一人口りで率直な意見を章吾の口から聞いたかつたからだ。

「なあ、親父」

「うん? どうした」

聖慈は席をたつたがむつて一度座つて章吾に話しかけた。

「本当にいいのか? 僕が零と一緒に暮らしても」

「どうした? またそんなことを聞いてきて?」

「さつきは零がその場にいたからもしかしたら本当のことと言えなかつたんじゃないかなと思って」

章吾が気をつかつたんではないのかと聖慈は考えていた。

章吾はそんな聖慈の姿を見て少し嬉しかつた。

そういうつた大人の気遣いができるようになったのだと聖慈の成長が嬉しかつた。

「さつきも言つたとおり僕はお前だつたら構わないよ
「そつか」

聖慈はその言葉に安堵の表情を浮かべた。
その顔を見て章吾はさらに言葉を続けた。

「お前だつたら零を傷つけたりしないだろ? 零のことを大事に思つて行動もできる。零も聖慈のことを頼りにしてるのは見てて分かるからな」

「まあ……零の泣き顔は見たくないからな
「だろ?だからお前にだつたら任せれるんだ」

章吾の言葉に聖慈はこれから自分の生き方に責任を感じた。
これから自分が零を一番近くで守つていいくことになる。

今までには章吾と真美といつ親がいたから困ったときは一人に聞いたこともあった。

だが、これからは章吾も真美も日本にはいない。

ということは優慈と雫の親代わりとは言わないが支えていくことになるのは確かだ。

聖慈のそんな不安を感じたのか章吾は聖慈に声をかけた。

「そんなに気張る必要はないさ。お前はお前らしく一人を支えていけばいい。優慈ももう一人前だよ。困ったときは二人で力を合わせて雫を支えていけばいいんだよ。誰だって最初から親になれるわけではないんだから」

聖慈はその言葉に救われた気がした。

確かに聖慈は聖慈だ。どんなに頑張つたって章吾や真美になれるわけではない。

だから聖慈らしく一人を支えていけばいいんだと気づいた。

「そうだな。確かに親父の言つとおりだ。俺は俺だ。俺らしく一人を支えていくよ」

「それでいいんだよ。お前は今でも十分一人の心の支えになってるよ」

「そうだといいんだけどね」

それから一人が世間話をしていると準備を終えた雫たちが合流してまた家族団らんの時間が始まった。

聖慈と優慈がふざけあっている。

雫がそんな二人を笑いながら止めている。

章吾と真美が三人を見て微笑んでいる。

そんな時間がその日の夜遅くまで続いた。

次の日の朝、優慈は仕事のため先に家を出た。
優慈を除く家族全員で朝食を食べ、聖慈と雫は家に帰ることとした。

「聖慈。俺の車使つていいぞ。どうせ向こうでは使えないからな」「本当に? じゃあありがたく使わせていただくな。丁度車を買おうかと思つてたし」

章吾から車を譲り受けた聖慈は雫の荷物を車に載せた。

「じゃあ、明日は見送りに行かなくていいんだろ?」「ああ、ちょくちょく帰つてくるからな。別に見送りが欲しい年でもないしな」「確かにそんな年ではないな」

聖慈と章吾が話してると真美と雫が歩いてきた。

「じゃあ聖慈。雫の」とみるじへね
「分かつてるって」
「お父さんもお母さんも氣をつけてね」
「分かつてるよ。じゃあまた今度な」
「ああ。また今度」

そういって聖慈は運転席に、雫は助手席に乗り込んだ。
雫がシートベルトを締めたのを確認して聖慈は車を発進させた。

聖慈が運転している車が見えなくなつた後真美が章吾に笑いながら話しかけた。

「あの一人これからどうなるか楽しみね」

「まあ、兄妹の棟から出れるかが鍵だらうな。後は聖慈の行動一
つだらうな」

「今度帰つてくるときが楽しみね」

そういう二人は仲良く明日に向けての準備をするために家に入つ
ていった。

聖慈と雫は途中で食事の買い物をして聖慈の部屋に入つた。

「じゃあ雫はこの部屋を使つてくれ。自由に使つてくれて構わない
から」

「うん。ありがとう。…あ、お兄ちゃん」

「うん~どうした」

雫の部屋から出て行つとした聖慈を雫が引き止めた。

「これからよろしくね」

「ああ、」

「ひしてまた聖慈と雫の同居生活が始まった。

第十四話 兄と妹の同居生活開始（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十五話 妹の文化祭

聖慈と雫が一緒に生活を始めて一ヶ月が過ぎた。

雫は最後の高校生活を中心とした一年を過ぎた。それで学業優先で女優業をしている。

聖慈と雫は可能な限り一緒にご飯をとるようにして、朝食の時にはその日の予定を話し合つたりしてくる。次の日に朝早く仕事があるときも夕食のとき話すよつとしている。

今日は日曜日。

聖慈は昨日夜遅くまで借りてきたDVDを見ていたので朝起きたのは8時を過ぎたころだった。

聖慈はリビングに向かつたがいつもそのままそこらの姿が見当たらない。

「おかしいな」と思った聖慈だが昨日の夕食のときの会話を思い出して納得した。

昨日の夕食のとき雫はいつひつひつしていた。

「お兄ちゃん。私明日ちゃんと学校に用事あるから朝早い先に食べるね」

「明日は日曜日だろ? なんで学校になんか行くんだ?」

「ちよっとね……」

「ふうへん。まあいいや。帰りはいつになるんだ?」

「まだ分からなによ。友達と遊んだりするかもしれないから遅くなるとと思つ」

「分かった。なるべく早く帰るよつこうよ」

「うん」

聖慈はそのことを思い出して自分の食事の準備して朝食をとった。

聖慈が自分の皿を洗つてると聖慈の携帯電話が鳴つた。

ディスプレイには『智子』と出でいる。

智子というのは聖慈の高校のときの同級生だ。

彼女は聖慈が芸能界にいたときも芸能界を辞めたときも特に気にせず一人の「伊集院聖慈」として接してくれた数少ない友人の一人だ。

珍しいなと思いながら電話に出た。

電話から30分後聖慈は駅前にいた。

智子に電話で呼び出されたのだ。

聖慈が携帯をいじつてると足に衝撃を受けた。

足のほうを見ると5歳ぐらいの男の子が足に引っ付いて聖慈の方を見上げている。

聖慈はその子供のことによく知つてるので抱き上げた。

「陸ー久しぶりだな。今いくつだ」

「もう5つだよ。せいじもげんきだつたか」

「『せいじ』じゃなくて『せいじにいちゃん』だろ」

「おまえなんかせいじでじゅうぶんだい」

二人が話してると陸の母親がこっちに近づいてきた。

「ごめんね、急に呼び出して」

「いや、俺も暇だったから別に構わないわ」

陸の母親は智子だ。

彼女は20の誕生日を迎えるとすぐに結婚し、陸を産んだ。

その智子からの今朝の電話の内容はこうだ。

「今日、私達の高校で文化祭があるらしいんだ。それで、陸も連れて行きたいんだけど伊集院君今日暇?よかつたら付き合つて欲しいんだけど?」

聖慈は雫が今日学校に行く用事は文化祭だったのか。雫の学校での姿を見たことが無い聖慈は一つ返事でOKを出した。

というわけで二人は高校に近い駅で待ち合わせをしたというわけだ。

「じゃあ行くか?」

「そうね。一度催し物も始まつた頃だと思つし」

聖慈と智子の間に陸が入り、聖慈と智子と手をつないだ。
その絵はいかにも「家族」という感じだ。

二人が高校に着くとすでに文化祭は始まつておりそここの高校の生徒や父兄、それに外部の生徒達で溢れ返つていた。

「うわ~、すっげえ人だな」

「私達のときはこんなに人はいなかつたのにね」

聖慈は陸が迷子にならないように肩車をして校舎の中に入った。
聖慈と智子が校舎の中を進んでいくとやけにこつちを睨んでくる男子生徒を見かけた。

「ねえ、伊集院君をえらい睨んでる生徒がいるけど知ってる?」

「いや、卒業してからはあまり来てないしな」

聖慈と智子が話してるとその男子生徒はこつち側に睨みながら歩いてきた。

聖慈と智子の田の前に来ると男子生徒は止まって聖慈を睨みつけながら話しかけてきた。

「あんた妻子持ちだったのか。じゃあ伊集院から手を引けよ」

聖慈はその言葉でこの男子生徒のことを思い出した。

この生徒は以前零を迎えて来たときに聖慈に文句を言つてきた奴だ。確か名前は…山本だつた気がする。

「あんたこの人の奥さん？あんたの田那さん女子高生に手出してるよ」

智子は何が何だか分からないようで聖慈の方を困ったように見てくる。

聖慈はその視線を受けて苦笑いを零した。
そして山本のほうに向き返した。

「悪いけど俺ら來たばっかだからいろんな所を見たいんだ。じゃあな

そういうて聖慈は山本の横を通り過ぎた。智子もその聖慈の後を追つていった。

山本は聖慈の後ろ姿を睨みつけていたがすぐに自分の教室のほうに向かつていった。

智子は聖慈の横に並びながら話しかけた。

「伊集院君、女子高生に手出したの？」

「そんなわけないでしょ。あいつが言つた生徒の名前は？」

「え？ 確かイジュウインって。あれ？ もしかして「そ。あいつが言つてたのは俺の妹の雫だよ」

智子はまだ雫本人に会つたことがないが聖慈や智子の旦那から話は聞いていたので雫の存在 자체は知つていた。

「じゃあ、妹に…」

「なんでそういうかな…。迎えに来たときにもうひとつ虫除けをしただけだよ」

「なんだそうなんだ」

聖慈と智子はそんな言葉を交わしながら懐かしい校舎を見て回つた。

そのころ雫のクラスでは喫茶店を催していた。

女子生徒がウェイトレスとして注文をとり、男子生徒が厨房でコーヒーや紅茶を作るのである。

雫が休憩をとつていると山本が教室に戻つてきた。

山本はすぐに雫のそばにやつってきた。

「おい、伊集院。この前迎えに來てた男が來てるんだ」

「え？ お… 聖慈さんが？」

雫は学校では『お兄ちゃん』ではなく『聖慈さん』として呼ぶようになっている。

この前聖慈が迎えに來てたときの騒動を見ていた友人のアドバイスだ。

その友人の名前は優奈。

彼女は雫の小さい頃の幼馴染で聖慈や優奈とも面識がある。だから聖慈の行動が虫除けと分かり、雫に学校では『聖慈さん』と

呼ぶようにアドバイスしたのだ。

雲は芸能人ということで人気もある。それに加えて、誰にも優しいので勘違いする男子生徒がたくさんいるのだ。
だが、聖慈の行動と優奈のアドバイスによつてその数はだいぶ減つてきてている。山本のようにまだ諦めきれていない生徒もいるようだが。

「ああ、奥さんと子供と一緒にな」

「え？ 聖慈さんには奥さんなんかいないよ」

「お前がそう思つてるだけなんぢやないか？ 現にあいつは女人と子供が一緒だつたぜ？」

雲はその言葉にショックを隠し切れないようだ。

当然聖慈に子供がないことは雲は知つていて。

だが、彼女という存在はいるかどうかはよく分からない。

雲がショックで呆然としていると表で注文をとつていた優奈が雲を呼びに来た。

「雲ー、聖慈さんが来てるよー！」

雲はその言葉にビクッと反応した。

優奈は雲の反応がおかしいことに気づいた。

いつもならすぐに聖慈の所に行くはずなのに何故今日は行かないのだろう…

優奈はもう一度言葉をかけた。

「雲？ どうしたの…？」

「ねえ… 優奈ちゃん。 聖慈さん一人だった？」

「つづん。友達と友達のお子さんと一緒にだつたよ？」

「やつ…」

雲はその言葉にもう一度落ち込んでしまった。

優奈は雲のその落ち込みように違和感を感じた。

とりあえず雲を聖慈さんのところに連れて行かないと言こならないと考えた優奈はもう一度言葉をかけた

「何があつたかは知らないけど聖慈さんは雲が来るのを待つてるよ？私も一緒に行くからさ、ね？」

雲は優奈のその言葉にうつむいていた顔を上げた。

そして前を見ると笑顔の優奈の顔が見えた。

その顔を見て勇気が出た雲は優奈と一緒に聖慈のところに行つた。山本もその後ろをついていく。

第十五話 妹の文化祭（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十六話 妹の誤解

聖慈達は校舎内を一通り見回った後ビニに行くか相談していた。すると智子が雫を見てみたいと言い出した。

「そつとき話に出たから私も見たい。いいでしょ？」

聖慈としては別に断る理由もないのに雫のクラスに向かつた。教室にはすぐに入れた。

聖慈と智子と陸が案内された席に座ると一人の女子生徒が向かつてきた。

「聖慈さん！久しくぶりですね」

「優奈ちゃんも相変わらず元気そうだね」

優奈は聖慈のことがすぐに分かつたようで注文を受けにきたようだ。

「雫は？」

「今休憩中なんです。呼んできましょつか？」

「是非お願ひします！」

二人の会話に智子が割り込んできた。

いきなりの乱入者に聖慈は苦笑いを優奈は驚いている。

「聖慈さん、じゅぢゅの方は……？」

「あ、「めんなさい」。この学校の卒業生です。じゅぢゅは私の息子の陸です」

「雫の話題が出たら会いたいって言い出しても…。悪いけど雫呼んできてくれる？」

「分かりました。ちょっと待ってくださいね。あ、先に注文取りますね」

聖慈と智子はコーヒーを、陸はオレンジジュースを頼んだ。優奈は注文をとりその注文を男子生徒に告げた後、裏に零を呼びに行つた。

「あのな～、お前もう少し考えろよ」

「え？ 何を？」

「知らない人に急に話しかけられたらどんな人でも驚くに決まってるだろう」

「それもそうだね～」

智子はそういうて「あははっ」と笑つてる。

聖慈はそんな智子を見て頭を抱えた。

「これでも本当に一児の母親か？」と思つほど智子は天然だ。

そんな智子の旦那さんを同情する聖慈だった。

「ねえ～まま。ぱぱは？」

「さつきメールしたからもうすぐここに来るわよ

「へ？ いつのまに？」

「伊集院君がさつきの知り合いの子と話してゐる間よ」

聖慈と智子が話してると優奈が零を連れて戻つてきた。後ろには山本もいる。

零の様子が何だかおかしい」とに気づいた聖慈だったがとりあえず声をかけた。

「よお零。なんで今日文化祭だつて言ってくれなかつたんだ？」

「…今まで来なかつたから別にいいかと思つて」

「『』につから電話がなかつたら俺知らなかつたよ」

そう言つて聖慈は智子を指さした。

そんな些細なことでも今の零にはショックが大きい。零が落ち込んだのが分かつた聖慈が零に声をかけよつと思つたとき智子が先に声をかけた。

「あなたが零ちゃんね。話は聞いてるわ」

そういうて零の手を掴む智子に零は呆気に取られてる。そんな零に気づかないのか智子はむりに話を続ける。

「ずつと話は聞いてたけど会つたことないからす『』へ会いたかったのよ」

零はいまだ呆然として智子のほうを見つめた後、聖慈に助けを請つよつな視線を送つた。

聖慈は零に視線に気づいて智子に自己紹介するよつに言つた。

「あ、『』めんなさいね。名前も言わずに。私の名前は……」「あーぱぱだー！」

智子が名前を言おうとしたときに陸が突然立ち上がり教室のドアに向けて走り出した。

その先には一人のスース姿の男が立つていた。
その男は陸を持ち上げ聖慈達のテーブルに近づいてきた。

「悪いな、聖慈。『』いつもを連れてきてくれて」

「別にいいよ。俺も暇だつたし」

「陸がどうしても今日文化祭に来たいつて言い出したからな。智子

「一人だつたら心配だつたからな」

「それで俺に付き添いを頼んだつてことか」

「まあ、そういうことだ」

「ふう〜ん。ん？」

聖慈は周りがやけに静かだなと思った。

その教室にいる聖慈、大竹、陸、智子を除く全員が固まっている。みんな大竹と大竹が抱えている陸に視線が釘付けになっている。

「零? どうした?」

とりあえず聖慈は零に話しかけた。

だが話しかけた零ではなく優奈が口を開いた。

「え〜〜〜! 大竹先生結婚してたんですか! ?」
「まあな」

大竹は耳を塞ぎながら答えた。

「教え子と結婚してしかも子持ち! ?」
「まあ、そういうことだな」

零はそんな二人の言葉を聞きながら智子が聖慈の彼女ではないということに安心していた。

そして今日始めて聖慈に満面の笑顔を見せた。

そんな零の笑顔を見て聖慈も笑顔を見せた。

山本はそんな聖慈と零を見て面白くない顔をしてまたどつかに行ってしまった。

それから大竹と智子の話で喫茶店どころの話ではなくなった。

大竹と智子が出会いなど話を話してゐる間陸は雲に付きつ切りになつていた。

ついには「雲と結婚する」とまで云つてゐた。

これには大竹と智子、聖慈は爆笑し雲は困ったように笑つた。

文化祭終了後、聖慈と雲は近くのレストランで食事をとつた後部屋に戻つた。

風呂に入ろうと立つた聖慈だが文化祭で雲の様子がおかしかつたことがまだ気になつていて、雲におかしかつた理由を聞いてみた。

「といひで、雲？」

「え？ 何？」

「今日なんかおかしかつただろ？ なんかあつたのか？」

「えー？ 別にどうもしてないよ」

雲は「まさか智子が聖慈の彼女かと思つて嫉妬してました」とは言えないのでなんとか「まかそそうとした」。

聖慈は雲が「まかしてるのがすぐに分かつたが重大なことではないのだろう」と思いそのまま風呂に入つていつた。

雲はそんな聖慈の後ろ姿を見て安堵の息をついた。

そして今日智子と別れる際に言われた言葉を思い出していた。

「雲ちゃん。伊集院君のこと好きでしょ？ 頑張つてね

「えー？ 何言つてるんですか！？」

「ん~、じゃあこれから言つことは私の独り言と思つて聞いてね

「…」

「まあね~、伊集院君だけどあんなに女性のことを心配してたのは珍しいと思つてね。妹といつることもあると思つけどそれ以外にもなんかある気はするんだけどな~」

「…」

「…」

「次に零ちゃんだけ、今日私に嫉妬してたでしょ？私には分かるよ）。私もそうだったからね」

「え？ どういうことですか？」

「私も結婚するまでは嫉妬ばつかしてたし、相手は私よりも大人の人でしょ？だからどうしても大人ぶつてしまつのよね。料理を頑張つたりね」

零は思い当たる節があるのか頷いてしまった。

そんな零の様子を見て智子は笑みを浮かべながら話を続けた。

「でもね、あの人があつてくれたの。そんなに急いで大人になる必要はないって。いつでも大人になれるんだから今を大事に生きて欲しいって」

零は智子の言葉に聞き入っている。

さらに智子は言葉を続けた。

「それから私は私らしく生活しようと思つたの。そうするとあの人はそんな私を受け入れてくれたの。だから零ちゃんも零ちゃんらしくしてればいいのよ。伊集院君もそんな零ちゃんも受け入れてくれると思うわ」

「でも…」

「もしかして年の差を気にしてるのなら全然問題ないわ。だつて私と先生は10歳違うのよ。だから大丈夫よ」

零は智子の言葉に勇気をもらつた。

聖慈への気持ちがどういうものかは零自身掴めていないが零らしく生きていこうと思った。

零は智子と連絡先を交換して分かれた。

雲は布団に入った間も智子の言葉を繰り返し思い返していた。

第十六話 妹の誤解（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十七話 兄の事情

雪の高校の文化祭から数週間後たつた。

あれから聖慈と雪は特に何の関係の変化もなく日常を送っている。

聖慈は今営業から会社に帰ってきて食堂で食事をとっている。

いつも雪が弁当を作ってくれるが今日は仕事で朝早くたので弁当はない。

食堂で食事をとっていると友人の彰人が聖慈の方に近づいてきた。彰人は中学、高校と一緒に大学は離れたがまた会社で一緒にになった友人だ。

「よお、伊集院。社食とか珍しいじゃないか」

「たまにはいいだろ」

彰人は軽口をたたきながら聖慈の隣の席に座った。

「お前に頼みがあるんだが…」

「俺に？」

彰人が聖慈に飯を食べながら頼んできた。

この態度を見る限り大事な頼みごとではなさそうなので聖慈は頼みの内容を聞いてみた。

「俺にできることならいいよ。で、何を頼みたいんだ?」

「お前今週の金曜日暇か?」

聖慈は週末の予定を思い出した。

土曜日か日曜日は大竹と智子にもお願いを頼まれているが金曜日は

特に何もなかつた氣がする。

「ああ、今のところは特に何もないけどどうした?」

「実は金曜に合コンがあるんだが……」

「却下!」

聖慈は彰人の口から『合コン』の言葉が出た瞬間に返事をした。聖慈は合コンが大嫌いだった。

以前にも大学のときに合コンに出たことはある。

が、女性陣が付きまとつてくるのが聖慈には耐えれなかつた。

それ以来合コンには行かないことにしている。

「なあ、頼むよ。お前今彼女いないんだし前の彼女だつて合コンで知り合つたんだろ?」

「それこれとは別問題」

確かにその合コンで聖慈は一人の女性と付き合つようになつた。その女性は皿を片付けたりする何気ない仕草が誰かに似てたので好感を持つたのだ。

だが交際を始めてすぐにその女性は聖慈を束縛しだした。

付き合いだして一ヶ月持たず聖慈はその女性と別れた。

聖慈をどうしても誘いたいのか彰人は引き下がらない。

「お前が来ないと女性陣が来ないらしいんだよ。ほら、前に一回俺の友達と街で会つただろ?」

「ああ、そういうえば……」

聖慈はそのときのことを思い出した。

その日は聖慈は彰人と昼飯を食べに外に出た。

そのときに彰人の友人にバッタリ出会わしそのまま一緒に食事をと

つた。

写真も撮られた覚えがある。

「あいつの友達や知り合いにお前の写真を見せたらしいんだ。そしたらお前が来るなら合コンしていいって言つんだよ。なあ、頼むよ」

「やだね」

「頼むつて。俺もその中に好きな子がいるんだ。だからチャンスが欲しいんだ。頼む！」

彰人はそういって頭を下げた。

聖慈はその姿を見て悩んだが、仕方無いとため息をついた。

「分かったよ。ただし条件がある」

「聞く聞く！ 来てくれるならなんでも聞くぜー！」

「少しでも気にくわないことがあつたら俺はすぐに帰るから。それに一次会があつても俺は一次会で帰る。いいな」

「ああ、いいよ」

そういうつて聖慈は合コンの詳しい場所と時間を聞いて食事を終え仕事を戻つた。

彰人はその後姿を見送つて安堵の表情を浮かべた。大仕事を終えた感があるのは間違ひではないだろう。

そして、金曜日の朝。

いつもどおり聖慈と聖は一緒に朝食を食べている。

聖慈は聖にまだ合コンのことを語つてないことに気がついた。今日のことを伝えた。

「聖。今日俺夕食いらないから

「え？ どうして？」

「今日メンバー合わせの合コンに参加することになっているから。合

コンたって言つても俺は酒を飲んで食べるだけ」

「ふうーん。分かった。帰りは何時ごろになりそうなの？」

「遅くとも10時には帰つてくるよ」

「分かった」

そしてまた聖慈と零は食事を続けた。

そしてその日の仕事終了後、彰人は聖慈のところにやつてきた。

「おい、伊集院！ 早く行くぞ」

「そんなに慌てるなつて」

彰人は聖慈を急かす。

反対に聖慈は彰人をなだめながらゆっくり準備をしている。
準備を終えた二人は合コン会場に到着した。

合コン会場は会社近くの居酒屋だ。

聖慈と彰人はのれんをくぐり予約していた席に向かつた。

他の男性陣は主に彰人の大学の友人達だそうだ。

聖慈と彰人が一番遅くに到着したらしくすでに他のメンバーは座っているらしい。

聖慈と彰人の姿が見えたのか見た覚えのある女性が一人を呼んでいる。

「彰人遅い！ 早くこつちよ」

「悪い悪い。こいつが遅くて」

と彰人は聖慈の方を指差して言った。

聖慈はムカツときたが彰人の顔が「頬む」というような顔をしているのでとりあえず聖慈は謝った。

「遅れてごめんね」

聖慈は心にも思っていないことを言いながら今日の相手を見渡した。そこには見たことのある顔が二人いた。
特にビールを持っている一人に聖慈の視線は釘付けになつた。

第十七話 兄の事情（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十八話 妹の事情（前書き）

この話には未成年の飲酒の記述があります。
お酒は20になつてから飲みましょう

第十八話 妹の事情

金曜日、雪はいつもどおり朝食の準備をして聖慈を起しつた。

靈と聖慈が朝食を食べていたら聖慈が思ひ立つたよう云はれてきた。

「雪。今日俺夕食いらないから」

「え? どうして?」

「今日メンバー会わせの合一ンに参加することになるから、会
コンたつて言っても俺は酒を飲んで食べるだけだ

「遅くとも10時には帰つてくるよ」

分かつた

そういうつて朝食を続行した二人は準備を終え聖慈は会社に、雲は学校に行くためにマンションを出たところで分かれた。

雲が教室に着くと山本が一番に話しかけてくる。

「伊集院おはよう！」

一山本春、おはよ「い」

露は満面の笑みで挨拶を交わす。

山本の顔には少し赤みが増した。

山本がまた話しかけようとしたと、忽然に優奈が飛び込んでくる。

朝からハイテンションな優奈に笑みを零しながら優奈にも満面の笑

みで挨拶をする。

「優奈ちゃんもおはよっ」

そういうつて零と優奈は一人で自分の席のほうに向かっていった。途中優奈は山本に「ニヤリ」と意地悪な笑みを浮かべて。山本はその顔にイラッとしながら自分の席に戻つていった。

「零も優奈もおはよー。」

「夏美ちゃん、おはよっ」

そういうつて零は夏美の横の席に、優奈は零の後ろに座る。3人は席が近いのだ。

「ねえねえ、零と優奈今日暇?」

「うん。暇だよ」

「私も何も無いよ」

「じゃあ、合コン行かない?お姉ちゃんに人数合わせに頼まれちゃつてあと二人誘わないといけないの」

夏美が言つには8対8で合コンするが女性陣の人数が足りないらしい。そこで仲がいい友達を誘つよつて姉に頼まれた夏美が零と優奈を誘つたのだ。

「でも、私力レシいるよ?」

優奈には彼氏がいる。

その彼氏は特殊な仕事をしてるのでなかなか会えないが会えたときには物凄く甘えるので特に気にしていない。

「いいつていいつて。居酒屋だけど私達は会費なんかいらないって

言つてるし。ただお食事会と思えばいいんだよ」

「私は別に構わないよ。雫は？どうする？」

「う~ん…今日は聖慈さんもいないし、行くよ」

「一人ともありがとう…じゃあ放課後に私の家に行つて化粧とかしないとね。大学生つてことで行くから」

「うん。分かった」

「オッケー！」

そういうつて3人は今日の合コンの事を話題に話した。

一応聖慈にメールを送つたほうがいいと考えた雫はメールを送信した

「今日私も遊んで帰るので遅くなります 雫」

5分ぐらいして聖慈から返信があつた。

〔了解。気をつけてな 聖慈〕

普段メールなどをしない二人なので新鮮な気持ちになつた雫には笑みが浮かんだ。

その顔を見た優奈は相手は聖慈だと気づき優奈にも笑みが浮かんだ。

放課後3人は夏美の家に来ている。
化粧などを夏美の姉にしてもらつためだ。

「お姉ちゃん連れてきたよ」

「お、夏美。あんたの友達かわいいね」

夏美の姉の春美は雫と優奈を見ながら言った。

「じゃあ、まずは…」の子からしょつか

そういうつて最初に雫を自分の前に連れてきた。

「動いちゃ駄目よ」

春美はそういうつたが、雫は小さい頃からメイクを仕事でしてもらつてるのでじつとしてるのも慣れたものだ。

春美のメイクの腕はプロには劣るがそれでもかなりの腕前だというのは雫には分かる。

「はい、完成！次はあなたよ」

雫のメイクが完成したので次は優奈を相手にメイクをしだした。雫と優奈には可愛い系のメイクを施した春美は満足そうだ。

「うん！私の腕も捨てたもんじゃないわね」

それから服を着替え4人で合コン会場である居酒屋に到着した。4人が一番最初に着いたらしく春美がこれから来る男性陣のことを話してくれた。

これから来る男性陣は友達の大学の友達が多く、それ以外にも一人来るらしい。

雫はこの合コンで彼氏を作る気はないがそれでもどんな人が来るかは楽しみだ。

それから少しづつ女性陣が集まり、女性陣が全員集まつた時点でまだ男性陣は一人も来ていない。

女性陣が集まつて5分後ぐらいたつてから男性陣が集まつてきた。

「遅いわよ！」

「仕方ないだろ。後一人来るから待ってたら先に行つてくれって言つんだから」

「ふう～ん。じゃあ先に始める？」

そういうつて春美は乾杯の音頭をとつた。

零もオレンジジュースを片手に乾杯をした。
男性陣の一人が零に話しかけてくる。

「君かわいいね。年いくつ？」

「じ…21です」

零は危うく「18です」と言いそうになつたが大学生という設定なので21と答えた。
隣では優奈も21として答えてるようだ。

「ふう～ん、じゃあお酒飲もうよ」

「いえ、私は飲んだこと無いので」

「何事も経験だつて」

そういうつて男は勝手にアルコールが入つてゐる飲み物を頼んで零に渡した。

「はい、これ」

「でも、私本当に…」

「一口でもいいから飲んでみてつて。ね？」

零が断つても男は引くきはないらしくどうしても零にお酒を飲ませたいようだ。

仕方なく零が口に含むとアルコールの味はせず、とてもおいしかった。

「あ、おいしい」

「でしょ？」「これ俺のお勧め」

そういうて男は笑顔を見せた。

その笑顔を見て零も笑顔を見せた。

零がそのお酒を飲み終わった後、今度はビールを男は渡した。

「はい、じゃあ次はこれ。ちょっと苦いかもね」

零が一口ビールを飲んだときに春美が立ち上がった。

「彰人遅い！早くこっちよ」

「悪い悪い。こいつが遅くて」

と彰人と呼ばれた人はもう一人の男を指差して言った。

「遅れてごめんね」

そういうて女性陣を見渡している。

そこでお酒を持っている零を見て固まつた。

その男は伊集院聖慈、零の兄だった。

第十八話 妹の事情（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第十九話 兄の怒り（前書き）

この話には未成年の飲酒の記述があります
お酒は20になつてから飲みましょう

第十九話 兄の怒り

聖慈と零はお互い見つめ合つたまま固まつている。その二人を見て彰人は話しかけた。

「あれ？伊集院。彼女と知り合いなのか？」
「まあな」

聖慈はそういうて零のとなりに座つていて男に話しかけた。

「悪いけどその席変わつてくれないか？」
「あ？何言ってんだ？」

「な？頼むつて」

聖慈の言葉は低姿勢だったがその顔には怒りの表情が浮かんでいる。零はその聖慈の顔を見ておびえている。まさか、聖慈と同じ合コンに来るのは思つていなかつたのだ。

「悪いけど変わつてやつてくれないか？」

聖慈と男が睨みあつていると彰人が助け舟を出した。男は彰人に頼まれたので仕方なく席を移動した。

聖慈が零の隣に座つたのを優奈が見かけて声をかけた。

「あれ？聖慈さん。なんでこんなところに？」
「彰人に頼まれてね。人数合わせだよ。ところで…」

聖慈は優奈に笑顔で話しかけていたが零に向直つたときには笑顔

の下に怒りの表情が見えた。

優奈はその顔を見てこれ以上は話しかけないようがにこよひだと思
い食事を再開した。

「 霊さん。 友人と遊んでるはずの君がどうしてこんなとこにいる
のかな？」

「 えっと…、私も友達に頼まれて…」

「 ふ～ん。 じゃあどうして君がお酒を飲んでるのかな？」

「 あのね、その…」

「 うん？ 何？」

聖慈は満面の笑顔を見せて靈に尋問をしている。

それを見て靈はもう逃げれないと思つた。

そこに靈に酒を勧めた男が戻ってきた。

「 お～…靈ちゃんが困つてるだろ？ が～」

「 霊？ こんな奴に『ちやん』づけさせてるの？」

聖慈は男が『靈ちゃん』と呼んでゐのを聞いてムカッと來た。

靈はまだ困つてゐる。

「 霊ちゃん、こんな奴なんか放つとこで俺と一人で抜け出さない？

「 『めんなさい』、それは無理です」

靈はその言葉はすぐに否定した。

そして聖慈に向き合つた。

「 お酒を飲んで『めんなさい』」

「 うん。 分かればいいんだよ。 じゃあこのビールは俺がもううむ」

そういうつて聖慈は零が持っていたビールを飲んだ。

そのビールは零が一口飲んでいたので間接キスになる。

そんなことを知らない聖慈はゴクゴクとおいしそうに飲んでいる。

その横で零は間接キスだと気づき赤くなっている。

男はそんな光景が面白くないようで聖慈に敵意の視線を送っている。

聖慈は男の視線に気づいてるが無視して零や優奈に話しかけている。
そこに女性陣が集まつてくる。

「ねえ、伊集院さんそんな子供より私達と飲みましょうっ♪」
「そうですよ～」

聖慈はそんな女性陣を笑顔で交わしている。

「いえ、俺はここでもうくつこの人たちと食事をしてますよ
「ええ～何ですか！」
「そんな子供のどこがいいのよ～」

その言葉に今までゆっくり食事をしていた聖慈がキレた。

「あなたたち今の自分達の姿を鏡で見てみてください。とても醜い姿を見れるこことでしょうな。私が言ったことが気に障ったのなら謝りますがこの子達を馬鹿にするのは許せない」

そういうつて聖慈は女性陣を睨みつけた。

そして財布の中からお金を取り出して立ち上がつた。

「おいおい、伊集院。もしかしてもう帰る気か？」

「言つたはずだろ？俺は気にくわないことがあつたら帰るって

「いや、だからつて来たばつかで」

彰人が聖慈を引き止めてると零に酒を勧めていた男が割り込んでき
た。

「いいじゃないか、彰人。帰りたい奴は帰らせれば」
「ほら。そういうてる人もいるんだしね」

「おい、伊集院！」

聖慈は彰人が止めるのを聞かず帰る仕度を終えた。

「零。帰るぞ」

聖慈は当然の如く零に帰るよつに言つた。
その言葉にまた男が気に触つたよつで聖慈に詰め寄つた。

「おい！零ちゃんはまだここにいるんだよ！一人で帰れ！」
「悪いけどそれは無理だな。俺は零の両親に零を頼まれてんだ。まあ、零がここにいたいんなら別にいいけどね」

聖慈は零が帰るのかここに残るのか問いかけた。
すでに零の中では答えは決まつてゐる。

「帰るからちょっと待つて」

そういうつて零も帰り支度を始めた。
聖慈は続いて優奈にも話しかけた。

「優奈ちゃんはどうする？」

「一緒に帰つてもいいですか？」

優奈も零と一緒に帰り仕度を始めた。

二人が帰り仕度をしている間聖慈は携帯で誰かとメールのやりとりをしている。

二人の帰り支度を終えたのを確認して聖慈は一人を店から出して彰人と春美に向き合つ。

今まで一人と話してた聖慈の顔とは一転してその顔には怒りの表情が浮かんでいる。

「人数合わせにあの子達を使つていいのか？あの子達の友人もこの中にいるんだろ？」

聖慈に問い合わせられて夏美が手を上げた。

聖慈は夏美にも厳しい視線を送る。

「別に君が何しようと俺は構わない。でも、あの子達をもうこんな場所に連れてくるのは止めてくれ。それから君ももう帰りなさい」

聖慈が言つた事を夏美はコクコクと頷いている。
さらに聖慈は零に酒を勧めた男をにらみつけた。

「おい、お前も断られたのに酒を勧めるのは止める。零は最初断つてたんじゃないのか？」

「確かに断られたがおいしそうに飲んでたからいいじゃないか！もうう21なんだろ！」

聖慈はその言葉を聞いて呆れたように彰人と春美に向きあつた。

「年を誤魔化してたのか？」

彰人は何がなんだか分からぬ顔をしてたので知らなかつたのだろう。

春美は申し訳ないように顔を下げる。

それを見て、聖慈はため息をつき男に向きなおした。

「あの子達は18だ。それにその子も友達だから18だろ」

男はその言葉に顔が青ざめていく。

その顔を見て聖慈は店の外に出て行く。

残つたメンバーは困惑の表情を浮かべている。

彰人が慌てて聖慈の後を追つてくる。

「伊集院！」

聖慈は彰人を振り返つた。

聖慈は彰人は何も知らされていなかつたのだと分かつてるのでもう彰人に対する怒りは無い。

「悪い！俺何も知らなくて…」

「分かつてるつて。さつきのお前の顔見てたら分かるよ」

彰人はその言葉に安堵のため息をついた。

そしてさつきから気になつてることを聞いてみた。

「お前あの子達と知り合いなのか？」

「お前覚えてない？俺の妹の雪」

彰人は昔の事を思い出していた。

そういうえば高校のときに聖慈の家に遊びに行つたときに妹がいた氣

がする。

「ああ、若干うる覚えだけど覚えてるよ」

「さつきの雲だよ」

「じゃあ、もう一人は？」

「あの子も知ってるからな。それに彼氏の事も知ってるし」

彰人はそれで今までの聖慈の行動に納得できた。

あんなに聖慈が女性のことを守るのは珍しいからだ。

「じゃあ、雲たちが待つて帰るわ」

「ああ、悪かつたな。二人にも謝つてくれ」

「了解」

そういうて二人は分かれた。

彰人は聖慈の後姿を見ながら思った。

さつきの聖慈の姿は嫉妬をしていた気がする。

妹を守つてるというよりも好きな人に馴れ馴れしい行動をとる男に

対して嫉妬をしている行動に見えた。

「まさかな」と思いながら彰人は友人達が待つ元のテーブルに戻った。

聖慈は彰人だからこそ全てを説明してくれたのだと彰人は思った。
だからあの友人達に説明してはいけない気がした彰人は頭を搔きながら友人達のところへ戻つていった。

第十九話 兄の怒り（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第一十話 兄の不可解な感情（前書き）

この話には未成年の飲酒の記述があります
お酒は20になつてから飲みましょう

第一十話 兄の不可解な感情

聖慈は雲と優奈が待つてゐる場所に向かつた。

一人はジュークを飲みながら聖慈が来るのを待つていた。

「悪い。遅くなつた」

聖慈は謝りながら一人のそばによつていつた。

「いえ、私のほうこそめんなさい」

「何が？」

「雲を合コンに連れて行つて」

聖慈は優奈が頭を下げて謝つてきたので優奈の頭を撫でながら答えた。

「優奈ちゃんのせいではないよ。雲が断ればよかつたんだから」

そういうつて聖慈は雲に厳しい視線を送つた。

その視線を受け取つた雲はビクつと反応した。

そのとき、見覚えのある車が聖慈達のすぐ近くに停まつた。

それを確認した聖慈は優奈に向きなおして言つた。

「それに優奈ちゃんはこれからお仕置きがあるんだから」

「え？」

優奈が「どうこいつですか？」と聞こうとしたときに車から降りてきた男が優奈に近づいて叫んだ。

「優奈！」

「え？ 優慈さん！？」

優奈の彼氏は聖慈の弟の優慈だ。

1年前から一人は付き合っている。

小さい頃から知っている一人にいつからそういう感情が生まれていたか知らないが一人は両想いとなっていた。

「兄貴からメールがあつて来てみればいいだらうことだ！」

「えつと…」

「優慈、今はその辺にしておけ。とりあえず家に送ってくれないか。俺も零にお仕置きをしないといけないし」

聖慈は優慈をなだめながら零に厳しい視線を送った。
とりあえず4人は車に乗り込んだ。

聖慈と零を降ろした優慈はそのまま自分の部屋に帰つていった。
優奈がどんなお仕置きをされるかは知らないが…

聖慈と零は部屋に入った。

聖慈は部屋着に着替え、同じように部屋着に着替えた零を正座で座らせ聖慈もその前に正座で座つた。

「さて、零

「は、はい」

零はすでに恐怖でおびえているようだ。

聖慈としてはそんなに厳しいお仕置きをする気はない。
少し説教をするぐらいの気持ちだったのだ。

「そんなにおびえないで俺の質問に答えればいいから

雲はそのまま葉につなぎいた。

「まず、何で今俺が怒ってるか分かるか?」

「お酒を飲んだから…」

「まあ、それもあるけど一番怒つてるのは嘘をついたことだ

「あ…」

雲は思い当たつた点があったのだ。う。

聖慈はさらに続けた。

「友達づきあいもあるのは俺だって分かるわ。でもな、遊びに行くとは聞いてたけど合図とは聞いてなかつたぞ」

「『めんなさい。反対されると思つて』

「反対はしなかつたわ。俺だって行つたんだし。だが、嘘をついて行くのはさすがに俺だって怒るわ。しかも、行つたときにはすでに酒を飲んでたし」

「最初は断つたよ!」

「断つて当然。でも、飲んだのは確かだら?」

雲はその言葉に詰まった。

本当の事だから反論の仕様がない。

「とりあえずこれから一切20になるまで外での飲酒は禁止!いいな!」

「は」

「じゃあもういいよ

「え?」

零はこんなに簡単に許してもう一つとは思えていなかつたのでつい声を出してしまつた。

そんな声を出した零に聖慈は意地悪な顔をして話しかけた。

「あつれ～、零ちゃん。もしかしてお仕置きをされたいの？」「違つよ～。でも、あれだけとは思つていなかつたし」

聖慈はその言葉に笑みを零して零の頭を撫でた。

「零はこれ以上言わなくとも別に大丈夫だろ？」

聖慈は零を信用している。

確かに今日のはさすがに堪えた。

でも、聖慈の零に対する信用はまだ消えたわけではない。

それに零を束縛をしたくないのだ。

今の零の年代はたくさんのものを吸収できる大事な時期もある。だからたくさん仕事をして、たくさん仕事を自分で吸収して欲しいのだ。

「これから気をつけけるから
「よし、じゃあもう寝るか」

聖慈はそういうて自分の寝床に入つた。
そして自分の居酒屋での行動を思い出していた。
何故自分はあの言葉にムカついたのだろう。

『そんな子供のどこがいいのよ～』

確かに零が子供といえば子供だ。

だから何故あんなにムカついたのか分からぬ。
それは妹を馬鹿にされたのだと自分で納得した。

だが、何故あの男の行動にもムカついたのだろう。

一つだけ思い当たる感情があつたが聖慈はそれを思い浮かべて苦笑いを零して眠りについた。

その感情の名前は『嫉妬』だった。

男に嫉妬してたのだとは考えたくない聖慈は夢の中に入つていった。

第一十話 兄の不可解な感情（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第一十一話 兄と妹と時々子供

合コンの次の日の朝、零は一人で朝食を食べていた。聖慈に声をかけたが起きてこなかつたので零は一人で食べるにことしたのだ。

休日に聖慈が朝食を食べないことは珍しくないので零は特に気にせず食べている。

零は食べ終えた皿を流しに置き先に洗濯をすることにした。洗濯機を回してゐる間に洗い物をしたほうが時間的に短いからだ。零が皿を洗い終わつたときに部屋のインターホンが鳴つた。

「はい、どうぞまですか？」

「しづくねーちゃん」

「えー？ 陸君ー？」

インターホンから聞こえた声は智子の息子の陸だった。

急いでドアを開けると大竹と智子と大竹に抱っこされている陸が出迎えた。

「しづくねーちゃん！」

陸は大竹から降りて零に抱きついた。

零は何がなんだか分からぬよつて大竹と智子に説明を求めた。

「先生に智子さん、一体どうしたんですか？」

「あれ？ 聖慈に聞いてない？」

「お兄ちゃんに？ 私は何も聞かされてないんですけど」

「おかしいな。頼みごとがあるって言つてたんだけど」

「ちよつと待つてください。今起りますから」

そうじつて雪は聖慈の部屋に入った。

聖慈はスヤスヤ寝息をたてて爆睡していた。

「ちよつとお兄ちゃん！」

聖慈は未だに夢の中だ。

そこに上がってきた大竹が入ってきた。

「悪いけど上がらせてもらつたよ。聖慈はまだ寝てんの？」

「ええ…」

「伊集院。悪いけどちよつと下がつて」

大竹は雪を少し下げ、聖慈の近くに立つた。
そして聖慈の腹めがけてエルボーを繰り出した。

「ぐはー..」

聖慈は今の衝撃でさすがに目を覚ましたが苦しんでいた。
それを見て大竹は笑いながら聖慈に声をかけた。

「聖慈おはよっ

「おはようじやあないですよ。殺す気ですか？」

「お前が寝坊するのが悪い」

聖慈は大竹に口論で勝てる気がしないのです何故大竹がここにいるのか聞いてみた。

「先生、なんでここにいるんですか？」

「なんでお前に頼み」とするからじゃあないか。言つてただ
る?」

そういうえばそんなことを言つてた気がする。

「すっかり忘れてましたよ。でも前日に電話とかくれてもいいんじ
やないですか?」

「言われてみればそうだな。今度から気をつけよう」

大竹は笑いながら言つた。

聖慈はそれを見て「似たもの夫婦め」と呆れたような顔をしている。

「で、俺に頼みたい」とつてなんですか?」

「今日一日陸をあずかってくれないか?」

「何ですか?」

「実はな…」

大竹が言つには今日大竹は大学の恩師のパーティがあるらしい。
それに智子は連れて行くが陸は面白くないだろうし、静かなパーティ
イなので置いていくことにした。

最初は親戚の人に陸のことを頼もうとしたらしげが陸が「しづくね
ーちゃんがいい」と言つたので聖慈と零に頼むことにしたというわ
けだ。

「俺は構いませんよ。零は?」

「私も大丈夫です」

二人ともOKの返事を出したり三人は智子と陸が待つリビングに
戻つた。

零の姿を見た陸が零に駆け寄る。

「しづくねーちゃん！」

「陸君、私達と一緒に留守番しようつか？」

「うん！」

陸と零が話してる間に聖慈は大竹夫婦と話している。

「いつごろ帰つてくる予定なんですか？」

「今日の夜、そうだな… 9時ぐらこには迎えにくるよ

「分かりました」

「伊集院君、悪いけどよろしくね

そういって大竹と智子は出かけていった。

陸は零にべつたりひつついている。

聖慈と零はそんな陸を見て顔を見合させて笑みを零した。

「陸君、じゃあ何して遊ぼうか？」

「えっとね~、サッカーがしたい」

「サッカー？」

「近くに公園があるからそこの行こうか？」

「そうだね」

そういうて聖慈と零は陸を連れ添つて近くの公園に行つた。公園に着くなり陸は零の手をとつて走り出した。

聖慈は陸と手を引っ張られながら楽しそうに笑つている零を見て笑みを零しながら一人について行く。

零と陸が公園で遊んでる間、聖慈はベンチに座つてその姿を見ていた。

いつか自分も家族を作つてひやつて遊んでるのだと思つてゐた。自分で笑つてしまつた。

「聖がこちから側に歩いてくる。

陸のほうを見ると周りの子供達と遊んでいる。

「あ～疲れた」

「楽しかったんだからいいだろ」

「まあね」

聖はそう言つて聖慈の隣に座つた。

聖慈は前もって買っておいたジュースを聖に渡した。

聖はそれを「ク」、「ク」と喉を鳴らしながらおこしそうに飲んでいる。

少しして陸も遊びつかれたのか聖慈と聖のほうに戻ってきた。

聖慈と聖の間に割り込んで座り、聖慈のほうを睨む。

「しづくねーちゃんはまくのおよめさんになるんだぞーせこじはあ
つちにいけー！」

「はいはい、じゃあここのジュースはいらないな

「えー？」

陸は聖慈の言葉に慌てている。

聖慈は意地悪な顔をしている。

聖はそんな聖慈の顔を見て、「渡してあげなよ」とこいつ顔をしていく。

聖慈は陸の顔が泣きそうになつてこくを見てどんなにませても
子供は子供なんだなと笑いながら陸にジュースを開けて渡した。
陸は笑顔でそのジュースを飲んでいる。

聖慈と聖はそんな子供のくるくる変わる表情に笑みを零した。

聖慈たち三人が公園のベンチでゆっくり話してるとある一人の女性

が早足で歩いてきた。

その女性は聖慈達の前に止まつた。

聖慈はその女性の顔に見覚えがあつた。

その女性は聖慈の元カノだつた。

第一十一話 兄と妹と時々子供（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://biologs.yahoo.co.jp/in-this_is_sky

蘭様こちらのほうは誤字ではありません
分かりにくいかもしれませんが『「大竹」と「智子」と「大竹に抱
つこされている陸』』という意味だったのです
分かりにくくてすいませんでした

第一十一話 兄と妹の無意識な行動

その元カノは聖慈に満面の笑みで話しかけた。

「さやあ、聖慈君。久しぶりね。会いたかつたわ」

「俺は会いたくなかったけどな」

聖慈は元カノにどつかいけというニュアンスで答えた。
だがそんな聖慈の嫌味には気づかないのか元カノはさらに話しかけてくる。

「こんなところで聖慈君何してるの？」

「お前には関係ないだろ」

聖慈は雲と陸と楽しい時間を過ごしていたのに元カノのせいで台無しになつた。

その台無しにしてくれた元カノへの怒りは聖慈の顔を見ただけで雲には分かるほどだが元カノはまだ気づかないのか聖慈に話しかける。

「ねえ、こちらは妹さん？私は聖慈君の彼女の……」

「誰が誰の彼女だつて？」

とうとう聖慈が怒りを元カノにぶちまけ始めた。

聖慈がこんなに怒つてるのを雲は見たことがないので驚いている。

「だから私が聖慈君の」

「彼女つて言いたいのか？」

「だつてそうじゃない」

「お前とは確かに付き合つたことがある。だが、もうすでに別れた

はすだ」

「私は別れた氣は無いわ」

「雪、陸。行くぞ。」いつに説明してもムダだ」

聖慈はこれ以上元カノに説明してもムダだと判断し家に帰ることにした。

雪と陸を立たせ歩き始めたときに元カノが聖慈の手を掴まえた。

「どうして？ もうと話しましちよ」

「俺はお前と話すことは何も無い」

「いいじゃない。どうせ暇なんでしょう？」

聖慈は何言つてもムダだと考え元カノを無視して歩き始めた。雪が聖慈の隣に並ぼうとした瞬間に雪を元カノが侮辱し始めた。

「あんたのせいよーあんたみたいな子供が聖慈君に付きまとつてるから聖慈君が困つてるんじゃない！」

「え？」

「あんた、どうか行きなさいよー聖慈君はこれから私と遊ぶんだから

「ら」

そうこつて雪を突き飛ばした。

雪がこけそつになつたが聖慈がこける前に雪を抱きかかえた。

雪は聖慈にお礼を言おうと思い顔を見上げたが声が出なかつた。

それほど聖慈の顔は怒りで満ちていた。

「お前いい加減にしろよ」

「だつてその子がいるから私と遊んでくれないんでしょ？」

「お前が嫌いだから遊ばないんだよー」

元カノはその言葉にショックを受けた様子もなくまだ聖慈に話しかける。

「何言つてゐるのよ。私達は恋人同士なんでしょ？」

「それは昔にとうに終わつてゐる。それからお前は俺がここで何して
るか気になつていたな」

聖慈はそういうつて陸を抱き上げ零の肩を引き寄せた。
いきなり引き寄せられた零は顔が赤いが聖慈は気にせずに元カノに
言つ。

「家族サービスだよ。お前これ以上俺らの時間を台無しにしてみる。
殴るだけじゃ済まないからな」

そういつてそのまま公園を出でいく。

元カノは呆然とその後姿を見送つてゐる。

聖慈は部屋に着いてまず零と陸に謝罪した。

「悪かつたな、一人とも。せっかく楽しい時間を過ごしてたのに台
無しにしてしまつて」

「ううん。悪いのはあの人だよ。お兄ちゃんは何度も邪魔するなつ
て言つてたのに気づかなかつたあの人人がいけないんだよ」

零は聖慈が悪いんではなくあの女人が悪いのだと言つた。
陸はすでに氣にしていないようで零に昼食をせがんでいる。

「しづくねーちゃん。ぼくおなかすいた
「すぐ作るから待つててね」

雪と陸は一人連れ添つて台所に消えた。

二人の後姿を見送つて聖慈はため息をついた。

まったくあの元カノには付き合つていた頃から苦労させられる。

少しでも他の女性と話しただけで嫉妬する。

さらに聖慈が元芸能人と知つていたのだろう。

どうしても聖慈を芸能界に戻したいようで勝手にオーディションに応募をするほどだった。

聖慈はそんなエスカレートしていく元カノの行動に耐えれなくて別れたのだ。

元カノはそんなつもりはなかつたようだが聖慈にはもう気持ちなど残つていらない。

それどころか雪を侮辱したのだ。

かなり鬱憤がたまつているが台所を見ると雪と陸が楽しそうに昼食の仕度をしている。それを見て鬱憤が晴れたようで聖慈にも笑顔が戻つた。

昼食の間も陸は雪に話しかけている。

雪も陸の口の周りを拭いてあげるなどいい母親を演じている。

昼食後、雪と陸はリビングで遊び聖慈は自分の部屋で仕事を始めた。聖慈が仕事を始めたときはリビングのほうが楽しそうに騒いでいたが1時間ぐらいすると静かになった。

仕事が一段落した聖慈がリビングに戻ると雪と陸が手をつけないで幸せそうに眠っている。

恐らく最初に陸が眠り、手をつなげていた雪も睡魔に負けて眠つたのだろう。

聖慈は部屋に戻り毛布を一人の上にかけてあげた。

聖慈は雪の顔を見て笑みを零した。

最近雪の寝顔を見る機会をなくしたから新鮮な気持ちになつたのだ。

そして雲の寝息がこぼれる唇から田が離せなくなつた。そしてその唇に触りうると手を伸ばした。

だが、雲が「うっへん」と寝言を言つたのを聞いたので聖慈は「はつ」と自分の今の行動を咎めた。

聖慈は自分を苦笑し雲とは反対側の陸の隣に横になつた。

雲と陸の寝顔をみていた聖慈だがいつしか聖慈も夢の中に入つていつた。

雲が田を覚ましたときに田の前には聖慈の寝顔があつた。

雲は驚いて声をあげやうになつたが間に陸が寝ていたのでなんとか声を出さずに我慢した。

「何故自分がリビングで寝てるのだらう」と疑問に思つたが陸の寝顔と毎晩の陽気に負けて寝たのだらうと自覺した。

そして起き上がりうと思つたが陸が自分の手を握つてゐることに気づきとりあえず起こさないよううにまた横になつた。

そして自分の田の前にある聖慈の寝顔を見た。

寝顔を見ていると自分の心臓がはやくなるのが分かる。

そして聖慈の顔を触りうと陸が握つている手ではないまづを伸ばして今にも触りうかといつときには聖慈が田を覚ました。

「あれ？ 雲なにしてんの？」

「え！？」

「俺の顔に何かついてる？」

聖慈は自分の顔を触つている。

それを見て雲はその言葉に乗る」とこした。

「せうせうー、ゴリラがつこいたからとかうと思つてたの」「え？ マジで？」

そういうつて聖慈は自分の顔を見に洗面所に行つた。

零は聖慈の後姿を見送つて安堵のため息をついた。

そして陸の手を離して夕食の仕度のため自分も起き上がつた。

零が何をつくるうか迷つていると聖慈が戻ってきた。

そしてメニューを考えている零に話しかけた。

「零。今日はどうか食べに行かないか？」

「え？」

「たまにはいいだろ。お前も毎日食事の仕度は大変だろ」

そして、聖慈と零は陸を起にして近くのファミリーレストランに行くことにした。

聖慈はステーキを、零はパスタを、陸はお子様ランチをそれぞれ頼んだ。

聖慈はメニューを頼んで回りを見渡すと一人見覚えのある男を見かけた。

向こうにも聖慈に気づいたのか手を上げてこちらに近づいてきた。

その男は彰人だった。

第一十一話 兄と妹の無意識な行動（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://biologs.yahoo.co.jp/in-th_is_sky

蘭様、誤字報告あつがとうございました

第一二三話 兄と妹の自問自答

彰人は聖慈に近づくと昨日のことをもう一度謝った。

「伊集院、昨日は本当に悪かつたな」

「もういいって」

彰人は雲の姿を見ると雲にも謝罪の言葉をかけた。

「雲ちゃんも」めんな。昨日あんな場所に連れてきて

「いえ、私が悪いんです。お兄ちゃんにも言われたけど私が行かなければよかったです」

雲は自分のせいだと、彰人のせいではないと言った。
それを聞いて彰人はまた謝罪をしようとしたが聖慈が止めた。

「雲の言うとおりだ。お前のせいではないし雲が行かなればいいだけの話しだつたんだ。今度から気をつけてくれればそれでいいよ」

彰人はそれから聖慈と一緒に話してから雲の隣に座っている陸に目を向けた。

「で、話は変わるけどこの子は伊集院の隠し子か？」

彰人はからかうように聖慈に話しかけた。

聖慈は笑いながら彰人に答えた。

「そんなわけないだろ。こいつは陸つて言って大竹先生の息子さんだよ」

「ああ～なるほどね」

彰人は聖慈と同じ高校だったのでも大竹のことも知っている。
そして聖慈と大竹の仲がいいことも知っている。
何度か聖慈に大竹と飲むから来ないかと誘われたこともある。
だが、彰人にとって大竹はそんなに仲が良いわけではないので参加
したことは無い。

彰人は自分のテーブルに呼ばれて手を振りながら戻つていった。

聖慈と零と陸は食事を終え彰人達よりも先に出ることになった。
陸を抱えてる聖慈が彰人に手を振る。
そして陸もつられて知らない彰人に手を振つてている。
零は聖慈の隣に立ち頭を下げる。
そして店を出て行つた。

聖慈達が出て行つてから彰人は友達に質問を受けた。

「えらい若い家族だな」
「ああ、それにあの夫婦。なんかもう熟年夫婦みたいに分かり合つ
てる気がするな」
「やっぱりお前達もそう思うか？」

彰人たちがそんな話をすると知らない聖慈達は仲良く自分達の
部屋に帰つていった。

部屋に帰つてゆっくりしてるとまた陸が寝た。

陸に毛布をかけてやり聖慈と零がTVを見ているとインター ホンが
なつた。

大竹夫妻が帰つてきたのだ。

寝て いる陸を渡すと大竹家族は聖慈の家には上がらず帰つていった。

聖慈と零はそれから風呂に入りそれぞれの寝床に入った。
だが二人ともすぐには眠れなかつた。

二人とも昼間の自分の行動を思い出していたからだ。

聖慈は何故零の唇に触ろうとしたのだろうか?
零は何故聖慈の顔を触ろうとしたのだろうか?

結局答えはでないまま一人は眠りについた

二人とも夢を見た。

幸せな家族を持つ夢を。

自分と子供とその隣には自分がよく知ってる人が立っていた。

第一二三話 兄と妹の自問自答（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第一十四話 妹の熱愛報道

聖慈と零が同居生活を始めて数ヶ月がたつた。聖慈と零はいつもどおりの日常を送っていた。

いつもと同じ平日の朝、聖慈と零は一緒に朝食を食べていた。ＴＶではあるアイドルの熱愛報道が放送されている。聖慈はふと思つたことを零に問い合わせてみた。

「零は誰か好きな人はいないのか？」

「え！？」

「いや、今ＴＶで熱愛報道を放送されてたから零はどうなのか気になつたんだ」

零は困惑している。

いきなり好きな人と言われても分からぬのだ。

「わかんない…」

「いないならいいよ。早く飯を食べよう」

聖慈は朝食を再開した。

零も気持ちを切り替えて食事を再開した。

ＴＶが次のニュースを読み始めた。

そのニュースが二人の運命を変える。

『伊集院零さんに恋人発覚！』

その言葉に聖慈と零は呆然としている。つこちつき話題に出たばかりで零は「分からない」と答えたのに今

ニュースで熱愛報道を放送しているのだ。

聖慈が零のほうを見ると零は未だに呆然としている。

キャスターがニュースの続きを読み始めた。

『記者によると零さんは8歳年上の社会人の人と何度もデートをしている様子で、公園で仲良く子供と遊んでいる姿を目撃された方が多くいたようです』

そのニュースを見て聖慈と零は顔を見合せた。

聖慈が零に話しかけようとしたとき聖慈の携帯が鳴った。ディスプレイには『優慈』と出ている。

「もしもし」

「もしもし！兄貴か！」

「優慈、少し落ち着け」

「落ち着いてられるか！零の熱愛報道を見たんだ。相手は誰なんだ！」

「ああー、それがなんだな…」

聖慈は言いにくそうにしている。

優慈は待ちきれないようで聖慈に答えを急かした。

「なんだよー知ってるなら早く言えよー！」

「恐らく…俺なんだ。その社会人って」

「へ？どういうことなんだ？」

「多分俺と買い物してたときを見られたんじゃないかな。子供は大竹先生の息子さんを預かったときのことだと思つ」

「なるほどね。そういうえば兄貴と零は8歳違うんだっけ」

「ああ。俺もすっかり忘れてたけど8歳違うんだよ」

聖慈は電話しながら雫のほうを見た。

雫も電話をしてくる。どうやら相手はマネージャーのようだ。
優慈が電話の向こう側から聖慈に話しかける。

「なあ、兄貴…」

「ん? どうした?」

「兄貴の出生の事とかバレないよな?」

「多分大丈夫だとは思うけど」

「そつか。バレそうになつたら連絡してくれ。こっちもなんか分かつたらまた連絡するから
「頼むな」

そういうつて聖慈は優慈の電話を切つた。

そして聖慈は雫のほうを向くと雫が手で聖慈を呼んでいる。

雫の傍によると電話を渡してきた。

「もしもし? 聖慈君? 朝倉だけど」

「朝倉さん、今日はすいません」

朝倉とは雫のマネージャーの名前だ。

雫がデビューしてから変わっていないので聖慈とも知り合いだし、
聖慈と雫が兄妹といふことも知っている。

「いや、別に構わないんだけどあの相手の社会人って」

「多分俺のことだと思います。子供は知り合いで子供を預かってきたところだと思います」

「これからどうする? これ以上隠してたらいろいろ報道が大きくなりそうだし」

「俺と雫は兄妹だって言えば大丈夫なんじゃないですか?」

「まあ、今日マスクを送るんだよ。」

「ええ、お願ひします。」

「分かったわ。じゃあまた雲に変わつてもいいえる?」

卷之三

靈は「せー、せー」と2回ほど返事をして電話を切った。

גְּדוֹלָה וְתִבְרֵגָן

「今日は学校には行かずに自宅待機だつて。明日FAXの内容を二

二二二でしたるおた電語

だらうこ

聖慈が仕事に行く準備をしてるとまた聖慈の携帯が鳴った。ディスプレイには『大竹先生』と出ている。

「もしもし、大竹先生？」

おお、聖慈か？伊集院は今田どうするんだ？」

「……………」今田は学校を休ませます。今田の「メモリーシャー」が俺と零が兄妹というFAXを各マスコミに送つてくれるので明日またその二コースを見て決めるそうです。

「そうか、今学校なんだかもうすでにマスクが来てるんだ。
あ今日は伊集院は休むんだな」

「はい、すいませんがよろしくお願ひします」

そういうて聖慈は電話を切つた。

雪に今の電話の内容を話すと申し訳なれなかったりむいた。

「みんなに迷惑かけちゃつた……」

「氣にする」と無いさ。明日兄妹つてことが分かるんだからすぐに

いつもどおりの生活が過ぐせると

そういうて聖慈は仕事に出かけた。

雲も優奈とメールのやりとりをして、クラスのみんなが「早く学校に来れるようになるといいね」と言つていると知り元氣が出たようで部屋の掃除を始めた。

聖慈が朝の騒動で弁当を忘れたので昼休みに社員食堂でとつていて彰人が近づいてきた。

「うつす、伊集院」

「よお、最近よく会うな」

「だな」

そういうながら彰人は聖慈の横の席に座つた。

「でだ。朝雲ちゃんの報道見たぞ」

「お前もか…」

「『お前もか』って他にも言わたのか」

「弟の優慈と大竹先生からも電話もらつたんだ」

「ということはあの社会人つて」

「そ、俺のこと」

聖慈は彰人に自分の家のことや朝の詳しいことを喋つた。
もちろん聖慈と雲が血のつながりがないことは言つていない。

「ふう〜ん、お前の家も大変だな」

「そうでもないよ。結構楽しくやつてるし」

「じゃあ、俺先に仕事戻るわ」

「おお」

彰人は先に食事を終え立ち上がった。

聖慈の横を通り際には声をかけた。

「何があつたら電話しな。俺が力になれることは力になるから

聖慈が彰人のほうを見ると手を振りながら去つていった。

第一十四話 妹の熱愛報道（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第一十五話 兄の嫌な予感

次の日の朝、聖慈と零は昨日と同じように朝食をとりながらTVを見ている。

今日聖慈と零が兄妹というニュースが出るはずだ。
新聞の一面紹介の時間になった。
一面に零のことが書かれていた。

『伊集院零さん、新恋人は嘘だつた?』

報道記者はニュースを続けた。

『事務所によると社会人は零さんのお兄さんだそうで、家の事情で今一緒に暮らしてます』

そのニュースを見て聖慈と零は安堵のため息をついた。
これで騒動は落ち着くだろう。

優奈からも『よかつたな』とメールも着た。

聖慈が仕事に行く準備をしていると零も朝倉から学校に行つてもいいと許しを得たようで制服を着ている。

「朝倉さんから連絡あつたのか?」

「うん。一応行つてもいいけど気をつけてねって言われた」

「そつか。もしあれなら優奈ちゃんと一緒に行動すれば大丈夫だろ」

「うん。優奈ちゃんもそのつもりみたい。今日ここに迎えに来るつ

て」

零が言った瞬間インター ホンが鳴った。

ドアを開けるとやはりそこには優奈が立っていた。

「あ、聖慈さん。おはよつゝぞります」

「優奈ちゃん、おはよう。悪いけど靈のことはもうじへね

「はい、任せてくれ」

聖慈と優奈と零は連れ添つよつて家を出た。
すぐそこで聖慈と零たちは別れた。

聖慈が社食で昼食をとつてるとまた彰人が近づいてきた。

「またお前か」

「そう言つなつて。俺なりに心配してゐんだから
「分かつてるつて」

彰人は聖慈の隣に座つた。

「でもこれで落ち着くんじゃないか?」

「そうだといいんだが…」

「何だよ?何か気になることがあるのか?」

「そうでもないんだが何か嫌な予感がするんだよ

「嫌な予感?」

「ああ、何かまだ起つたそつな」

「心配し過ぎだつて」

彰人はそういうて聖慈の背中をたたいた。

聖慈は笑いながら言つた。

「そうだよな」

「そうそう」

「そうだよな」

それから二人は彰人の恋話になつた。

聖慈は彰人が気になつてゐる女性が合コンのときから気になつていていた。

が、聖慈の予想通り彰人の好きな女性とは春美だつた。

二人の馴れ初めなどを聞きながら聖慈は彰人をからかつて笑つた。

まだ心の中にある嫌な予感を吹き飛ばそうと。

だが、その予感はずつと聖慈の心の中に残ることになる。

そして、またある報道が放送された。

第一十五話 兄の嫌な予感（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第一十六話 兄の選択

雪の熱愛報道から数週間たつた。

聖慈も雪もあれからいつもどおりの生活を送っている。

聖慈もあの悪い予感は気のせいだったのだと思い生活していた。

ある日の朝、雪は朝早く仕事に出かけ聖慈は一人で雪が準備してくれていた朝食を食べている。

いつもどおりTVをつけて食事をしていた聖慈の耳に驚きのニュースが聞こえてきた。

『伊集院雪さん、一緒に暮らしている兄は実の兄ではない…?』

聖慈はその報道に耳を疑つた。

どこから自分のことがバレたのだろう…

聖慈がそのニュースに呆然としていると携帯が鳴り始めた。

相手は『優慈』と出ている。

「もしもし、優慈か?」

「兄貴!」コース見たか?

「ああ、丁度今見てるよ」

「雪は?」

「今日は朝一の仕事が入ってるから出でてるよ。頼みは向こうでこれを聞かないことだよな」

「ああ」

聖慈はそれから一言一言話して電話を切つた。

携帯をテーブルの上に置いたがその前に違う相手から電話がかかってきた。

相手は朝倉だ。

「聖慈君？さつきのニコースはどうこう」とへ

「えっと…あのままなんですけど」

「聞いてないわよ。零も何も言わないし」

「え！？零もあのニコース見たんですか？」

「いえ、零はまだ見てないけどどうしたの？」

「零はこのことをまだ知らないんですね」

「え！？じゃあ零は聖慈君のことを」

「ええ。本当の兄だと信じてます。詳しい事情を話したいので今から会えませんか？零にはバレないようになります。それと零にはこの報道を見せないようにしてください」

「分かったわ。じゃあ…」

それから聖慈と朝倉は会つ場所と時間を決め電話を切った。

聖慈は上司にも電話を入れ、今日は休むことを伝えた。

大竹夫妻と彰人も心配してるだろうと思い、大丈夫だという事をメールで伝えた。

それから1時間後、聖慈と朝倉は近くの喫茶店で会つた。零は事務所に待たして報道を聞かせないようにしている。

「聖慈君。早速だけど詳しい事情を聞かせてもらいたい？」
「はい。親父が言つには…」

聖慈は朝倉に全てのことを包み隠さず伝えた。

聖慈と優慈、零が血のつながりが無い兄妹だということ。

聖慈が託児所から引き取られたこと。

聖慈と優慈はこのことを知っているが零はまだ教えていないこと。

朝倉はこのことを聞いて驚いている。

聖慈と優慈、そして雫は仲のよい兄妹とばかり思っていたのでござ
本当のことを見かされても信じれなかつた。

だが、聖慈の顔を見ると本当にことだと信じるしかなかつた。

「やつぱりそう簡単には信じれないわね」

「ですよね。でも本当にことなんです」

朝倉がそのことを頭の中で理解することはやはり時間がかかつた。
それほど聖慈達が実の兄妹だと疑えなかつたのだ。

「とりあえず雫のことだけ?」

「雫にはまだ伝えないでもらえませんか?」

「え? どうして?」

「自分勝手なお願いかもしだれませんがまだ雫には話す時期ではない
気がするんです。今回の報道があつたから話すんではなく、雫が落
ち着いて聞ける状況のときに俺の口から伝えたいんです」「
でも…」

「お願ひします」

聖慈は頭を下げた。

朝倉は正直困った。

このまま雫に今回の報道のことを聞かせずに生活を送るのは不可能
に近い。

だが、聖慈の気持ちも分かる。

朝倉は少し悩んだが聖慈の気持ちに答えることにした。

「分かつたわ」

「ありがとうございます!」

「ただし、今回の報道が収まるまで雫は外国の両親のところに行く

「じ。これが条件よ

「え？」

「日本にいるどどしても今回の報道が耳に入る可能性がある。でも、外国だとその可能性はグンと減るはずよ

「…」

「あとは聖慈君が決めることよ」

朝倉は席を立とうとしたが聖慈に止められた。

「待つてください。俺の答えはもう決まっています」

「そんなに時間あげることはできなにけどもう少し考えてもらいたいのよ」

「いえ

そして聖慈は朝倉に自分の答えを告げた。

朝倉は聖慈の答えを聞き、事務所に電話をかけた。

そして、電話を切つて聖慈に目配せをした。

聖慈もうなずき雲が待つ事務所に向かった。

第一十六話 兄の選択（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in-th_isky

第一一十七話 妹の旅立ち

雪は事務所で高校の勉強をしていた。

仕事の合間で勉強しないと間に合わないのだ。

雪が問題に集中していると部屋のドアが開いた。

ドアから聖慈が入ってきた。

雪はまさか聖慈が入ってくるとは思つてもみなかつたので驚いている。

「雪、話があるんだ」

聖慈はまだ驚いている雪に声をかけた。

雪はその声に正気に戻り聖慈に答えた。

「話?」

「ああ、雪。悪いけど親父達のところに行ってくれないか?」

そう聖慈が出した答えとは雪を両親のところに行かせることだった。

聖慈は雪が日本にいると傷つく可能性がある。

だから両親のところで暮らさせることを選んだ。

だが、雪はその言葉に傷ついたような顔をした。

聖慈に出て行けと言われたのだ。

当然雪は理由を聞きだそうとする。

「待つてよーーどうしてお父さん達のところに行かないといけないの!?」

「親父達からわざわざ連絡があつてな。やはり外国でお前と暮らしたいんだそうだ」

聖慈はここに来る前に外國にいる両親と連絡をとつていた。

今の日本の状況を伝え、そつち側に零を行かせることも伝えた。

最初両親も「こっち側に連れてこなしても」と言つたが聖慈の零を傷つけたくないという気持ちが伝わってきたので聖慈の頼みを聞くことにした。

両親のところに行かせる理由として「両親が外國で一緒に暮らしたい」という理由で合わる」とこしたのだ。

「私は日本にいたい！」

「駄目だ！お前は親父達と一緒に外國で暮らせ」

「どうして！」

聖慈は零が叫んでいるが部屋を出た。

聖慈が部屋を出た後部屋の中から零の泣き声が聞こえた。

零が泣いている声を聞いて聖慈も涙を零しながら後のこと朝倉に任せ事務所を出た。

そして優慈の事務所に説明をしに行つた。

優慈も聖慈の言い分を聞いて反論した。

「兄貴！何で零を親父達のところに行かせるんだよー。」

「それが零のためなんだ」

「どこが零のためなんだよー！」

「じゃあ零に全部話せって言つのかお前はー。」

聖慈が優慈の方を見る。

優慈は聖慈の顔を見て何も言えなかつた。

聖慈の顔は自分が何もできない無力感に襲われていた。

「こんな状況で零に全部話してみろ！あいつは傷つくに決まってる。でも、今親父達のところに行かせれば向こうで親父達が守ってくれ

る！俺だったらあいつを守る」となんかできやしないんだ！」

「兄貴…」

「俺だつて…俺だつてできればあいつを日本にいさせてあげたいよ！でも無理なんだ！俺だけではあいつを傷つけるだけなんだ！」

優慈は聖慈の言葉に何も言えなかつた。

「雲が日本を発つのは明日だ。優奈ちゃんと一緒に来てくれ」

そういうて聖慈は優慈の事務所を出て行つた。

優慈は聖慈に声をかけようとしたが何と声をかければいいか分からなかつた。

次に聖慈が向かつた先は智子の家だつた。

大竹は学校に、陸は幼稚園に行つてるので家には智子一人だけだつた。

聖慈は自分と雲の関係を智子に伝えた。
そして雲が明日、日本を発つこと。

「そつか。雲ちゃん外国に行つちやうのか…」

「ああ、それしかあいつを守つてやる方法が俺には分からんんだ」

聖慈が智子の家を出ようとしたとき智子が声をかけた。

「伊集院君、一つだけ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「伊集院君はそれで後悔しない？」

「…ああ。あいつを守れればそれでいいよ」

聖慈は無理やり微笑んで去つていつた。

智子はその顔を見て呟いた。

「嘘つき」

彰人には会社終了後に彰人の自宅にお邪魔させてもらい事情を話した。

「え！？お前雲ちゃんを外国に行かせるのか…？」

「ああ」

「お前が守つてやれば良いじゃないか！」

「簡単に言つなよ！俺が守れなかつたからこうこうことになつたんじゃないか！」

「だからつて…」

「あいつは親父達のところに行かせる。もう決めたんだ」

彰人も優慈と一緒に聖慈の顔を見ると何も言えなかつた。

「雲の出発は明日。よかつたら来てくれ」

そういうつて聖慈は彰人の部屋を出て行つた。

そして、次の日。

雲は日本に発つことなつた。

見送りには聖慈、優慈、朝倉、優奈、彰人、大竹家族が集まつた。

「じゃあ雲、親父達によろしくな

「…うん」

「雲、絶対メール頂戴ね！」

「…うん」

「雲ちゃん元気でな」

「…はい」

そして零の乗る飛行機の搭乗が始まった。

「じゃあ、行つてきます」

皆「元氣でな」や「頑張れ」と声をかけているが聖慈は声をかけようとはしない。

零が聖慈の目の前に来て話しかけた。

「お兄ちゃん、行つてきます」

「ああ…」

それだけしか聖慈は声をかけなかつた。

零はそのままこちら側を見ずに行つてしまつた。

零の後姿を見送つて皆が「何故声をかけなかつたのだ」と文句を言つと聖慈の方を向くと聖慈の目からは涙が流れていた。
自分は両親に零のことを頼まれた。
なのにもできなかつた。

その無力感で泣いてしまつたのだ。

その聖慈の頭を大竹が何も言わずに聖慈の頭に手を置く。
聖慈が落ち着いたのを見計らつて大竹が声をかける。

「あ、飛行機を見送つてやないじやないか

「…はい」

聖慈達が見送る中、零は外国に住む両親の元に旅立つていった。

第一十七話 妹の旅立ち（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in-th_isky

第一十八話 兄の状態

零が日本を発つてから一週間がたつた。

その間聖慈は何をするにしても失敗をしていた。

仕事に関しても日常生活にしても失敗が続いていた。
そして、未だに零がいないという生活に慣れていない。

朝起きて誰もいないのに「おはよう」と挨拶をしてしまったり、無事に料理が完成しても気がついたら一人分作っていたり、終いには無意識の内に零の姿を探すまでに至った。

そんな聖慈を心配した彰人が大竹と相談して聖慈との飲み会をセッティングした。

そして飲み会当日。

彰人と大竹と智子と聖慈が居酒屋で食事をしている。
その場でも聖慈は料理を無意識で一人分よそつてしまつた。
聖慈は自分の行動に苦笑していたが他の皆は顔を見合わせている。
これは思つたよりも重症のようだ。

「聖慈大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。少ししたら慣れますよ」

聖慈は皆に心配をかけまいと笑顔で答えた。

聖慈のことによく知つている3人はそれが嘘だとすぐに気づいた。
だが、聖慈の顔を見ると何も言えなくなつた。

2時間ぐらいで食事会は終わつたが聖慈は零がいた頃のように笑うことはなかつた。

聖慈の後姿を見送つて3人はまた話し合つた。

「先生、伊集院は大丈夫でしょつか？」

「こればっかりは分からん。聖慈の中で伊集院の存在がどれほど大きかつたかが分からないからな」

「私は無理だと思う」

彰人と大竹は智子のほうを振り返る。

智子は言葉を続ける。

「妹以外にも何か違う感情を持つてるのか私には分からぬけどそれを伊集院君が自覚しない限りはこのままだと思う」

智子は聖慈が零のことを妹以上に見ているのではないかと文化祭から考えていた。

それに、零が日本を発つ前日智子が投げかけた質問に答えたときの聖慈の顔は大事な人を失つてしまつたときに近い顔をしていた。

智子の言葉に大竹と彰人が納得した。

二人とも聖慈が零に妹以上の感情を持つてゐるのではないかと思つていたのだ。

3人は一日でも早く元の聖慈に戻るように祈るほかなかつた。

飲み会から次回の土曜日、聖慈は家で何もやる気がなく横になつていた。

横になつていると部屋のインター ホンが鳴つた。

聖慈は無意識のうちにまた声を出していた。

「零、誰か来たぞ〜」

だが、当然の如く零の声は聞こえない。

聖慈は自分が今した行動に苦笑してしまった。

聖慈は立ち上がりてドアを開けた。

そしてドアを開けて立っていた人を見て声をあげてしまった。

「零……」

「聖慈さん? どうしたんですか?」

聖慈は零と声を上げたが実際にいたのは制服姿の優奈だった。優奈が心配そうに聖慈の顔を見上げる。

「いや、なんでもない。それよりも優奈ちゃんどうしたの?」

「聖慈さん、今私と零を間違えましたよね?」

「え…、まあ」

「ならなんで零を日本に戻さないんですか?」

「まだそんな時期じゃ……」

「時期つてなんですか!!」このままだと聖慈さんのほうが先に倒れますよー。そうなると零が傷つきますよー。」

「俺なら大丈夫…」

「大丈夫じゃないから言つてるんじゃないですか!」

優奈が叫んでるところに優慈が飛び込んでくる。どうやら優慈も部屋のすぐ側にいたようだ。

「優奈、言つ過ぎだつて!」

「優慈さん、離してくださいー! 今言わないと言つ機会はないじゃないですか!」

「お前が冷静に説得するつて言つから任せたんだろー少し落ち着けつて」

優慈と優奈が言い争つてゐるときに聖慈が一人に話しかけた。

「優慈、優奈ちゃん。一人とも心配かけてごめん。でも今はまだ頑張れる気がするんだ。いや、頑張らないといけないんだ。それが俺が零にやつてられる唯一のことなんだと思つ」

「兄貴……」

「聖慈さん……」

「俺がここで頑張らないと零が外国で元気に過ごせないんじゃないかと思うんだ。そして、零を俺が無理やり親父達のところに行かせた。だから、俺はここで頑張らないといけないんだ」

優慈は聖慈の言ひ言葉に何も言えなくなつた。
だが、優奈は聖慈に自分の考えを言い始めた。

「それは違うんじゃないですか？」

「え？」

「まず、零が聖慈さんが本当のお兄さんではないと聞かされて傷つくとは限らないんじゃないですか？」

「反対に傷つかないとは限らないだろ」

「じゃあ、傷ついたとしましょう。でも、聖慈さんと離れて暮らすほうが傷つく可能性もあつたんじゃないですか？空港での零を聖慈さんはちゃんと見ましたか？」

聖慈は優奈の問いかけに首を振る。

優奈はさらに続ける。

「零はあのとき、聖慈さんに引き止めて欲しかつたんじゃないですか？なんで、零を信じてあげることができなかつたんですか？」

「それは……」

「確かに零は本当のことを聞いて傷ついてしまうかもしれない。でも、聖慈さんがその傷を癒してあげることができたかも知れないじゃないですか」

聖慈は何も言わない。

「一人で頑張らなくても零と一人で頑張るところ手もあるんじゃないですか？」

そういって優奈は聖慈の部屋を出て行こうとする。呆然と優奈を見ていた優慈も慌てて優奈の後を追う。部屋を出る前に優奈が聖慈に最後の一言を言つ。

「『零のため、零のため』って言つてますけど、それって聖慈さんのわがままなんぢゃないですか？零に本当のことを話さないのも零との接点がなくなるのが怖いからなんぢゃないですか？」

そういって優奈は聖慈の部屋を出て行く。

優慈も「ちらつ」と聖慈を一目見て出て行つた。

聖慈は呆然と優奈が言つた言葉を考えていた。

優奈と優慈は歩きながら話している。

「優奈、少し言い過ぎたんじゃないのか？」

「全然ですよ。零を傷つけたんですよ。あれぐらい言つて当然です」

「兄貴だつていろいろ考えて」

「考えたつて聖慈さんはあのままだと答えを出すことなんかできませんよ」

「答え？」

「ええ。妹がいくくなるのは兄としては当然ですよね？」

「まあ、いつかは一緒に暮らすのはなくなるだらう」

「確かに突然といえば突然ですけどそれでも、あんなに日常生活に支障がでるほどダメージを受けるとは考えません」「確かに」…。つてことはつまり

「ええ。恐らくですけど聖慈さんは零に妹以外のなんらかの感情を持つてるんだと思います。その感情が何なのか分かれば答えはおのずと出ると思います」

「優奈はもう分かつてるのか？」

「もちろん分かつてますよ。でも、これは聖慈さん自身の問題なので聖慈さんが答えを出す必要がありますから教えるわけにはいきません」

優慈は自分の彼女を尊敬した。

優慈よりもよく周りを観察している。

そして、その観察したもの自分で考え方具体的な問題と解決策を考えている。

優慈は優奈の手を握った。

優奈は突然の優慈の行動に驚いているがすぐに嬉しそうな顔をした。そして、そのまま一人は優慈の部屋に帰つていった。

第二十八話 兄の状態（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/in-thisky>

第一十九話 兄の気持ちの自覚

優慈と優奈が聖慈の部屋を出て行つてからも聖慈はずつと考えていた。

聖慈が考えているとまた部屋のインター ホンが鳴った。

聖慈は考えるのを止め、部屋のドアを開けると大竹と彰人が立っていた。

「伊集院、お前無事だつたのか！？」

「は？ 何が？」

「何がつて聖慈、お前携帯に出ないから彰人にも連絡して心配して来たんじやないか」

聖慈が携帯を見ると確かに一時間前から大竹から着信があった。考えすぎて気づかなかつたらしい。

「すいません。考え方しそぎて気づかなかつたようです」

「そうか。無事でよかつたよ。いつもなら電話をかけて出なくとも一時間も連絡してこないつていうのは無かつたから倒れたのかと思つた」

「すいません。また心配かけちゃつて」

「それよりもお前考え方つて何なんだ？」

とりあえず聖慈は大竹と彰人を家に上がりせお茶を出した。
そしてついさつき優慈、優奈との会話の内容を話した。

「へえ～、優奈ちゃんが」

「ああ、雲を外国に行かせたのは俺の我がままなのかな…」

「伊集院…」

聖慈の顔がどんどん暗くなつていく。

彰人は何と声をかけたらいにのか分からなくなつた。
彰人が大竹のほうを見ると大竹の顔が教師の顔になつていた。

「聖慈」

「はい……」

「今更そんなことを言つてどうする？」

「でも……」

「行かせた事を考えたつてもう伊集院は帰つてこないだる。じゃあ、お前はここでうじうじ悩むだけしかしないのか？」

「だから、ここで頑張ろうと……」

「そんなことを言つているといつまでたつても伊集院を守ることなんかできないよ。お前が伊集院がいる前といない後では全然違うよ。それは理解しているのだろう？」

「ええ」

「じゃあ、何故そんなに伊集院がいないとおかしいのか考えてみろ。それが分かればきっとお前がしなければいけないことは分かるさ」

聖慈は大竹の言葉について考えた。

だが、一向に答えは出でこなかつた。

聖慈の頭の中ではすでに『雲が妹』ということに囚われている。
だから、他の答えを出すことができないのだ。
それを察知した彰人が一か八か荒療治を試みた。

「なあ、伊集院」

「何だ？」

「俺雲ちゃんに告白していいか？」

彰人の言葉に大竹は耳を疑つた。

聖慈を励ましにきたのに何故零に告白などするのか。

大竹が彰人のほうを見ると彰人と目があつた。

『俺に任せてくれ』

彰人の目はそう語っていた。

大竹は何も言わずに彰人に任せることにした。

聖慈は当然彰人に詰め寄る。

「ふざけんな！お前には春美っていう人が好きなんだろ！」

「でも、俺は今零ちゃんのことを好きなんだ」

「お前みたいな奴に零を渡せるもんか…零は俺の…」

聖慈は今自分が言おうとした言葉を口に出せなかつた。

それほど聖慈自身自分の言葉に驚いている。

そして、やつと自分が零への気持ちを理解した。

「やつ…。俺は零のことが…」

今となつては優奈の言葉が理解できる。

零に本当のことと言えなかつたのは零に拒絶されるのが怖かつたから。

接点がなくなるのを恐れたのは零と会えなくなるのが怖かつたから。

大竹の言葉も理解できる。

零がいることが聖慈にとつて当然だから。

零がいることが聖慈にとつて力になつていたから。

あの笑顔を、あの声を、そして零本人を自分は欲している。

聖慈は零のこと好きなのを自覚した。

「伊集院…」

「聖慈…」

「彰人、先生。やつと分かりましたよ、俺。俺は零のことが…」「はい、そこまで」

「え？」

彰人は聖慈の声を遮った。

「その先の言葉は零ちゃん本人に言いな。俺らに言わずに」「そうだな…」

それから聖慈は優慈と優奈、智子も呼び出した。

そして、自分の気持ちを伝えた。

「皆、心配かけてごめん。俺やつと分かつたんだ。何で自分が自分じゃなくなつたみたいになつていたのかを」

「そつか。やつと分かつたのか」

「ああ」

「聖慈さん…」

「優奈ちゃん。ありがとう。君の言葉をやつと理解できたよ。零に本当のことと言えなかつたのは零に拒絶されるのが怖かつたからなんだ」

「聖慈さん。遅すぎですよ、それを分かるのが」

「じめんね、心配かけて」

「いいですよ。これでやつと元の聖慈さんに戻つたんですから」

優奈は笑つてそう言った。

聖慈も優奈の顔を見て零が日本を発つて始めての笑顔を見せた。
その顔を見て皆安堵の笑顔を見せた。

それから食事会が始まった。

聖慈が皆に心配をかけたからとお礼のつもりで開いたのだ。

その場で聖慈は皆にいつから自分が雲の事を妹以上に思つてているのを分かつたのかを聞いてみた。

「私はかなり早かつたと思いますよ。聖慈さん、雲を迎えて来たときには虫除けしたでしょ？」

「そういやしたね」

「私はあの時です」

「え？ あの時から？」

「ええ。だつて、聖慈さんあればどう見たって嫉妬ですよ。山本が雲に対しても馴れ馴れしかつたから嫉妬した行動だと私は思いましたよ。あと、「好きな人に付きまとうな」とつていうオーラも出てましたし」

「全然自覚なしだ…。智子は？」

「私は高校の文化祭だね。だつて、伊集院君ずっと雲ちゃんのことを見てたもん。だから、これはきっと何か感情があるなって」

「俺は合コンの時。俺の友達が雲ちゃんに文句言つたときにお前怒つただろ？ お前は今まであんなに女のことで怒ることはなかつたらな。最初は妹を侮辱されたからかと思つたけど、あれは自分の彼女を守る行為に似てたからな。ついでにファミレスで会つたとき、俺と一緒にいた友達はお前達のことを家族と思つてたぞ」

聖慈はどうほど自分が鈍感で無自覚だったかを思い知らされた。

そして、恥ずかしくなつた。

そんな聖慈の姿を見て皆笑つた。

聖慈もそんな皆を見て笑つた。

その日の晩、聖慈は両親に電話をかけた。

「もしもし、親父？」

「おお、聖慈か。どうした？」

「雲を迎えに行きたいんだ」

「ほお」

「兄としてではなく、雲を愛してこむ一人の男として」

「ふう～ん、やつと答えを出したか」

聖慈は最後のほうの言葉を章吾がボソッと小さく声で言つたため聞き取れなかつた。

聖慈は聞きなおした。

「え？」

「いや、とりあえずいつまで話を聞いて。いつ迎えに来るんだ？」

「明日…。いや今から行く」

「今から？」

「ああ、今から行く」

「分かつた」

聖慈は電話を切り、一番早い飛行機のチケットを予約し家を飛び出した。

その顔には今までの聖慈とは違ひ希望に満ちた顔をしている。

第二十九話 兄の気持ちの自覚（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/inth_isky

第二十話 妹の状態

零は日本を離れ両親のところに来て、毎日日本人学校に通っている。最初は何をするにしても無気力で日本を皆を思い出していた。両親も何も言わずにそつと見守ってくれていた。

だが、両親の友達の娘に誘われ日本人学校に行つてみて勉強をしている間だけ日本のことを見れることができた。だから、日本人学校に通うことになった。

その日も零は学校に通い、授業を受け帰宅していた。

「みんな、どうしてるかな…」

零はふとした瞬間に止まつて日本を思い出してしまつ。特に思い出すのは聖慈のことだった。

聖慈の部屋、聖慈の顔、聖慈の声、聖慈の何気ない仕草。それらを振り切るように零は頭を振り、また歩き始めた。だが、その足取りは重い。

零は家に帰りいつもどおり出された宿題をこなしていた。両親はどこか出かけているようで車もない。

零が宿題をしていると、玄関のインターホンが鳴った。玄関のドアを開けると同時に誰かに抱きしめられた。

零は突然のことで驚いて声を出そうとしたが、抱きしめている男の後ろに章吾と真美の姿が見えた。

一人は何も言わずに零と抱きしめている男を微笑んで見ている。零が一人に助けの目を送ると章吾が男の肩に手を置いた。

「おー、もういいんじゃないか？零も混乱してる」

男は草呂の言葉に従い抱きしめていた腕の力を緩めた。やつと男の顔が見えたとき零は驚いて声が出なかつた。抱きしめていた男は聖慈だつた。

第三十話 妹の状態（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in-th_isky

第三十一話 兄の結婚と妹の返事

日本を発つて数時間後両親が暮らしている国に到着した。空港を出ると章吾と真美が聖慈を出迎えた。

「親父…。お袋…」

「聖慈、よく来たな」

「さ、帰りましょ」

章吾と真美は聖慈を車に乗せ家に向けて車を走らせた。車の中は沈黙に包まれた。

聖慈は一人になんと言えばいいか分からなかつた。

そんな沈黙を破つたのは章吾だった。

「聖慈」

「何?」

「電話で聞いたがもう一度聞く。お前は雪のことをどう思つているんだ?」

聖慈はミラー越しに見てくる章吾と皿を合わせ自分の気持ちを伝えた。

「俺は雪のことが好きだ。もちろん妹しての気持ちもある。でも、

それ以上に一人の女性として愛してる」

「そうか。じゃあ、雪に会つてどうする?」

「全部伝えるよ。俺の気持ちも俺が雪と本当の兄妹じゃないことも

「雪が拒絶したら?」

「それでも俺は後悔しない。拒絶されたら拒絶されなくなるまで説得するさ」

聖慈の気持ちに章吾も真美も何も言わない。

そして、車は章吾と真美がこじから側で暮らす家に着いた。

今家には零しかいない。

聖慈がインター ホンを鳴らすと家中からずつと聞きたかった零の声が聞こえた。

ドアを開けると共に聖慈は無意識のうちに零を腕の中に閉じ込めた。

「おい、もういいんじゃないか？ 零も混乱してる」

章吾が言つまで零に何も伝えていないことに気づいた。

そして、ゆっくりと零が離れていくことに名残惜しさを感じながら腕の力を緩める。

零が聖慈の顔を見て驚いたような顔をしている。
零に向けて聖慈は声をかける。

「零、久しぶり…」

聖慈が声をかけても零はまだ呆然としている。

そして、まさかここまで呆気にとられるとは思つていなかつた聖慈も困惑している。

そんな一人に真美が声をかけた。

「とりあえず一人とも家に入りなさい」

真美の言葉に零がようようと家の中に入る。

その後ろに聖慈、そして章吾と真美が続けて入る。
リビングに入り4人は椅子に座つた。

お茶を一口飲み章吾が聖慈に声をかける。

「聖慈、俺達は一階にいるから」

「ああ」

そういうつて章吾と真美は一階に上がつていく。
したがつて一階には聖慈と雫二人つきりになつた。

「雫…、聞いて欲しいことがあるんだ」

「…なに?」

雪は聖慈と田もあわせないでいつむこいでいる。

聖慈は雫に顔を上げるより前に雪おうと思つたが雫も混乱してゐるのだ
るつと思ひ、そのまま続けることにした。

「雪を親父達のところに行かせたのは理由があるんだ」

「…お父さん達が呼んだからでしょ」

「それは…俺が考えた嘘なんだ」

雪はその言葉に顔を上げた。

「う…や…」

「ああ、ちゃんとした理由があるんだ。でもそれを雪に話るのは俺
が臆病だつたからあんな嘘をついたんだ」

「じゃあ、ちゃんとした理由つて何?」

「そのまえにもつと大事な話があるんだ」

「それよりも大事な話?」

「ああ、その話をする前にこのひのきの話を聞いて欲しいんだ

「じゃあ何? その大事な話つて」

聖慈の手の平には汗が滲んでゐる。

それほど緊張しているのだ。

だが、聖慈は決心して自分の気持ちを伝えた。

「霧……俺はお前が好きだ。妹としてではなく一人の女性としてお前を愛している」

「え？」

「ずっと好きだったんだと思つ。でも、俺が自覚していなかつたらお前を傷つけてしまつたかもしれない。でもこれからは、俺は霧の傍でお前を守りたい……」

霧は何が起つてゐるかわからぬようだ。

まさか聖慈が自分のこと好きだと言つてゐるのだ。

「霧……やっぱり迷惑か？」

霧は聖慈の声ではつとじつて、霧は自分の気持ちを伝えてきた。

「私も！私もお兄ちゃんのこと好きだよー。ずっと前から一人の男の人として好きだった……」

霧は涙を流しながら叫ぶように叫つた。

聖慈は立つて霧を抱きしめた。

「いいやんな。今まで気づかなくて」

「いいやん……」

聖慈は霧が泣き止むまで抱きしめて頭を撫でていた。

霧が泣き止んだのを確認して聖慈は自分のことを話すことにした。

第三十一話 兄の妹と妹の返事（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in-th_is_sky

第三十一話 兄妹から恋人へ（前書き）

この話は法律の話がちょっと入ってきます。
が作者はよく知らないので適当で書いています。
ですから、読者の皆様も特に気にしないで読んでくださいとあります。
たいです。
質問をされても答えることはできませんので」「了承ください

第三十一話 兄妹から恋人へ

「雲……」

「何?」

「実は……俺お前の本当の兄貴じゃないんだ」

「……知ってる。ずっと前から知つてたよ」

「え! ?」

聖慈は雲が言つた言葉に耳を疑つた。

知つている……

いつから…?

「お前知つてるっていつから…?」

「お兄ちゃんが優慈兄ちゃんに伝えてたとき。あのとき私も聞いてたの。うつすらだけど」

「あの時に……」

「それから……少し前に戸籍を見たときにお兄ちゃんのところに『養子』って書いてたから……」

「……。お前を外国に行かせたのはそれが報道されたからなんだ」

「え?」

「お前に拒絶されるのが怖かったんだと思う。だから、聞かせないように親父達のところに行かせたんだ」

「……」

「……めんな。俺の勝手な判断でお前に寂しい気持ちをさせた」

「ううん! 大丈夫だよ」

「一緒に日本に帰ろう! そしてまた一緒に暮らす! 」

「うん! 」

聖慈と零はまた抱きしめあつた。

そして顔と顔を近づけお互の唇を合わせた。

そこに章吾と真美の声が聞こえた。

「ラブ・ラブだな…」

「ラブ・ラブよね…」

「え！？」

「母さんや、今の見たかね？」

「ええ。はつきりとこの田で見ましたよ」

「親父！？お袋！？」

「いつからそこに…？」

「え？ いつからって」

「零が聖慈のことを知つてたって伝えたときから…」

「そんなとこから」

「…恥ずかしい」

聖慈と零は顔が真っ赤になつた。

それを見て章吾と真美は笑みを零した。

それから、4人で食事をした。

聖慈は両親に自分の戸籍について質問した。

「なあ、親父。俺の戸籍つて除けることはできないのか？」
「すでに除けてあるよ」

「へ！？」

「零がここちに帰ってきたときに実は優慈に頼んで除けてもらつていたんだ。絶対こうなると思ってたからな」

「そうよ。もつと早く迎えに来ると思ってたのに遅いわよ。もつ少しで強引にくつつけようかと思つたわ」

「じゃあ…」

「ああ、お前ら一人が将来結婚したいと言つても問題ないぞ」「いや、そこまで」

「あー、聖慈は霊と結婚したくなーいの?..」

「もうじやなくて、今はそういうことまで考えたくないんだ」

「どうこいつ」とへ..」

聖慈は霊の田を見て話す。

「結婚も大事だけど今は霊と一緒に一日一日大切に過ごしていきたいんだ。結婚はその日々を過ぐしてこうちに見えてくるものじゃないかな」「お前の言い分は分かった。だが、俺らが生きてるうちにしてくれよ」

「そこまでは待たさないよ。とにかく俺が我慢できない」

「ラブラブだな...」

「ラブラブよね...」

「なんだよ、わから」

聖慈は照れくさうに笑った。

食事を終え、明日の朝一で聖慈と霊は日本に帰ることにした。明日に備えもう寝ることにした。

「明日も早いしもう寝るか」

「そうだな。俺は同じで寝ればいいんだ?..」

「もちろん霊の部屋よ」

「何言つてんだ!..」

「何言つてゐるのよー..」

「恋人同士なんだから当たり前でしょ?..」

「馬鹿言え!..」

「何考えてゐるのよー..」

聖慈と零は顔を真っ赤にして反対している。

いざ恋人同士になつてもまだ初々しい二人に真美は笑みを零した。
真美の暴走を章吾が笑いながら止める。

「その辺にしどきなさい。二人とも顔を真っ赤にしてるだろ」

「だつて面白いんだもん」

「人をおもちゃにするなよ……」

「聖慈は一つ部屋が余つてるからそこを使え。布団は用意してあるから」

そう言つて章吾と真美は寝室に入つた。

に入る前に爆弾を一つ落として。

「恋人同士ですることは日本に帰つてするんだよな?」「ちゃんと避妊するのよ」

そういうてドアを閉めた。

残つた聖慈と零は顔を見合せたがすぐに目をそらした。

「…おやすみ」

「…おやすみなさい」

二人は顔を赤くして自分達の寝室に入つた。

四人は朝早く空港にいた。

朝一の飛行機で日本に帰るからだ。

そして、乗る飛行機の搭乗が始まった。

「じゃあ、また」

「またね」

「ああ、聖慈」

「うん？」

「今度こそ頼むぞ」

「ああ」

聖慈は雲の手を優しく握る。
雲も聖慈の手を握り返す。

「この手をもつ離さないよ」

「そうか」

「それを聞いて安心したわ

「雲、じゃあ行こうか」

「うん」

そして聖慈と雲は日本に戻った。
兄妹としてではなく恋人として。

第三十一話 兄妹から恋人へ（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第三十二話 妹の記者会見

聖慈と雲が空港に到着すると雲を見送りしたメンバー、優慈、優奈、朝倉、彰人、大竹家族が迎えてくれた。

二人が近くに行くと優奈が雲に泣きながら抱きついた。

「しづく…」

「優奈ちゃん、ただいま」

「おかえり…」

優奈は泣いたまま雲に抱きついている。

雲は優奈の背中を撫でている。

聖慈は他のメンバーに声をかける。

「ただいま」

「おかげり」

「ちゃんと連れて帰つてきたな」

「ああ」

優奈が泣き止んだのか優奈と雲が聖慈達のほうに近づいてきた。

「優奈ちゃん、もういいのか?」

「ええ。またいつでも会えますから」

「そうだな。これからはいつでも会つことができるんだから」

「しずくねーちゃん!」

「陸君。久しぶりだね」

「しずくねーちゃん。ボクのおよめさんになつてよ」

「えつと…」

雪は急に誰かに引き寄せられた。

雪は引き寄せた人の顔を見たら聖慈だった。

「陸。悪いけど雪は俺の大事な人なんだ。お前には渡さないよ」

満面の笑みで陸に話しかける。

陸は悔しそうにしている。

他のメンバーは呆然としている。

「兄貴つて…こんなキャラだつたっけ?」

「私もこんな聖慈さん初めて見ました…」

「まあ、いいんじゃない」

「そうだな」

「やつとこれで一段落ね」

「一段落着いてないわよ」

朝倉の言葉に皆が朝倉のほうを向く。

「そうですね。まだ世間には何も言つて無いですし」

「どうするの?聖慈君はどう考えるの?」

「雪とも話し合つたんですけど、全てを打ち明けることにしました」

「全てつて?」

「俺と雪が本当の兄妹ではないこと。そして、俺達一人が恋人同士だということ。隠してたつていづれバレるんですから今話すべきだと思ったんです」

「じゃあ、今日の午後に会見を開いてもいいのね?」

「はい、私達のことを全て話します」

それから朝倉は事務所に戻つていった。

社長と相談してまた詳しい場所と時間を決めて連絡してくれる「うし

い。

とりあえず聖慈達は聖慈の部屋に行くことにした。
大竹と彰人は仕事に戻つていったが。

「ただいま…」

「零、おかえり」

零が呟いた言葉に先に入つていた聖慈が答えた。

その言葉に零が泣きながら聖慈に抱きついた。

聖慈も零を優しく抱きしめる。

そんな一人を皆優しく見守つている。

それから食事をしてみんなで久しぶりの話に華を咲かせていると朝倉から電話があった。

会見場が準備できたので聖慈と零一人で来て欲しいといつことだつた。

「じゃあ、行くか

「うん」

聖慈と零は残りのメンバーに留守番を任せ会見場に出かけた。

あの報道から何日間も姿を隠していた伊集院零が会見を開くということですべてカメラが何台も入つていた。

控え室には朝倉と零の事務所の社長が待つっていた。

「朝倉さん、社長」

「社長さん、このたびはすいませんでした」

「いや、気にしないでいいよ」

「え?」

「零は小さい頃から見ていたからね。もう娘みたいなものなんだ。

だから、雲を傷つけたくないっていう君の気持ちはよく分かるよ

「社長…」

「ただ、一つ文句を言つなればもつと早く言つてほしかったな」

「すいません」

「うん。次からは言つてね」

「はい」

「社長、雲。もう時間です」

「じゃあ、雲行こうか」

「はい」

社長と雲が会見場に向かう。

聖慈と朝倉は控え室で二人の様子を見ている。

社長と雲が会見場に入ると一斉にフラッシュが光る。
そして、雲の会見が始まった。

「この間報道されたことについてですが事実です。現在一緒に暮ら
している兄とは血のつながりはありません。そして、現在その男性
とお付き合いをしています」

「では、義理の兄と交際関係にあるといつことですか？」

「いえ、もう義理の兄ではないんです」

「どういふことですか？」

「実は両親がすでに兄を戸籍から抜いてくれていたんです。ですか
ら、私と兄はすでに一人の男と女だということです」

「ですが、元々は兄と妹ですよね？」

「はい。その事実は消えることはありません」

「社長さんはそのことについてどう思いますか？」

「特に何も思いません」

「何故ですか？元々兄妹の一人が交際をしてるのですよ？」

「だからどうだと言つんですか？誰かを好きになるのにそんなこと

を気にしていたら何もできないと思います。雲は彼を兄だから好きになつたわけではありません。彼も同じように妹だから好きになつたわけではありません。ですから私は彼らを応援して行きたいと思います」

「私達は世間の皆様から何と言われても交際を続けていくつもりです。ファンの皆様には申し訳ありませんが私の気持ちを伝えたいので会見を開かせてもらいました」

そういって雲と社長は会見場から控え室に戻つてきました。

雲は聖慈の姿を見ると胸に飛び込んだ。

聖慈も雲を優しく抱きしめた。

「雲、よく頑張った」

「うん」

「社長さんもありがとうございました」

「いや、大変なのはこれからだよ」

「ええ。ですが覚悟の上で会見を開いてもらつたんです。社長さんのほうこそ大丈夫ですか？」

「なんとかなるさ。さ、朝倉。私達は事務所に戻ろつ」

「分かりました。聖慈君。裏口に車を用意してるからそれを使って」「ありがとうございます」

聖慈達は朝倉が用意してくれた車に乗り込んだ。

その車で聖慈のマンションに着いて部屋に入ると優慈達が出迎えてくれた。

それから夕食を食べ少し話をして皆帰り、聖慈と雲一人つきりになつた。

聖慈は雲の隣に座り肩を抱き寄せた。

「雲、今日は大変だったな」

「ううん。でもやっぱつちよつと疲れたかも」

「時差ボケもあるから今日は早めに寝ようか？」

「うん、やうだね。明日も何かあるかもしないし」

そうして、聖慈は自分の部屋に向かおつとしたが何かに引っ張られた。

そつちのまつを向くと雲が聖慈の服を掴んでいた。

「雲っ…びつった？」

「えつと…一緒に寝ちや黙田…？」

「えー…こや、まだ早いんじや…」

その聖慈の言葉に雲は慌てて自分の言葉の意図を云えた。

「違うの…そつじやなくて…」

「そつじやない？」

「深い意味じやなくてただ一緒に寝たいの」

「つまり昔みたいに抱きしめて寝たいと？」

「うん。日本に帰ったことを実感したいの」

聖慈は困惑した。

これはある意味生き地獄だ。

だが、雲は上目遣いに聖慈を見てくる。

この目に弱い聖慈は〇〇を出すしかなかつた。

そして、聖慈が先に布団に入り後から雲が聖慈の胸に顔をつけるように入ってきた。

聖慈は平常心を保とうと必死だが、雲は嬉しそうしている。

聖慈が平常心を保ちながら雲の頭を撫でていると雲はいつの間に間に就いていた。

雲の頭に口付けを落とし、聖慈も眠りに就いた。

第三十二話 妹の記者会見（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第三十四話 妹のファン

次の日、雲の記者会見のニュースが放送された。そのニュースに関するメンテーの意見は2通りだった。

『兄妹の交際など認めるわけがない』

とこうの意見。そして、もう一つは

『隠さずに伝えたこと。これはすばらしい。応援したい』

とこうの意見。

聖慈と雲もこのニュースを見て心強かった。

まさか、自分達のことを応援してくれる人がいるとは思っていないかったのだ。

もつとたくさんの人に認めてもらいたいことではないだろう。だから、二人は今できることをしようとした。

聖慈は仕事へ、雲は学校へ行った。

聖慈は仕事で今までの失敗を取り戻すようにいつも以上に働いた。雲も学校でいろんな生徒から白い目で見られたが優奈、夏美が雲にいつもどおり接し、雲もいつもと変わらない笑顔を見せた。最初は白い目で見ていた生徒だが、その日が終わる頃には前と一緒のようになに接していた。

そんな生活が一週間続いた。

雲はやはり芸能生活は続けるのが難しくなった。

一度マイナスのイメージがついた女優が仕事をするには芸能界は厳しきぎだ。

だから、雲は社長や朝倉と相談してサイン会を開くことにした。
そこでノルマを決めて、それを越せば芸能生活を続け、越せないなら芸能界を引退することにした。

そして、サイン会当日が訪れた。

その日は休日なので聖慈、優慈、優奈、彰人、大竹家族と勢ぞろいしてそのサイン会を見守ることにした。

会場の中に何人人がいるかは皆まだ知らない。

雲がドアを開けた。

そこには、今まで以上のファンが詰め寄っていた。

ファンは雲を応援してくれていた。

『雲ちゃん～、頑張って～！～』

『雲ちゃん、応援してるよ～！』

雲はファンの声援に涙を流した。

聖慈は雲のそばに走り寄り、雲を抱きしめた。

聖慈へのファンの声援が聞こえる。

『雲ちゃんを大切にしろよ～！～』

『雲ちゃんを泣かしたら殺すぞ～～～！』

聖慈はマイクを手に取り、雲のファンに向けてしゃべった。

「もちろん雲を大切にする！泣かせたりもしない！だから俺達のことをこれからも応援してくれ！」

雲も聖慈からマイクを受け取り、ファンに向けてしゃべる。

「私のわがままにこんなことになつて」めんなさい。でも、私はお

…聖慈さんと一緒に生きていたいんです！ですから私達を見守つてください！」

雪の言葉にファンが答える。

『もちろんだ…！』

そして、サイン会が開始された。

雪がサインをしている横で聖慈は立つてファンに一言一言話しかけている。

中には聖慈を殴つたり、肩を組んだりしてくるファンもいた。

サイン会が終了した後もファンの交流が終わることがなかつた。

優慈も加わり、今まで優慈と雪が兄妹ということは公表されなかつたがいい機会だからとこの場で公表した。

この事実もまたファンは驚いていたがすぐに受け入れてくれた。予定された時間を過ぎてもファンは帰らずに聖慈と雪を応援してくれた。

第三十四話 妹のファン（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

第三十五話 兄妹から恋人、そして…

それから2年後。

ある場所に聖慈はいた。

聖慈はタキシード姿で椅子に座り、その周りには優慈、章吾、大竹、彰人がいた。

「聖慈、緊張してるんじゃないかな？」

「緊張？そりゃあ少しはするよ」

「それよりも結構早かつたな」

「何が？」

「この日が来るのがさ。もう少しがかるかと思つたんだが」

「これでも我慢した方だよ。なんとか零が20になるまではと思ってたからね」

「それにしてもこれで本当に聖慈と優慈、それに伊集院は本当の兄妹になるんだな」

「そつか。今考えたら兄貴は俺の弟になるのか…」

「これからよろしくな、優慈お兄ちゃん」「

「それだけはやめてくれ…。寒氣がする…」

そんな二人のやりとりに章吾と大竹と彰人は笑つた。
つられて聖慈と優慈も笑つた。

5人の笑い声が響くドアから真美、優奈、智子、陸が入ってきた。

「あら、楽しそうね」

「まあな。どうだった、零は？」

「内緒よ。ね、優奈ちゃん」

「そうですね。多分聖慈さん、我慢できなくてその場で襲つちゃう

んじやないですか？」

「なんとか我慢するよ…」

それから今度は章吾と優慈が零の控え室に向かっていった。聖慈は真美や優奈にからかわれている。係りの人気が時間を伝えにきた。

聖慈はたくさんの人まつ教会で自分の大切な人が入ってくるのを待っていた。

その間今までのことを思い出していた。

兄妹として育つた一人。

そこからたくさんの人助けを借りて恋人同士となつた一人。ファンに見守られ今日の日を迎えた。

聖慈が思い出していると教会のドアが開いた。

そこには章吾とウェディングドレス姿の零が立っていた。

二人は兄妹から恋人へ、そして今日夫婦となつた。

第三十五話 兄妹から恋人、そして…（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in-th_isky

これで本編は終了です

ここまで読んで頂いてありがとうございます
これが私の小説処女作になります

構成がめちゃくちゃなので読みにくかったと思いますがここまでお付き合いいただきありがとうございました
セリフが多くすぎて読みにくかった話もあつたと思います

これから番外編としてバレンタイン企画などの続をこの一人を中心にして行きたいと思つてます

そちらのほうもお付き合いしていただけるとありがたいと思います
番外編はネタが出来次第更新していきたいと思います

余裕があればスピノフも書いていければ良いなと思っています

カップリングは優慈×優奈、大竹×智子、彰人×春美（？）とあります
が、馴れ初めなどは考えたことはないのでどうしようかと思つてます

違つ話も更新していくないと考えています

こちらは高校生×高校生で書いて行きたいと思つています
が、もうすぐで社会人になるのもしかしたら途中で終わってしまう可能性もあります…

それでもよかつたら読んでください

構成としては今回みたいにずっと続くのではなく出会いを書いて後

は短編で書いていつて最後に恋人にして終了にしようかと考えています

こちらは3月ぐらいから投稿していきたいと思います 未定ですの
であまり期待しないでくださいね

そちらでも、できれば聖慈と雲を出して行きたいと思っています
たとえば雲と同じ高校とか、そういう設定にすれば不可能ではない
ので、よければ楽しみにしていてください

それではお付き合ひありがとうございました
恐らくまた2月14日に投稿すると思いますのでよろしくおねがい
します

バレンタイン企画、08

今日はバレンタインである。

聖慈が食堂で零の手作りの弁当を食べていると彰人が近づいてきた。

「よお、伊集院」

「うつす」

そして聖慈の横に座り聖慈が食べている弁当を見る。

野菜と肉がバランスよく入つており、彩りも鮮やかな弁当だ。

「相変わらず零ちゃんの弁当はおいしそうだな」

「『おいしそう』じゃなくて『おいしい』んだ」

「はいはい、『じきそうさま』」

彰人は聖慈の言葉に笑いながら言った。

聖慈も彰人に釣られて笑った。

彰人は聖慈に気になることを聞いてみた。

「お前にくつもらつた?」

「何を?」

「え? お前今日何の日か分かってねえの?」

「今日?」

聖慈は今日が何日か考えた。

今日は確か一月の十四日。

「そりいや、今日はバレンタインだっけ…」

「お前にチョコ持つて行った女子社員いたんじやないか?」

「ああ、来たな。けど、バレンタインって知らなかつたから『いらない』って言つて返した」

「うわ！？お前最悪だな」

「つむせえ。知らなかつたんだからしょうがねえだろ。まあ、でも知つても『いらない』って言つて返したと思つた」

「なんで？」

聖慈は彰人にその理由を話し始めた。

聖慈が大学生のとき、零が中学生のときのことだ。

聖慈は大学でバレンタインのチョコレートを食べきれないほどもらつたことがあった。

そのチョコレートを聖慈は実家に持つて帰つた。

聖慈が家の玄関を開けたら零が走つてきた。

家に帰ることをあらかじめ電話していたから待つていたのだ。

「お兄ちゃん。おかえり」

「ただいま。零、これやるよ」

「何これ？」

零が聖慈から手渡された袋を開けるとそこに入つていたのはもちろん大学でもらつたチョコレート。

零は甘いものが好きだから喜ぶだろうと思つていた聖慈だが零の顔は見る見るうちに暗くなつていった。

「零？どうした？」

「え？ つむせ、ありがと」

零は袋を持つて自分の部屋に戻つていった。

聖慈はその後姿を首を傾げながらリビングに入った。

そこには章吾と真美がお茶を飲んでいた。

「親父、仕事は？」

「ん？ 休んだ」

「いいのかよ。そんなホイホイ休んで…」

「馬鹿言え。俺は重役だぞ」

「だったらなおさらなんじやねえの…」

聖慈は章吾と話しながらリビングのソファーに座る。真美はお茶を入れて聖慈の前に置く。

聖慈は「ありがと」とお礼を言つて口に含む。

「せういえば聖慈、零は？」

「ああ、自分の部屋なんじやない」

「零からもらつた？」

「へ？ 何を？」

聖慈の言葉に親二人は顔を見合させた。

「あんた零に何かした？」

「別に」

「ホントか？」

「だから別に何もしてないって。むしろ喜ばれると思つんだけどな

「何で喜ぶの？」

「大学でもらつたチヨコあげたんだよ」

「「原因はそれだ～～～！」」

聖慈の言葉に両親は声を揃えて叫ぶ。

その両親の様子に聖慈は驚いた。

「急にどうした？」

「あんた零にチヨ「あげたの？」

「ああ、食こきれなこし零は甘こもの好きだろ？」

「聖慈、お前は本当じびつともないやつだな……」

「はあ！？」

「零に謝つてきなさい…」

「何でだよー！」

「いいからー謝るまでもこの家に今後一切あげないわよー！」

「はあ！？」

「いいから早く行くー！」

真美の言動に意味が分からない。

だが、真美の顔を見るとマジだ…

章吾の顔もマジだ…

聖慈は意味が分からぬがとうとあえず零に謝りに零の部屋に向かおうとした。

リビングを出よつとしたとき、真美が一言聖慈に声をかける。

「あんた零の部屋に行く前に台所に行きなさい」

「は？ 何で？」

聖慈は台所に向かう。

台所からは甘い匂いが漂つていて、聖慈は台所を歩いて回る。流しにおいてあるボウルから甘い匂いがある。

「あやか…」

聖慈はダッシュで雫の部屋に向かつ。

その足音を聞いて章吾と真美はため息をついた。

聖慈が雫の部屋を開けると雫はベッドに横になっていた。急にドアが開いたので雫は驚いたが開けたのが聖慈だったのをさうに驚いている。

「ちょっとお兄ちゃん。ノックぐらいしてよ」

「雫」

「何?」

「チヨコ頂戴」

聖慈がいきなり部屋に入ってきたときなりチヨコをくれと言に出した。

雫は意味が分からぬ。

とりあえず雫は聖慈からもらつた紙袋を渡した。

「はい、ひとつもまだ食べて無いよ」

「これはいらないの」

「え? だつて今チヨコ頂戴つて…」

「まだあるだろ? 雫のところには?」

「…ないよ」

「ふう〜ん」

聖慈はそれが嘘だと気づいた。

えらい意地固になつてゐるな…

さて、どう攻めるか。

聖慈が雫の部屋を見渡すと机の上に何か乗つてゐる。

あのサイズは…

聖慈はニヤリと笑い雫の机に近づいていく。

雪はそれに気づかない。

そして、聖慈は雪の机の上のものを手に取り雪を呼ぶ。

「なあ、雪

「…何?」

雪はまだそっぽを向いている。

「これなんんだ

「え?」

雪は聖慈の方を向く。

そして、聖慈の手の中にある箱を見て驚いた。

「返して!」

「これ何か教えてくれたら返すよ」

「…チョコ」

「え? 何だつて?」

聖慈は一ニヤ一ニヤしながらもう一度聞きなおす。

「チョコだつてば!」

「やつぱりチョコあるんじやないか

「これは他の人にあげるの!」

「…それって男か?」

「いいじやない! お兄ちゃんにはあんなに一杯チョコあるんだから

「あれよりもこっちのほうが俺は欲しい

「あれをあげた人たちがかわいそうだよ」

雪の気持ちも分かるが、聖慈は何故だか分からぬがこのチョコを

雲が他の誰かに渡すのが不愉快に感じた。
どうにか雲からチヨコをもらいたい。

聖慈は今その気持ちで思考を開始した。

一つの考えが浮かんだ。

「分かった。来年からは一個ももらわない」

「え？ 何でそんなことになるの？」

「だつて、もらつてもかわいそつだろ？ 僕には気持ちないんだし」

「まあ、そりやそつだけど」

「だから、来年から僕にちゃんとくれよ。一個もないとか嫌だから」

なんでそういうことになるんだろう…

雲は意味が分からぬ。

が、聖慈は笑顔で雲に微笑みかけている。

その顔を見たら何も言えない雲だ。

雲は自分の手の中にあるチヨコを見た。

「…はい」

「え？ いいのか？」

「いいのー」

「マジー？ サンキュウ～」

聖慈はさらに笑顔になった。
雲もその笑顔を見て笑った。

彰人は聖慈の話を聞いて呆然としている。
が、聖慈は昔に浸っているのか気づかない。

「あれから雲にチヨコもらつたために他の人からはチヨコもらわなく

なつたんだ」

聖慈は彰人のほうを向いてやつと彰人が呆然としているのに気づいた。

「彰人、どうした？」

「お前本当に鈍感なんだな…」

「え？ 何が？」

「お前そのときから零ちゃんのことが好きなんだよ」

「はあ？ それはないだろ。だつてあの時零は中学生だぞ」

「じゃあ、何でお前は零ちゃんが他の人にチヨコを渡すって言つた

とき不愉快に感じたんだ？」

「え？ それは… なんでだろ」

彰人はその聖慈の言葉にため息をついた。
聖慈はムツとした。

「じゃあ、お前は分かるつていうのか！」

「嫉妬に決まってるだろう」

「は？ 嫉妬？」

「そ。お前は零ちゃんがチヨコをあげるつて言つた男に嫉妬したの」

「そうなのか？」

「と俺は思うけどね。ところで今日ももういつのか？」

「え？ さあ、どうだろ？」

「『どうだろ？』とか言いながら顔は自信満々だぞ」

「だつて恋人だし。そういうお前はどうなんだ？」

「ど、どうでもいいだろ！ じゃ あな！」

今度は聖慈が彰人に詰め寄つたが彰人は逃げ出した。

聖慈はその後姿を笑いながら見送つた。

そうか、今日はバレンタインだ。

毎年零からもりあつてゐるから今年ももりあつたんだね。

聖慈はやる氣が出た。

さつわと仕事を終わらせて家でゆくつてしまつ。

聖慈が仕事をはじめるために自分の机に行くと隣の奴が雑誌を見て
いた。

その雑誌の特集を見て聖慈はあることを決めた。

その特集とは…

零は学校が終わるとすぐに家に帰つた。

昨日は聖慈がいたのでチョコを作ることができなかつたのだ。
優奈がチョコを優慈に渡したいから作り方を教えてくれと言つてき
たので一緒に作ることにした。

優奈と零は手を動かしながら話をしている。

時々零が優奈にアドバイスをしているが一人とも楽しそうだ。

「ねえ～、零？」

「ん～、何？」

「去年も一昨年も聖慈さんに送つてたんですけど？」

「うん」

「いつからあげてるの？」

「え～と、私が中学生のときからかな」

「それって義理で？」

「ううん、本命だよ。お、じゃなくて聖慈さん以外には今まであげ
てないもん。義理は優慈兄ちやんとお父さんにおあげるけど」

零は聖慈と付き合つてからになつて『お兄ちやん』から『聖慈さん』

と呼ぶようにしていい。

まだ慣れていないようだが。

「へえ～、じゃあそのときから聖慈さんのこと wissen?」

「うん。もうそのときには聖慈さんのこと知つてたかい。聖慈さんはそれが本命とは知らなかつたと思つけど」

「聖慈さん鈍感だもんね…」

「うん…」

「でも、恋人同士になつたんだしねえ？」

「う～ん、多分聖慈さん今日がバレンタインつてこと自体忘れてる気がするんだよね」

「さすがにそれはないんじやない？」

「去年だつたかな、朝に渡したら忘れてたもん」

「…鈍感だね」

「…鈍感だよ」

それから作業に戻つて夕方にはチョコレートも完成した。優奈はこれから優慈とデートで着替えに帰つていった。零は夕食の仕度を始めた。

もつちぐタ食が完成するとこついで聖慈は帰つてきた。

「ただいま～」

「あ、おかえりなさい」

「晩飯できる?」

「もう少しだよ」

「腹減つてるから早くしてくれ

「はいはい」

聖慈は着替えに自分の部屋に入つていった。

零は夕食の仕度を続けた。

「いつチヨン渡そつ..」

零がそのタイミングを考えていると部屋着に着替え終わった聖慈が零に話しかけてきた。

「零？」

「え？ 何？」

「いや、何かボーとしてたけど大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫だよ。ご飯出来たから悪いけどお皿準備してくれる？」

「ああ、分かった」

聖慈は食器棚から必要な皿を取り出して零に渡した。
渡されたお皿に料理を盛り付けテーブルに置いた。

「さ、食べるか」

「うん」

「「いただきます！」」

二人は今日あつたことをこつもと一緒にのよつに話しながら食事を終えた。

零は洗い物をして、聖慈はその横で零が洗つたお皿を拭いている。
洗い物を終え、聖慈は風呂に入った。

零は冷蔵庫に冷やしてあるチヨンを取り出し聖慈が風呂から上がつてくるのを待つた。

風呂場から物音がする。

聖慈が風呂から上がつてきたようだ。

風呂から上がつた聖慈は冷蔵庫に近づき牛乳をコップに入れ飲み干した。

牛乳を直した聖慈に零が話しかける。

「お、聖慈さん」

「ん、どうした？」

「えつと…」「れ」

「雪。これは何かな？」

聖慈はもちらんこれが何だか分かつてゐるが雪にその名称を答へさせたいようだ。

意地悪な笑みを浮かべて雪に問いかけてゐる。

「聖慈さん、最近意地悪になつてきてない…？」

「そんなことない、そんなことない」

「CMで言つてるじゃない。人間本当のことは一回しか言わないつて…」

「そんなの嘘だよ。それよりもこれは何かな？」

「チョコ…」

「ん？」

「チョコだつてばー今日はバレンタインだからー」

「ん、ありがとな」

聖慈は笑みを浮かべて雪の頭を撫でる。

雪は不機嫌に聖慈のなすがままになつてゐる。だが、心地いいのか段々笑顔になつてきた。

聖慈は雪の頭を撫でるのをやめ、自分の部屋に戻りカバンからあるものを取り出し雪の元に戻つていった。

「じゃあ、これは俺から

そういうつて聖慈は雪の手の前に小さいラッピングされた箱を出した。

雪は聖慈の顔をうかがいながらそれを受け取つた。

「聖慈さん、これは？」

「ん？俺からのプレゼント」

「え？どうして？」

「いいから開けてみな」

聖慈に言われた雲はプレゼントを開けてみる。その中にはネックレスが入っていた。

雲は驚いて聖慈の顔を見る。

聖慈は照れながら事情を説明する。

「今日隣の奴が見てた雑誌に載つてたんだ。外国では男性からも女性にプレゼントを贈るって。付き合いだして雲にプレゼントしたことを無いし、いつも雲には助けられてるからお礼も兼ねてプレゼント」「で、でも…」

「でも、とかはいらない。俺が欲しいのは一言だけ」

雲は笑顔で聖慈の胸に飛び込む。

「ありがとーお兄ちゃんー！」

「うん。その顔が見れただけで十分！ただ、俺の呼び方は『お兄ちゃん』じゃなくて『聖慈さん』だろ？」

「あ、まだ慣れなくて…」

「早く慣れてくれな」

そういって聖慈は雲に顔を近づける。

雲も手を開じて聖慈のほうを向く。

そして、お互いの脣を重ねた。

バレンタイン企画、08（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いてあります
興味があればお越しください

URL

http://biologs.yahoo.co.jp/in_th_is_sky

リクエストなどもありましたらブログのほうかメッセージをいただけましたら私の文書でよければ書かせていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5468d/>

家族or兄妹orカップル？

2010年10月9日07時41分発行